

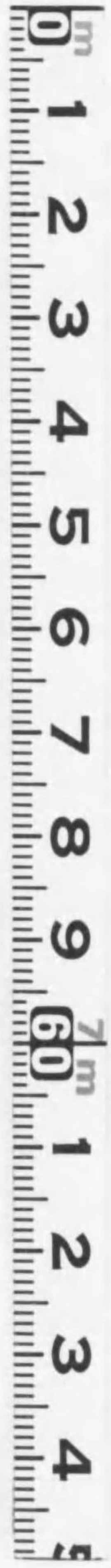


F83-C37ウ



1200500765288

F83
C37

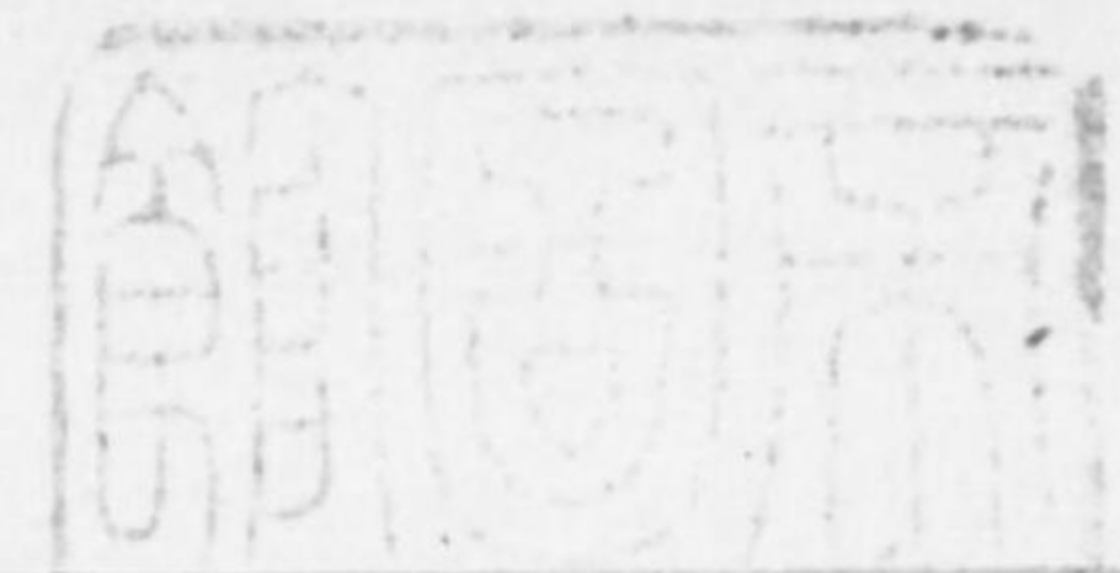


始



F83

C37



集 小 說 園 田 木 一 千



譯 序 俊 慶 秋



1013

7

序

アントン・パヴロヴィッチ・チエーホフ！

一たび、わが親むべきチエーホフの作品に觸れ、一たびその作品の微妙な印象と蕭やかな香気と、人間に對する深甚な愛情と、生活のあらゆる傾向についての鋭犀な穿鑿と、頽廢、不信、嬌飾、虚弱、混迷等々、人間のあらゆる缺陷や苦惱に對するチエーホフの悲哀と嘆息とに觸れたものは、誰しも、いつまでも、その浸透する感銘を忘れることはできない。いつになつても、思ひ出すごとに新らしく、温かに、懷味を持たずにはゐられない。そして、いつでも、いつまで經つても、チエーホフの藝術は、われわれの身邊にあり、親み深い。いかなる社會情勢にあつても、いかなる時代がめぐつて來ても、いつも輝かに新しい。

われわれには今、悲むべきか歡ぶべきか解き難いやうな世紀が來た。人々は混亂低迷の生活にしたいげられ、自由と幸福の道程にのぼりつゝも、虚脱、困憊の惱みを惱みつゝ彷徨ふてゐる。チエーホフの藝術が、怪しくも美しい暗夜の星座のやうに、燦然たる光輝を放つた頃から、偉い

なる革新の世代へと飛躍した一八九〇年代に至る露西亞の生活は、凡てが崩壊と敗徳とに蝕まれた最悪のものであり、われわれの混亂低迷とは、政治的様相を異にしてはるが、おのづから似通ふた暗黒の雰圍氣に掩はれてゐる。チエーホフは異常な、敏感な眼を透して、飽くまでその時代を描き、祖國の人々の悲むべき生活を描き、そしてチエーホフ獨異の涙と微笑との交響樂である美しい優しい名調子をもつて、人々を慰め、人々を寛がせた。「われわれはチエーホフを持つてゐる、チエーホフがゐる、われわれの心を明るく、正しい方へと導いてくれる……」と人々の親んだのは、そのためであつた。われわれは今、ちやうどチエーホフ時代のやうな最悪の事態に陥つたのである。それ故、一さうチエーホフの作品に懐みを感じ、チエーホフの作品を読み返さずにはゐられなくなつたのである。

私は、われわれの眼前にある新しい世紀の苦しい光景を思ひ、われわれの行くべき生活を思ひながら、チエーホフを読みかへして、その作品中、示唆豊かな十五篇を選んで、拙譯を敢てした。特に、地方生活、田園生活を主題としたものを選んだのは、これからのわれわれにとつて、田園文化の問題、田園人の教養の問題——田園文化の向上こそ、最も重要な題目であり、細心の自覺をもつて、われらの田園を新に開展させなければならぬからである。知識層も、然らざる

者も、また都會の人々も、農耕の人々自身も、田園文化のために何ものかを捧げ、自らの教養を高めて、田園文化に對する清澄の眼を見開かなければならない。よし、問題をそこまで追求せずとするも、何はあれ、われわれはもつと教養を得なければならぬ。農耕に、田園に關心を深めるものは、より良く知り、より良くその敗徳のあるところを省みて、教養によつて自然の恩恵と美とを培はなければならぬ。そこに、われわれが混迷を超えて、何人にも劣らず發言し、交渉し、新なる文化を敷く大きな徑捷の一つがある。

この十五篇は、田園そのものについての深い穿鑿のみならず、都會人と農耕人との接觸、對立、智識人と無智な人々との不和、などについても、或はまた、田園に埋もれたる、純真有能の人々の知られざる美しさ、優しさなどについても、われわれの教へられるところがいかにかに大きいか、讀者はおのづから會得されるであらう。いづれも人間の虚弱さ、哀傷多き生活、内に深く隠された眞實を指摘した物語である。その描寫は氣品高く、簡明で、直截で、諧調であり、その表現は美しく音楽的で、遠く大空に漂ひゆく餘韻の微妙さを持つてゐる。祖國露西亞の人々から「眞珠」のやうな作品と銘打たれて、日常茶飯の間にさへ、忘られずに親しまれたことも、かうした氣品の高さ、美しさにも依る。

チエーホフの作品は、智識層の生活をかいたものが最も多く、又、もつとも問題として讀まれているが、田園、農耕の人々を描いた作品も、それに劣らず主要な地位を占めて、傑出した作品がまことに多い。わが國に於ても、前代の短篇には、これらチエーホフ作品の影響をうけて、明かにチエーホフ的と言はれた作品も少からずあつた。この點では、チエーホフの作品は、露西亞同時代の先輩作家、トルストイ、ドストイエフスキイ、ツルゲーネフの威嚴と莊大に依つてよりも、チエーホフの眞珠にうけた印象の方が、深く鮮かであつたかも知れない。劇作トルストイの「生ける屍」よりも「櫻の園」が、ゴルキイの「どん底」よりも「櫻の園」が、どんなに人々を打つたかを思へば、改めて語るまでもない。チエーホフとわれわれ日本の作家、われわれチエーホフの讀者、その共鳴と敬愛とが、それほど固く結ばれてゐるのは、チエーホフの作品が、或る限られた主張や偏的な問題に捉はれず、飽くまで純藝術であり、飽くまで全人生の眞實を見せてくれるからである。この點に關しても、チエーホフのわが邦藝術に於ける影響には、多大の興味がある。

繰り返しかへして言ふ、いつまでも、いつになつても、感銘の新しいチエーホフの作品を、またも讀み返さなければならぬ世紀が來た今、わが邦のこれからの作家の中にも、チエーホフの至上

の藝術と融合して、新たな氣品と風格とをもつた人々が登場し、わが邦にもチエーホフ的な作品が創造されるであらう。この混迷時代に、さういふ作品の登場を嚮望するのも、また、チエーホフの親近さからである。

こゝに選んだ十五篇の人生圖は、かうした鑑賞に加へて、その自然描寫に於ても、チエーホフ特異の、單純にして含蓄豊かな、簡明にして餘情盡くるところなき色彩と音樂とをもつて、自然の美しさを有るがまゝに眼前に現出する。自然描寫の美しさ、巧妙さに於ても、チエーホフの作品は、稀有の筆觸である。必要以上にくどくどしく裝飾された自然は決して見られず、素描的な寫實の中に、自然と人間との交渉、自然の生彩と氣韻とは、繊細に織り込まれて、作品の上に、すがすがしい香氣と潤澤とを與へてゐる。冗言を費す要はない、この一卷を開かれる讀者は、その第一節から、かの國の自然を——チエーホフの展げて見せる自然の趣致を、直ちに味覺されるにちがひない。

チエーホフの風格については、すでに多くの作品を讀まれた人々は、どんなに品位の高い、優情深い、又、どんなに教養豊かな、靜肅な大家であるかを知つてをられるであらうが、新しい讀者諸氏のために、こゝには、たゞ數行、知つて置かなければならぬチエーホフの風格の影像を

掲げておきたい。詳細な傳記的敘述は、また別の機会を待つこととする。

チエーホフは、農奴解放令に依つて自由民となつたところの、そして南露アソフ海に臨んだ小港都タガンログに一商店を開いたところの父親と、呉服商の娘で、性情優しい、信心深い、教養のある母親との三男として生れ、厳格な父と信心深い母の下で、少年時代、家庭教師の訓育もうけて、性來の音楽趣味、演藝趣味を發揮し、千八百七十九年モスクワの大學醫科に入り、その頃から、すでに小品を書いてゐた。彼の大學生活時代は、父の商店はすでに殞落して、一家はモスクワに住んでゐたので、チエーホフは家族のものと一緒に生活して、家族のために、又、自分の學費を得るために、學業の暇をぬすんで、新聞にペンネームで「笑話」と言はれる諧謔縱横の小品を書きはじめた。チエーホフの初期の作品が、「冷笑主義の寫眞師」とか「小鳥のやうに輕快な」とかは言はれたのは、かういふ生活が、彼の優れた機智を、賣るための方向へ差し向けたからであつた。

が、チエーホフは、青年時代から肺患におかされ、千八百八十四年學位を得て後、モスクワ附近の病院に勤めたり、檢疫醫長となつて驅けまはつたりしながら、自分の療養に努める一方、ますます作品を書きつゞけ、千八百八十九年に最初の劇作「イワノフ」を書き、又、チエーホフと

しては長篇小説の一つ「退屈な話」を發表して、それまでの諧謔に充ちた作品に加へて、眞にチエーホフの偉容を示すところの、限りなき悲哀と苦惱とを作中に反映させた。この悲哀と苦惱とは、その時以來、晩年に至るまで、チエーホフの全作品の主調となつたところのものであつた。

チエーホフは醫師として開業はしなかつたが、作家として名聲が高くなつてからも、訪ねて來る百姓達には、いつも診療してやつたり、醫藥を施與したりしてゐた。彼は自分の病勢のために、千八百九十二年、南方メリホーウオに莊園をもとめて、そこに移り住んでからも、訪問客のためや、病人のためや、公共事業のためには、性根を傾け盡すほど奉仕を怠らず、作品にも精進して、次々に傑作を發表した。かうして露西亞に新しい短篇の道を拓き、曾ては文學界から高く評價されなかつた短篇の形式に絶大の魅力を與へ、後進作家に影響して、チエーホフの短篇小説は、一つの流行とさへなつた。クープリン、プーニン、アルツイパーセフその他、當時年若かつた作家にして、多かれ少かれ、チエーホフの短篇に刺戟されなものはなかつた。露西亞文學に於ける優れた短篇の新形式は、實にチエーホフに依つて、確乎とした地位を得たのであつた。チエーホフは又、その劇作にも、新しい一つの典型を築きあげた。かのモスクワ藝術座が、新劇の先驅として、華々しい光彩を放つたのは、チエーホフの「鷗」「叔父ワーニヤ」「櫻の園」に依つてで

あつた。モスクワ藝術座はチエーホフあつて人々に異常な感激を與へ、藝術座あつて、チエーホフ劇は完成された。この作家と劇壇との共鳴と關聯こそは、眞に敬愛と藝術的良心との現はれであつた。

チエーホフの偉大な效蹟は、この簡単な記録に依つても、いかに美しく尙高いものであるかを知ることが出来る。チエーホフは病患のために、一九〇四年七月二日に、四十四歳にして早くもこの世を去つたのであるが、しかも、彼の殘した作品の大多數は、その當時から全露西亞に愛讀され、世界の讀書界に喧傳せられて、現代に至るも、尙衰へるを聞かない。それは前にも述べたやうに、チエーホフの作品は、いつ、いかなる時代になつても、常に新鮮であり、眞實であるからである。

かうした感銘から、この一卷を新に讀者諸氏にすゝめることは、チエーホフの作中に搖曳する暗黒時代よりも、一さう深刻な、悲痛な、わが周囲の暗黒に、温い慰藉と、高い教養への自覺を得るためにも、意義深いものがあらう。チエーホフは時代の暗黒の中に疲勞困憊した、あらゆる人間の様相を描いて見せた。が、その暗黒の中に、ほのぼのと明けてゆく一道の光明を……文化の黎明を見のがさなかつた。今に一つの構成が完成するであらう……その時には、壯麗な家々が

建ち、素晴らしい庭園が作られ、優れた人々が住むやうになるであらう……その時には、今、現に存在してゐるやうな悪魔——俗悪、冒瀆の人々は存在せず、凡ての人は信念を持ち、自分が何のために生きてゐるかを知つてゐるであらう……」とチエーホフは或る作品の中に語つてゐる。チエーホフに親近したクープリンは、未來の幸福についてのチエーホフのこの期待を評して、「チエーホフの近作の中に、悲しくも又優しく、魅力豊かに表現された、人生の美を祈念するこの思想は、彼の生涯に於ける、いとも親み深い思想の一つである……」と言つてゐる。チエーホフは晩年、ヤルタの莊園に住んでゐた頃、朝の一時、よく自分で花壇の手入れをしてゐたが、チエーホフは、そこに見る花の中に、未來の美の象徴を見、人間の智識と建設的能力とに依つて計劃されようとする新しい道を見守つてゐるかのやうであつた。(同じくクープリンの言葉)

われわれは、チエーホフの斯くも美しく微妙な藝術に親んで、悲痛と混迷とを拂ひのけたい。そしてそこに、ほのぼのと明けてゆく新しい文化の黎明を手招ぎしたいのである。

昭和二十一年六月

目次

百	姓	一
苺	畑	六
職	務	八七
女	教 師	二八
新	し い 別 荘	三六
氣	む づ か し い 人 々	一六
村	の 一 日	一三
危	険	一五
牧	笛	一〇九

往	美	コ	復	技	獵
		サ	活		
		ツ	祭		
		ク	前		
		人	夜		
診				術	師
.....
二五	二六	二七	二四	二三	二三

百姓



モスクワ・スラウヤンスキイ・バザール旅館^{ホテル}の給仕人ニコライ・チキルチエーフは病氣に罹つてゐた。足が感覺を失つて、歩行困難であつた。そのために時々、廊下を通つて行きながら、彼はハムや豆を入れた盆を持つたまゝ蹴躓^{けつまつ}いたり、轉んだりした。彼は職業を見棄てなければならなかつた。彼は自分の貯金も妻の貯金も醫者と藥價とに費やしてしまつて、この上もう生活を支へて行くことが出来なかつた。彼は何の仕事もなく暮らしてゐるのに屈托して、故郷の村へ歸ることに決心する外はなかつた。田舎へ行けば病氣にも好いし、暮らし向きも樂である。「我が家に住めば壁さへ何かの役に立つ」と云ふ諺にも、多少の眞理はある筈である。

彼は夕方近くにジュニコウオの村へ着いた。彼は自分の家を明るく、氣持の好い、愉快な處だと思つてゐた少年時代を思ひ出した。が、今家の中へはいつて行つた時には、一種歴しつけられ

るやうな氣持を感じた。家の中は薄暗くつて、狭苦しくつて、汚なかつた。一緒に連れて來た彼の妻のオルガと小さい娘のサアシャとは、家の殆んど半分を塞いでゐる、煤煙と蠅とで眞黒になつた、大きな、むき苦しい燧爐を驚駭したやうに眺め入つた。何といふ大變な蠅だらう！ 燧爐は一方へ傾き、壁や柱は斜めになつてゐて、今にも家が顛倒して、滅茶滅茶になつてしまひさうに見えた。聖像の下の扉に向つた隅つこの處には、晝の代りに酒瓶の張紙や新聞の切抜などが壁に張りつけてあつた。家には大人は誰もゐなかつた。みんな野良へ收穫に行つたのであつた。たゞ一人、頭髮の綺麗な、八つ位になる、顔の汚れた、薄ぼんやりした女の子が燧爐の上に坐つてゐた。彼女は旅のお客がはいつて來たのに振向いても見なかつた。下の床板には白猫が鍋掛に體をこすりつけてゐた。

「お出で、お出で！」とサアシャは叫んだ。「お出で！」

「その猫は耳が聞えないのよ、」と小娘が言つた。「聾なのよ。」

「どうして聾なの！」

「ひつばたかれて聾になつたの。」

ニコライとオルガには、最初の一瞥だけで、この家の生活の有様が分つてしまつた。が、二人

とも口へ出しては何とも言はなかつた。黙り込んだまゝ、彼等は荷物を其處へ下して、それから村道へと出ていつた。彼等の家は端れから三軒目であつた。見たところ一ばん古く、一ばん見すばらしかつた。その隣りはまだ幾らか好かつた。一ばん最後の家は鐵葉屋根で、窓に帷帳が垂れ下げてあつた。この家は一軒建で、周圍に垣根も何にもなかつた。それは村の宿屋であつた。家々は一列に並んでゐた。そしてこの小さい村の全體が平和で、靜かで、柳や接骨木や山棗皮などが庭から這ひ出してゐて、美しい光景を呈してゐた。

農家の背後からは、土地が河の方へと傾斜してゐた。粘土のそこ此處には、根を張つたやうな石塊がごつごつ露出してゐた。傾斜の下には、石塊や陶器師の竈の間を坂道が走つて、褐色や赤やの陶器の破片がごちやごちやに堆まれてあつた。その下の方には、廣い、平坦な、緑の輝いた野良が擴がつてゐた。乾草はもう何處かへ運び去られてゐて、そこには百姓達の家畜が彷徨つてゐた。村から殆んど一露里ぐらゐの處を、美しい草土堤をもつた河がうねうねと流れてゐた。河の向うは又野良で、家畜の群や白い家鴨の列が見えた。そして河の此方側と同じやうに險しい登り坂になつてゐた。坂の頂上には別の村があつて、圓屋根の五つある會堂が見えてゐた。それから少し離れた處には田舎貴族の家があつた。

「あなたの村は好いところねえ！」とオルガは會堂に向つて十字を切りながら言つた。「何て廣々としてるんでせう！」

丁度その時、夕のお祈禱（それは土曜日の晩であつた）を知らせる會堂の鐘が鳴り出した。崖の下で、水の手桶を運んでゐた二人の小さい娘は、會堂の方を向いて、鐘の音にちつと耳傾けてゐた。

「今時分、スラウヤンスキイ・バザールぢや夕食をやつてるだらうなあ、」とニコライは思ひに沈みながら言つた。

ニコライとオルガとは崖縁へ腰を下して、沈みゆく太陽を眺めやつた。河面や會堂の窓に照り榮えてゐる金色や眞紅の空を眺めやつた。モスクワなどでは曾て味つたことのない、軟らかな、靜かな、何とも云へない新鮮な空氣を呼吸した。太陽がすっかり沈んだ頃になると、牛や羊の群が、うめき聲を立てながら歸つて來た。鷺鳥の群が河を横切つて飛んだ。あたりはしつとりと靜かになつていつた。やがて柔かな空の光がだんだん消えて行つて、夜の影が這ふやうに掩ひかゝつて來た。

やがてする中に、ニコライの父親と母親とが歸つて來た。皺喰れた、腰の曲つた、齒の抜け落

ちた、二人とも背格好の同じくらゐな年寄たちであつた。河向うの或る貴族の畑へ小作に行つてゐたマリヤとフョークラー——息子達の女房——も歸つて來た。マリヤはニコライの兄弟のキリヤークの女房で、六人の子持ちであつた。フョークラーはニコライの兄弟のデニス——今は兵隊に行つてゐる——の嫁で、二人の子持ちであつた。ニコライが家へはいつて、家中のものを眺めた時には、大きな體や小さい體が、屋根裏部屋や、搖籃の中や、片隅に動きまはつてゐた。そして年取つた父親や女たちが、黒麵麴を水へ浸してはががつが食つてゐる有様を眺めた時、ニコライは、病氣で、一文無しで、おまけに子供をつれて、この故郷の家へ歸つて來たのは過ちであつた——大へんな過ちであつたと思つた。

「キリヤークは何處へ行つてゐるんです？」と彼は兩親たちと挨拶を取り交はしてから訊いた。

「彼は商人の處へ雇はれてゐる、」と父親は答へた。「森の番人をやつてゐるんだ。彼は悪い奴ぢやねえが、酒ばかり喰らやがつて仕様がねえ。」

「ほんとに役立たずで困りもんだよ、」と婆さんが涙聲で言つた。「家の奴等アみんな不仕懸ぞろひよ。何一つ稼いで來るぢやなし、唯持ち出すばかりさ。キリヤークの奴は飲んだくれてるし、この爺さまも、やつぱりさうなのさ。何も隠すことはねえ、ぶちまけて話すがね、爺さまも居酒

屋へ通つてばかりゐるだ。今に神様のお怒りを被むるだ。」

來客たちへの歓迎のために湯沸ナモトルが持ち出された。そのお茶は魚のやうにくさかつた。砂糖はべとべとに濕つてゐて、嚙りかけのやうに見えた。麴麩や皿の下には油蟲が一ぱいたかつてゐた。それを飲むのは胸がわるかつた。そして貧乏や病氣の愚痴ばかりを聴いてゐるのも辛かつた。が、みんながお茶を一杯空けるか空けない中に、庭園の方で高い、呂律のまはらない、酔ひどれの叫び聲がした。

「キリヤークが歸つて來たやうだな、」と爺さんが言つた。「噂をすりや影だ！」

みんなは不意に黙り込んだ。と直ぐまた、同じ荒々しい傭なまけ聲がして、それが地の底からのやうに聞えた。

「マア……リヤ！」

兄嫂のマリヤは急に眞蒼になつて、燵爐へびつたりと嚙りついた。この頑丈な、肩幅の廣い、醜い女の顔に、恐怖の表情を見るのは不思議であつた。燵爐の上に坐つて、ぼかんとしてゐた彼女の小さい女の子が、不意に大聲をあげて泣き出した。

「何を啼えるだ？ この餓鬼ア、」容色好やうしよくしで、やつぱり頑丈な、肩幅の廣いフョークラが叫ん

だ。「あの人がお前を打ち殺しやしめえし、怖がるこたあねえ！」

老父の話で、マリヤがキリヤークと一緒に森で暮らすのを恐れてゐるといふこと、彼が泥酔した時には、何時も彼女の處へやつて來て、暴れまはつたり、ひどく彼女を張り飛ばしたりするとをニコライは知つた。

「マア……リヤ」と今度は直ぐ戸の外側で叫び聲がした。

「助けて下さいよ、神様のために！」とマリヤは凍つた水の中へ投げ込まれでもしたやうに、息を切らしながら言つた。「助けて下さいよ！ 親切なみなさん……。」

家中の子供達がみんな泣き出した。それを見ると、サアシャも一緒になつて泣き出した。酔どれの咳拂ひが聞えた。そして背の高い、黒い髪の生えた、頭に冬帽子を被つた一人の百姓が入つて來た。小さいランプの薄暗い光で、顔がよく分らないので一さう恐ろしく見えた。それがキリヤークであつた。彼はいきなり自分の女房の傍へ行くと、腕を振りまはして、拳固を堅めて彼女の顔をひつ叩いた。マリヤは一撃で氣が遠くなつて、聲を立てることも出來ずに、下へ坐りこんでしまつた。彼女の鼻から血がたらたら流れ始めた。

「何てえ見つともねえ態だ！ 何てえ見つともねえ態だ！」と爺さんは燵爐へ這ひあがりながら

呟いた。「おまけにお客様の前で！ 罪な真似をするなよ！」

婆さんは黙つて坐り込んだまゝ、頭を垂れ下げて、茫然としてゐた。クヨークラは播籃を抱へるやうにして護つてゐた。

恐怖を起させるのを承知しながら、尙飽き足らずに、キリヤークはマリヤの腕を掴んで、戸口の方へ引きずつて行つて、もつと彼女を威嚇しやうとして、獸のやうに哮り立つた。が、この瞬間、彼は不意に客のあるのを見つけて止めてしまった。

「おゝ、奴等が來てるな……」と彼は女房の手を放してやりながら言つた。「弟とその噂と子供が……」

よろよろしながら、眞赤な、泥酔した眼を見張つて、聖像の前でお祈りをいつてから彼はつゞけた。

「俺の兄弟とその噂と子供が、この生れ故郷の家へ歸つて來たんだな……それ、あのモスクワから……大きな都の、市街の中での街のモスクワからな……まあ、御免なせえ。」

彼はサモワルの傍の長椅子にどつかり腰を下して、みんなの靜まり返つた中で、小皿でがぶがぶ音を立てながら、お茶を飲みはじめた。十杯も飲んだかと思ふと、長椅子に凭れかゝつて、ぐ

ろぐろぐを聞き始めた。

みんなの寢床へ行く時が來た。ニコライは病人だからといふので、煖爐の上で爺さんと一緒に寝ることになつた。サアジャは下の床板へ横になつた。オルガは他の女達といつしよに納屋の方へいつた。

「ねえ、あなた、」とオルガはマリヤの傍の藥の上に寝ながら言つた。「泣いたつて助かりはしませんわ、我慢をおしなさいよ。聖書の中に書いてありますわ『入汝の右の頬を打たば、亦他の頬をめぐらしてこれに向けよ』つてね。ねえ、あなた。」

それからオルガはひそひそと聲で、モスクワの話や、自分の生立の話や、自分がどんなに立派な旅館に奉公してゐたかといふ事やを彼女に話し聽かせた。

「モスクワではね、家なんか皆大きくつて、煉瓦作りなんですよ、」とオルガは言つた。「教會堂だけだつて四百もありますよ。あの街に住んでる人と言つたら、みんな紳士方で、立派な、惻かな方ばかりですわ。」

マリヤはモスクワどころか、自分はまだ田舎の町にさへ行つて見たことがないと言つた。彼女は讀むことも書くことも出来なかつた。「我等の父よ」といふお祈禱の言葉さへ知らなかつた。彼

女も、少し離れてちつと聴いてゐた彼女の義姉妹のフョークラも、全くの無學文盲で、何にも分らなかつた。二人は同じやうに亭主を嫌つてゐた。マリヤはキリヤークを恐れて、彼が歸つてゐる間は、何時も恐ろしさに顫へてゐた、そして彼が去つた後でも火酒ウオツカと煙草の匂とで頭痛を病んでゐた。亭主がゐらなかつて寂しくはないかと訊かれてもすると、フョークラは腹立たしい調子で答へるのであつた。

「何んだい、あんな奴！」

彼等は暫くの間齟舌つてゐたが、やがて眠についた。

寒い晩であつた。時々、納屋の近くで鶏が聲高に鳴いて眠を呼び覺ました。蒼白い曉方の光が戸の隙間からさし込んで來ると、フョークラはこつそりと起あがつて、戶外へ出て行つた。と、間もなく、裸足で住來を駈けてゆく彼女の足音が聞えた。

二

オルガは會堂へ出かけることになつて、マリヤを連れていつた。牧場の方へと小徑を下つて行つた時、二人とも上機嫌であつた。オルガは廣々としたこの田舎が好きになつた。マリヤは自分

の近親に、オルガのやうな女のゐるのが嬉しかつた。太陽が昇りかけてゐた。牧場の近くには、眠たげな一羽の鷹が飛んでゐた。河は陰鬱に煙つてゐた。あたりには狹霧が朦朧と漂つてゐたが、遙か向うの丘は、もう日光を一ばい浴びてゐた。會堂がきらきら光つてゐた。その先の大きな家の庭では、白嘴鳥がカアカア鳴いてゐた。

「お爺さんは好人だけれど、」とマリヤは話した。「お婆さんが意地悪で、口やかましくつてねえ。わしらが處の小麥は、懺悔節までは食つて行かれたもんだが、今ぢや村の宿屋から買はなきやならねえんで、お婆さんが腹を立つちや、何でお前たちはさう大喰らひだ……つて怒鳴るんですよ。」

「まあ、まあ、あなた！ 我慢おしなさいよ、何もかも、何もかもね。聖書の中に『すべて勞つかれたる者、又重きを負へる者は我れに來れ』つて書いてありますわ。」

オルガは眞面目に、落ちついて話した、そして巡禮のやうに脚早に、氣忙しげに歩いた。彼女は毎日、役僧のやうに福音書を聲高に讀んでゐた。その中には、彼女に了解の出來ないことが澤山あつたが、それでも神聖な言葉に觸れると、覺えず感動して涙を浮べた。「されば」とか「眞に」とかいふやうな言葉は、まるで魂が鞭打たれでもしたやうな調子で發音した。彼女は神を、

聖母を、諸々の聖徒を信じてゐた。人間は世の中のどんな人に對しても——獨逸人に對しても、チフシイに對しても、猶太人に對してさへも——惡を爲してはならないといふことを信じてゐた。獸に對して憐愍あはれみを持たない人々をさへ彼女は悲しんでゐた。福音書を読んでゐる時、ふと解らない言葉に出會つて讀みつかへるやうなことがあつても、彼女の顔は優しく、親切に輝くのであつた。

「あなたの故郷は何處なの、」とマリヤが訊いた。

「ウラヂミール。でも、私の八つの歳にモスクワへ連れて行かれたんですよ。」

二人は河の近くへ來た。向う岸を見ると、水際のところこゝろに一人の女が眞裸體になつて立つてゐた。

「あれや家のフョークラだわ、」とマリヤは彼女を認めながら言つた。「河へ渡つて地主様の處へ行つたんでさ。管理人の奴のところへ。あの阿魔ア圖々しくつて、悪い評判ばかりあるんでさ——恐ろしいこつた！」

眉毛の黒い、頭髮を亂した、娘のやうに若々しい、體の頑丈なフョークラは、さぶんと河へ飛び込んで、足で水を跳ねかし始めた。浪が四方へうねつていつた。

「耻ぢ知らず奴が——恐ろしいこつた！」とマリヤは繰返した。

河には危つかしい小さい丸木橋が架つてゐた。橋の下の澄み透つた水底には、頭の大きな鯉の群が泳いでゐた。水の面に影を映す緑の灌木には、朝露がきらきら輝いてゐた。あたりは暖かで氣持が好かつた。何といふ美しい朝だらう！ どんなにしても避けやうのない、恐ろしい、絶望的な貧乏でさへなかつたら、この世の生活といふものは、何と美しい、愉快なものだらう！ が、村の方を顧みると、昨日あつた事が、何も彼もはつきりと思ひ出されて、彼等を包んだ喜ばしい幻影も、瞬く間に消え去つてしまつた。

二人は會堂へ着いた。マリヤは扉口に佇んで、堂内へはいるのを躊躇してゐた。そして腰を下さうともしなかつた。その時漸く、八時と九時との間の勤行の鐘が鳴り始めたばかりであつたが、彼女は立ちづめに立つてゐた。

福音書が讀まれてゐる最中に、信者たちが不意に立ちあがつて、或る豪家の家族のために通り道を開けた。白い上衣を着て、縁の廣い帽子を被つた二人の娘が入つて來た。その後について、丸々と肥つた、顔色の薔薇色した、水兵服を着た小供がはいつて來た。それを見ると、オルガは喜びに動かされた。彼女は一目見たばかりで、彼等を立派な、教育のある、美しい人たちだと思

つた。マリヤは彼等が人間ではなくつて、恐ろしい怪物でもあるかのやうに、そして若し自分が通り路を開けてやらなかつたら掴み殺されてしまふだらうといったやうな顔付をして、眉毛の下から、おづおづと不機嫌に彼等を見つめてゐた。

そして助祭が沈んだ聲で何やら歌ひ出した時、彼女は「マアリーヤ」と云ふ叫び聲を聞いたやうな氣がして、思はず顔へ上つた。

三

旅のお客の來た事が早くも村中に知れ渡つて、會堂での集りが済むと、大勢の人が家に集つて來た。レオヌイツエフ、マトウエイツエフ、イリーチヨフなどの家の者は、自分たちの親族がモスクワに行つてゐるので、その消息を聴くためにやつて來た。ジュニコウオの者で、讀み書きの出來る若者たちは大抵みんなモスクワへ出て、給仕人になつたり靴磨になつたりしてゐるのが常であつた。(と同様に、河向うの村の若者たちは、麵麩屋の職人になつてゐた)この習慣は、農奴解放以前からであつた。その頃ジュニコウオ生れの百姓でルカ・イワヌウキツチとかいふ男が、モスクワ倶楽部の給仕人の親分株になつてゐたが、自分の村の者でなければ決して雇はなかつ

た、そして其後、みんなお互に自分たちの村の者を呼び寄せては、料理屋だの旅館だのに周旋してゐたのが因もとになつてゐたのであつた。その時分からジュニコウオ村は、他の地方の人々から「奴隸村だの」と言はれてゐた。ニコライは十一の時にモスクワへ連れて行かれたのであつた。そしてマトウエイツエフの一家で、その頃「エルミタージュ」で門番頭をしてゐたマカールウキツチに職業を見つけて貰つたのであつた。で、今ニコライは、マトウエイツエフの家の者に向ひながら語調を強めて云つた。

「イワン・マカールウキツチは私の恩人ですよ。私は朝晩、あの人のために神様にお祈りしてゐます、私が一人前の男になつたのは、全くあの人のお蔭ですからね。」

「なあ、あんた！」とイワン・マカールウキツチの妹で、背の高い婆さんが涙聲で言つた。「あんなは彼の人の消息たよりを知つてらつしやるかの？」

「あの人は、去年の冬はオーモンにゐましたが、今年は何でも人の話ちや、市外の何處かの庭園に行つてゐるさうですよ……あの人も年を取りましたよ。一時、或る夏の時分にや、一日に十ルーブリから稼いでゐたつけが、今ちや何處へ行つたつて商賣の景氣が悪いからさうも行きませうまいよ。爺さんきつと困つてゐるでせう。」

年寄りも若い女たちもニコライの穿いてゐる毛皮の長靴や、彼の青白い顔をじろじろ眺めてゐた、そうして悲しさうに言つた。

「あんたは金を溜めて來なかつただね、ニコライ・オシツプウキツチ、金を溜めて來なかつただね！」

みんなはサアシャを可愛がつた。サアシャはもう十歳の誕生は済んでゐたが、小さくつて、瘦せてゐるので、やつと七つ位にしか見えなかつた。長い、色のさめた木綿の服を着た、日に焼けた、頭髮のもちやく／＼した村の子供たちに較べると、頭に赤いリボンをつけた、顔色の蒼白い、大きな黒い眼をもつたサアシャは、まるで玩具か、さもなければ野で捕まへて來た小さな不思議な動物か何かのやうに見えた。

「この子はもう字が讀めるんですよ、」とオルガは自分の娘を優しく見守りながら、自慢をした。

「さあ、ちよつと讀んで御覽！」と片隅から新約全書を取りながら言つた。

「何處でも好いから讀んで、信者の皆さんに聽いて頂くんですよ。」

古びた、重い、皮表紙の縁の折れた聖書は、まるで其處へ牧師でもはいつて來たやうな匂ひがした。サアシャは臉をあげて、聲高に歌ふやうな節をつけて始めた。

「彼等が去れる後、主の使ヨセフの夢に現はれて目ひけるは、ヘロデ^{ヘロデ}嬰兒^{嬰兒}を索^索めて殺さんとする故に、起きて嬰兒と其の母とを挈^挈へ……」

「嬰兒とその母とを挈^挈へ……」とオルガは繰りかへして、嬉しさに顔色を赧^{エチブト}くした。「埃及に逃れて、又わが汝に示さん時まで彼處^{かしこ}に止まれ……」

「時まで」と云ふ言葉まで來ると、オルガはもう涙を抑へることが出來なかつた。それを見ると、マリヤも、イワン・マカールウキツチの妹も啜り泣きに泣き出した。祖父は咽び入りながら、この孫に何か褒美にやるものをと其處らを探しまはつたが、何にも看出すことが出來なかつたので、手を振りまはした。朗讀がお終ひになると、隣人たちは深く感動して、オルガとサアシャとに喜ばされて、自分たちの家へ歸つて行つた。

その日は丁度日曜日だったので、家族は残らず一日中家にゐた。爺さんにも嫁たちにも孫達にも、みんなから同じやうに「お祖母さん」と呼ばれてゐる婆さんは、何もかも自分の手でやつてゐた。彼女は煙爐の火を焚きつけた。サモワルを沸かした。それから野良仕事にも出た。と同時に、自分がこんなに仕事をするのは、どれ程辛いか知れないとこぼしてゐた。そして又、家の者が大喰ひをしはしないかと心配したり、亭主や嫁たちが何にもしないで、茫然坐り込んで居はし

ないかと始終氣を配つてゐた。或る時、宿屋の家鴨共が自分の家の野菜畑へ入りこんだのを見つけた時には、彼女は長い棒を持つて飛び出して行つた。丁度彼女と同じやうに瘦せて、萎び切つたキヤベツの畑で、半時ばかりもがみがみ怒鳴り立ててゐた。又或る時は、鷹が自分の家の雛鳥を引つ摺はふとしてるところを幻影に見て、大聲に叫び立てながらその後を追つかけようとして騒ぎまはつた。こんな風に彼女は氣むづかしくなつて、朝から晩まで怒鳴りたてゝゐた。どうかすると餘り大聲にやつてゐるので、往來のものが立停つて、聽耳たてゝゐることも珍らしくなかつた。

彼女はまた、自分の夫に對して手酷く振るまつた。怠け者だの、疫病神だのと罵つてゐた。實際爺さんは、だらしの無い、手頼りにならない百姓であつた。もし彼女が絶えず傍から叱り飛ばさなかつたら、茫然燧爐の上に坐り込んで、しよつ中無駄話をやつてゐるかも知れないのであつた。爺さんは自分を目の敵にしてゐる村の誰れ彼れについて、長々と息子に話し聽かしたり、近處のものから毎日のやうに侮辱されてゐるのをくどくどこぼしたりしてゐた。それを聽くのは誰も飽き飽きしてゐた。

「むん、さうさ、」と爺さんは臍を立てながら言ふのであつた。「さうさ、聖十字架祭が済んでから

一週間ばかりして、俺あ乾草を一ブード三十ユベツクで賣つたんだ。そりやまあ好かつたんだ。所がよ、朝、俺が乾草を積んで馬車を驅つて行くと、誰の邪魔も入らなかつたのに、間の悪い時や仕様のねえもんで、宿屋の中から村長のアンチツブ・セ德里ニヨフの奴が不意に飛び出して來やがつて、「やい、老いばれ奴、貴様何處へ行くんだ？」つて吐かしながら、俺の耳の處をひつ叩きやがつた。」

キリヤークは飲み過ぎのために甚く頭痛に悩んでゐた、そして弟の手前を何となく耻ぢてゐた。「酒が悪いだ！ほんとに申譯がねえ、」と痛んでゐる頭を振りながら呟いた。「お前たち、まあ神様のために許して呉れる。俺あ自分だつて悪いのは知つてゐるんだ。」

祭日の祝福のために、彼等は宿屋から青餅を買つて來て、その頭でスープを拵へた。お正午になると、みんなはお茶に坐つて、汗の出るほき鱈鮓飲んだ。彼等は何んとなく膨れ上つたやうに見えた。お茶が済むと、今度は一つの大鉢を取り巻いて、スープを飲みながら青餅の頭をむしやくしや遣り出した。が、青餅の身の方は、いつか婆さんが何處かへ隠してしまつた。

夜になると、陶器師が峽間で壺を焼いてゐた。下の牧場では、村の娘たちが輪舞を踊つて、歌を唄つてゐた。誰かゞ風琴を鳴らしてゐた。河向うにも陶器師の竈の火が輝いて、同じやうに村

の娘たちが歌をうたつてゐた。そして遙かに遠く、柔かい、調子の好い樂の音が聞えて來た。百姓たちは宿屋の内にも外にも、がやがや集まつてゐた。彼等は酔ひどれた聲で、各自に勝手な歌をうたつてゐた。それを聴くと、オルガはただ身顛ひしながら言つた。

「まあ何てえこつたらう！」

彼女は際限のない淫ら話に呆れてしまつた。中でも、もう死目に近い年寄たちが、殊に烈しい淫ら話を遣つてゐるのに呆れてしまつた。娘たちや子供たちはそんな罵詈雑言を聴いても、少しも厭がる容子はなかつた。彼等は搖籃の中にゐる時分からそんな謔言を聞かされて、すつかりも馴れ切つてゐるのであつた。

眞夜中になると、河の兩岸に燃えてゐた陶器師の火も消えてしまつた。が、下の牧場や宿屋の中では、まだ亂痴氣騒ぎがつゞいてゐた。爺さんとキリヤークとは、二人とも泥酔ひに酔つて、手を組合せて、兩方から踳踳とよるめきながら、オルガとマリヤとが寝てゐる納屋のところへやつて來た。

「放つて置けよ！」と爺さんは彼をなだめた。「放つて置けつたらなあ。彼女やそんな不貞腐れぢやねえ……そんな事するなあ好くねえこつた。」

「マア……リヤ、」とキリヤークは叫んだ。

「これ止せ！ 好くねえと云つたら……彼女やそんな不貞腐れぢやねえ。」

二人は納屋の傍でちよつと立停つたが、やがて向うへ行つた。

「わしが好きなは野に咲く花よ、」と爺さんは不意に高い、よく透るテノルで歌ひ出した。「野の花野原で摘むが好き。」

それから爺さんは、べつと唾をはいて、淫らな事を云ひ散らしながら、家へ入つて行つた。

四

婆さんはサアシヤを野菜畑に連れ出して、家鴨を追ひ拂うやうにと言ひつけた。八月の暑い日であつた。宿屋の家鴨共は、家の裏手の方から野菜畑へ入れば入るのであつたが、今は靜かにくわつくわつと啼き交はしながら、宿屋の傍で忙がしく烏麥を漁つてゐた。そしてたゞ一羽の年取つた雄だけが、群から少し離れて、婆さんが棒を持つてやつて來はしないかと思張りでもしてゐるやうに、首を高く突き揚げて立つてゐた。他の家鴨共も野菜畑へ上つて來ることは出來たが今は河の遙か向うに集まつて餌を拾つてゐた。それはまるで大きな、白い花輪でも飾つたやうな

光景であつた。サアシヤは少しの間見張りをやつてみたが、直ぐに飽きてしまつて、家鴨がやつて來ないのを見ますと、崖下へと降りていった。

其處にはマリヤの惣領娘のモーチカが、大きな石の上にちつと立つて、會堂の方を眺めてゐた。マリヤは子供を十三人生んだが、今残つてゐるのは六人だけであつた。みんな女の子で、この惣領娘が今年八つであつた。モーチカは長い襦袢を着て、素裸足で炎天の中に突立つてゐた。太陽は頭の上から焼きつけるやうに照りつけてゐたが、彼女はそんな事には平氣で、丁度石像にでもなつてゐるやうに見えた。サアシヤは彼女の傍へ並んで立つて、會堂の方を眺めながら言つた。「神様はね、會堂の中に住んでゐらつしやるのよ。みんなはランプや蠟燭をつけるけど、神様はね、緑や、赤や、小さい眼の玉のやうな青いランプを持つてらつしやるのよ。晚になると、神様は聖母様や聖徒ニコライ様やお連れになつて、會堂の周圍をお歩きになるんだわ、ばつた！ ばつた！ つて足音をさせて……。だから番人なんか驚駭して恐がつてよ。え、本當よ、あんた、」とサアシヤは母親の口調を真似しながらつけ加した。「それでね、審判の日が來ると、會堂はみんな天へ持つてかれてしまふんですつて！」

「あの鐘も一緒に？」とモーチカは發音を一つ一つ引きのばしながら、沈んだ聲で言つた。

「え、鐘も一緒によ。そして審判の日にはね、善い人は天國へ行くし、悪い人は何時まで経つても消えない火の中へ投げ込まれてしまふんだわ。で、ねえ、お母さんやマリヤや叔母さんには神様はきつと斯うお仰つてよ。『お前たちは誰にも悪い事をしなかつたから右の方へお行き、天國へお行き』つて……。それからキリヤークや祖母ちゃんには『お前達は左へ行つて、火の中へ投げ込まれるんだ……。』つて仰つしやるわ。それからね、精進祭の時に肉を食べた人も、やつぱり火の中へ投げ込まれるのよ。」

サアシヤは目を一ぱいに見張つて、大空を見あげながら続けた。

「空を見て御覽なさいよ、瞬きをしないで、天使が見えてよ。」

モーチカは大空を見あげて、少しの間押し黙つてゐた。

「見えること？」サアシヤが訊いた。

「見えねえよ、」とモーチカは沈んだ聲で答へた。

「でも、あたしには見えるわ。小ちやな天使が空を飛んでるわ……。羽を動かしてゐるわ。あの小ちやいことつたら、まるで蛇のやうだわ。」

モーチカは目を伏せて、少しの間考へこんでから訊いた。

「祖母ちゃん本當に焼かれるの？」

「え、きつと焼かれるわよ。」

その石のある處から丘の裾までは、だらだらと傾斜面になつてゐて、いちめんに軟らかな緑の草に被はれてゐた。サアシヤはそこへ横になつて、下の方へするすると體を滑らせた。モーチカは、ちつと呼吸を詰めて、生真面目な、むづかしい顔付をして、同じやうに横になつて滑つていった。滑りながら、彼女の襦袢は肩まで捲れあがつた。

「面白いわねえ！」とサアシヤは嬉しがつて叫んだ。

彼等はまだ一度滑り下るために頂上へ昇つていつた。すると其時、二人はふと聽き馴れた、招いたやうな聲を聞きつけた。二人は恐ろしさに顔へ上つた！ 齒の抜けた、骸骨のやうになつた、腰の折れ曲つた祖母が、短い灰色の髪を風に振り亂して、長い棒を手にして、野菜畑から家鴨を追ひ出しながら、金切聲に叫んでゐた。

「キヤベエチをこんなに荒しちまやがつて、こん畜生奴ら！ 打つ殺しちまふぞ！ 極道奴が、小うるせえつたらありやしねえ。」

婆さんは二人の女の子を見ると、棒を抛り出して、粗朶を一本取り上げて、その枯枝と同じや

うに乾からびた、硬ばつた手で、サアシヤの首つ玉を引搦んで、びしりびしりひつ叩きはじめた。

サアシヤは痛さと恐ろしさに悲鳴をあげて泣き出した。すると、一羽の家鴨の雄が、頸をにゆつと突出して、刻み足に婆さんの方へ駆けて来て、彼女を叱りでもするやうにくわつくわつと啼き立てた。そして雄が後へ引返へして行くと、家鴨の群は、この一羽の雄に凱歌でも浴びせかけるやうに、があがあ騒ぎたてた。祖母は今度はモーチカを捕まへてひつ叩いた。と又、モーチカの襦袢は肩まで捲れあがつた。サアシヤは恐ろしさに顔へて、大聲に泣きながら、言ひつけて遣るために家へはいつて行つた。モーチカも沈んだ聲で泣きながら、その後について行つた。涙を拭かうともしないので、河へ入つてでもゐたやうに顔が濡れてゐた。

「まあ！」とオルガは子供たちが入つて、來ると吃驚して叫んだ。「まあ、どうしたの！」

サアシヤが祖母に叩かれた話をしてゐると、其處へ婆さんは金切聲を出して、何か口穢く怒鳴りながらはいつて來た。フョークラは腹を立て、しまつた。家中が湧き返へるやうな騒ぎになつた。

「泣くんぢやないよ、泣くんぢやないよ！」とオルガは惱ましげな青い顔をして、サアシヤの頭を撫で、やりながら慰めた。「あれはお前の祖母ちゃんだからね、怖がるんぢやありません

よ。ね、氣にしないでおいでよ。」

ニコライは絶え間のない騒ぎや、飢餓や、悪臭や、煙やがもうつくづく厭になつた。こんな貧乏を心から憎まずにはゐられなかつた。自分の女房や子供の前に、両親のことが耻しかつた。彼は煙爐の上で足をわなわなさせながら、苛々した涙聲で母親に言つた。

「お母さん、あれを打つなあ止めて下さい。何にもあれを打つて法はない！」

「お前なんざ、黙つて煙爐の上に轉がつてりやいゝんだ。くたばり損ひ奴！」とフョークラは意地悪く彼に向つて叫んだ。「お前たちを家へ連れて来たのは悪魔のしわざだ、居候！」

サアシャや、モーチカや、家中の子供たちはみんな煙爐へ攀ち上つて、隅つこの方へ塊つて、ニコライの背後に隠れて、ちつと呼吸を詰めてゐた、昂まつてゐるその小さい心臓の鼓動が、はつきりと聞える程であつた。一體、何處の家族の中でも、誰か望みのない長患ひに掛つてゐる者があると、家の者は皆それとなく心の底で、その病人が死んでしまへばいゝと思ふ苦しい瞬間があるものである、が、そんな時でも子供たちだけは、家族の者が死ぬのを恐れて、それを考へるのさへ恐ろしさを感じるのが常である。で、今子供たちは息の音を潜めて、悲しさうな顔付をしてニコライを見詰めてゐた。そしてこの叔父さんはもう直に死ぬのだと思つて、泣き出したいや

うな、又何とか優しいことを言つて慰めてやりたいやうな氣持になつてゐた。

ニコライは救ひを求めやうにオルガにびつたりと寄り添つて、優しい頬へ聲で云つた。

「オルガ、俺はもう此處にやゐられないよ。もう我慢が出来なくなつた。なあ、お願ひだ、神様のためにお前の妹のクラウデア・アブラーモウナのところへ手紙をやつてくれ。何でも質に入れるなり、賣るなりして、俺が此處から逃げ出せるだけ金を送つて呉れるやうに言つてやつてくれ。あゝ、あゝ。」と彼は惱ましげな調子で續けた。「一目でも好い、もう一度モスクワが見たい、夢にでもいゝからモスクワへ行きたい、あの見馴れた街へ！」

日が暮れると、家の中は眞暗であつた。口をきくのも億劫に感ずるほど陰鬱であつた。ひどく機嫌な祖母は、コップの中に燕麥の麵麩の碎片を浸して、一時間もかゝつてむしやむしや食つてゐた。マリヤは牛の乳を搾つて、乳桶に入れて、それを長椅子の上に置いた。すると祖母は、それを手桶から瓶の中へゆつくりと詰め變へた。今は聖母昇天祭の精進節なので誰も牛乳を飲まないから、そつくり嘔して置けると思つて獨りで喜んでゐた。たゞフョークラの赤ん坊にやるため、ほんの少しばかり小皿へ注いだ。やがてマリヤと祖母とが、牛乳を藏つておくために甕の方へ連んで行くと、モーチカは不意に起きあがつて、煙爐から這ひ下りて、長椅子のところへ飛

んを割つて、麵片の入つてゐる木のコップへ小皿の牛乳を注ぎ入れた。

祖母は引きかへして來ると、再び麵の碎片を食べてゐた。その間サアシャとモーチカとは、燧燼の上にちつと坐つて、祖母の容子を見詰めてゐた。祖母さんは齋戒を破つたのだから、今にきつと地獄へ行くにちがひないと思つて嬉しがつてゐた。子供たちはこんな考へに慰められて横になつた。そしてサアシャはうとうと假睡みながら、審判の日の有様を夢に見た。陶器師の竈のやうな大きな火が燃え上つてゐて、牛のやうな角の生えた眞黒な惡魔が、長い杖でもつて祖母さんをその火の中へ追ひやつてゐた、ちやうど祖母さんが家鴨を追つてゐた時のやうに。

五

聖母昇天祭の夜の十一時頃であつた。牧場でふざけちらしてゐた若者や娘たちが、不意にあわただしい叫び聲をあげて、村の方へ駆け出して行つた。崖縁に遊んでゐた者には、最初何の騒ぎなのか分らなかつた。

「火事だ！ 火事だ！」と絶望的な叫び聲が下から聞えた。「村が火事だ！」

崖上に坐つてゐた人が振り向いて見ると、恐ろしい、奇怪な光景が眼に映つた。遙か遠くにあ

る家並の端れの茅葺屋根の百姓家から、高さ一丈もあるやうな火柱が渦巻き立つてゐて、まるで噴水のやうに火の子が四方八方へ撒きちらされてゐた。そして忽ちの中に、家全體が眞赤な焰に包まれてしまつて、ばちばちと焼け爛れる火の音が聞えて來た。

月の光が朦朧となつて、見る間に村中が眞赤な、揺めく光を浴びた。黒い影が地上を動いて行つた。焦げくさい匂がした。崖下から駆けのぼつた人々は、みんな息塞き切つて、わなわな顔へて物が言へなかつた。彼等は押し合つたり、轉んだりして、見馴れない火の光に目が眩んで、お互に見別けがつかなくなつた。物凄光景であつた。その中でも、火の上の煙の中を鳩の群が飛びまはつてゐるのや、居酒屋にゐる連中が火事のあるのも知らずに、何事もないかのやうに、風琴を鳴らしたり歌を唄つたりしてゐるのが凄まじかつた。

「セミヨン小父さんの家が焼けてゐる、」と誰かの高い、吼えるやうな叫び聲がした。

火事のある處は、ずつと向うの村端れではあるが、マリヤは齒をがたがたさせて、泣き聲を出して、手を振りまはしながら、家の周圍をうろろしてゐた。ニコライは毛皮の長靴で出かけていつた。その後から小さい襦袢を着た子供たちが駆け出した。村の駐在所では警鐘を鳴らしてゐた。ブン、ブン、ブン……とそれが空中に反響した。絶え間のない、連続的なその響が人の氣

を沈めて、身内をぞつとさせた。年取つた女たちは、聖像を持ってそこ此處に立つてゐた。羊や犢や、牛は裏庭から往來へ引出され、箱や、羊皮や、手桶などが運び出された。他の馬を蹴つたり傷けたりするために群から離して繋いであつた一頭の黒い種馬は、今、綱を解かれて自由にされたので、高く嘶きながら地面を蹴散らして、村中を彼方こつちへと飛びまはつた、そしてお終ひには荷馬車の傍へ立停つて、後足でそれを蹴りつけてゐた。

河向うの會堂でも警鐘が鳴り始めた。

燃えあがつてゐる家の周囲は熱かつた。その明るい火光で草の葉つばさへ見別けることが出来た。短い上衣を着て、帽子を耳のところまで被つた、鼻の大きな、頭髪の赤いセミヨンは、人々がやつと擔ぎ出して來た箱の上に坐つてゐた。彼の妻は地面へ突伏して、氣を顛倒させて呻吟つてゐた。鬚の長い、まるで侏儒のやうに見えるほど小柄な、年頃八十ぐらゐの一人の男は——村の者ではないが、やつぱり何か火事に關係があるらしく——頭に帽子もなしで、手に何か白い包みを持つて、其處等をうろついてゐた。その禿頭が火の光をてらてら照り返してゐた。デブシイのやうに黒い顔と黒い頭髪とを持つた村長のアンチツプ・セデルニユフは、手斧を下げて家の中へはいり、やたらに窓を打ちこはして——何故かは誰にも分らないが——やがて階段をせ斷し始

めた。

「女共、水だ！」と彼は吼えた。「唧筒を持つて來い、しつかりしろ！」

今まで居酒屋で飲んだくれてゐた百姓たちは唧筒を曳つぱつて來た。が、皆泥酔してゐて、蹴けたり轉んだりした。みんな絶望的な顔付をして、目に涙を浮べてゐた。

「阿魔つ子ら！ 水を持つて來い、」と自分もやつぱり泥酔してゐる村長が叫んだ。「しつかりしねえか！ 阿魔つ子！」

女たちや娘たちは下の泉の方へと丘を駆け下りていつた。そして手桶やバケツに水を汲んで丘を上つて來て、それを唧筒の中へあけると、又駆け下りていつた。オルガもマリヤも、それからサアンヤもモーチカもみんな手傳つた。子供や女たちの力で唧筒が押されて、水はしゆうしゆう音を立てながら管から迸つた。すると村長は、今それを扉へ向けるかと思ふと、今度は窓に向けたり、水管の先を指で押へつけて、尙しゆうしゆう音を立てる程水の勢ひを強めたりした。

「豪いぞ、アンチツプ！」と譏め立てるやうな大勢の叫び聲がした。「精一ばいやつてくれ。」

アンチツプは燃えあがつてゐる家の中へ突進んで、そこから叫んだ。

「もつと水を持つて來い！ 信者たち、こんな不仕合せな時にうんと働くんぞ！」

が、百姓たちは周りに塊つて、手放して茫然火を見詰めながら立つてゐた。そのあたり一めんには穀物、乾草、番小舎、灌木などの積み重ねが並んでゐるのに、誰も如何火掛りをしたら好いのか分らなかつた。また如何しやうと考へてゐる者もなかつた。キリヤークと父親のオシツプとは、二人とも酔泥れて群衆の中に立つてゐた。爺さんの方は、自分が手放して立つてゐるのを申譯でもするやうに、地面へ横になつてゐる女のところへ行つて聲をかけた。

「氣を落すなよ、お前の家は保険がついてゐるんだから、焼けたつてちつとも損はねえ。」

セミヨンは色々な人を捕まへて、どうして火事が起つたかを説明してゐた。

「ほうれ、あすこに包みを抱へてゐる爺さんがあるべえ、あれやジュエーコウオ將軍のこの雇人で……神様のお蔭で、將軍様の料理人になつてゐるんだが、昨晚私らがとこへ來て『今夜此處へ泊めて呉れろ』と斯う云ふんだ。そこで俺たちや一杯始めたのよ……すると家の婆さまが、爺さまにお茶あ御馳走するてえんで、サモワルを持ち出したんだが、間拍子悪く入口で沸したんだ。そいつの煙出しから飛び出してゐた火の子が、屋根へあがつて火になつたんだ。俺たちやあぶなく焼け死ぬところよ。あの爺さまは、可哀想に帽子を何處かへ失くしちゃまつたよ。」

警鐘は頻りなしに亂打されてゐた。河向うの會堂の鐘も鳴りつゞけてゐた。オルガは火の光の

中で、煙の中を逃げ惑つてゐる赤い羊や、亂れ飛んでゐるピンク色の鳩を眺めながら、呼吸をはずませて丘を昇つたり降つたりした。彼女には警鐘の響が心臓を刺し通してゆくやうな、そしてその火は永遠に消え去らないやうな氣がした。そしてまた、サアツヤも、何處かへ行つてしまつたやうな氣がした……屋根が焼け落ちた時には、彼女は村全體が焼けてしまふのではあるまいかと思つて、恐ろしさに氣を落してしまつた。もう水を運ぶ元氣もなくなつて、手桶を傍へ置いたなり、崖縁へ坐り込んでしまつた。彼女の側では百姓の女たちが坐つて、葬式の時のやうに嘆き交はしてゐた。

その中に河向うの貴族の別荘から、管理人や番人やが二臺の馬車に乗つて、叩筒を持つてやつて來た。白い、釦なしの長上衣を着た一人の若い學生が、馬に乗つて驅けつけた。斧で打ち壊す音がした。梯子が燃えてゐる家の骨組へ架けられて、見る間に五人の男がそれへ駆け上つた。その先頭に立つた學生は、眞赤になつて、消防に馴れてゐるのを示すやうな調子で、鋭い、吼えるやうな叫び聲をあげてゐた。彼等を見る見る中に、家を片々に打ち碎いてしまつた。そして厩や、柴垣や、近くにある草束を引離してしまつた。

「奴等に打つ壊させるな！」と群衆の中から怒つたやうな聲がした。「奴等を留めろ！」

キリヤークは百姓家の打壊しをやつてゐるその新來者を防ぎとめやうとするやうに、何か決心した顔付で家の中へ入つて行つた。が、労働者の一人は、彼の方へ振向くと、いきなり彼の頸つ首をひつ叩いた。どつと笑聲が起つた。労働者はつゞけて又彼を擲りつけたので、キリヤークは轉がつて、手と膝とで群衆の方へ這ひもどつた。

學生の姉妹らしい、帽子を被つた、二人の美しい娘が河向うからやつて來た。彼等は少し離れたところに立つて、火を眺めてゐた。亂れ散つた材木はもう燃えてはゐなかつたが、なほ烈しく煙つてゐた。水管を持つてゐた學生は、筒先を材木の方へ向けたり、群衆の方へ向けたり、また水を運んでゐる女たちの方へ振り向けたりした。

「ジョーヂ！」と娘たちは喫驚して、叱りつけるやうな調子で叫んだ。「ジョーヂ！」

火事は消えた。群衆がそろそろ歸りかける時分には、もう夜が白々と明けて來た。曉方の星の薄れ行く黎明時には、何時もそんな風に見えるものであるが、誰を見ても蒼ざめた、暗い顔色をしてゐた。百姓たちはてんでに自分の家の方へ歸つてゆきながら、ジュエーコウオ將軍の料理人のことや、焼き失せた彼の帽子のことを話し合つて笑ひ騒いでゐた。彼等はもう火事を冗談事にしてしまつて、あまり早く消えたのを口惜しがつてゐるやうに見えた。

「あなたは、まあ、見事に火事をお消しになりましたね、」とオルガは學生に向つて言つた。

「あなたは私たちのモスクワへ行らつしやると好うございますのね。あちらでは毎日のやうに火事がございますよ。」

「あなたはモスクワから來たの？」と若い貴婦人の一人は訊いた。

「左様でございますよ、お嬢さま。私の配偶はスラウヤンスキイ・バザールで給仕人をしてをりましたのです。これは私の娘でございます、」と彼女は寒いので自分にびつたり寄り添つて慄へてゐるサアシャを指さした。「これもモスクワから一緒につれて参りましたんです。」

娘たちは佛蘭西語で學生に何か言つた。そしてサアシャに二十コツベクの銀貨を一つ與へた。爺さんのオシツプは、それを見ると、顔中を希望の色に輝やかした。

「あなた様、神様のお蔭で、風がござりませんで何よりでございます、」彼は學生の方を振りかへつて言つた。「あなた様のお助けがありませんでしたら、私たちはすっかり焼け出される所でございますましたよ。」彼は聲を低くして、もちもちしながらつけ加した。「今朝はまた馬鹿に酷い寒さで……何か暖いものでも遣りたいものでございますな……あなた様の御親切で、堰へ半分なりと、その何を……」

だが、オシツプの謎は解かれなかつた。彼はぶつくさ言ひながら蹠蹠と歸つていつた。オルガは村端れに佇んで、二臺の馬車が淺瀬を渡つて行くのや、美しい娘たちが、河の向う側に待つてゐる馬車の方へと牧場を横切つてゆくのを眺めてゐた。彼女は家へ歸つた時、惚恍としたやうな調子で良人にその話をした。

「何て立派な人たちでせう。それにあの容色の美しいこと、言つたら！ まるで小さな天使のやうなお嬢さんたちね。」

「あんな奴らは、コレラにでも罹つて死んじまやがるといふんだ、」と眠さうなフョークラは腹立たしげに言つた。

六

マリヤは自分の不仕合せを悲しんでゐた。そして一層死んでしまひたいと言つてゐた。それと反對に、フョークラには、貧乏や、不潔や、絶え間のない口喧嘩や、凡てさうした生活が趣味に合つてゐた。彼女は自分に與へられたものは、選り好みなしに何でも食べた。何處であらうと、お構ひなしに眠ることが出来た。彼女は上り口のところで何か飲み物を飲んで、扉口からそれを

を吐きすて、その濕つた上を裸足で歩かなければならなくつても平氣であつた。彼女は初めて會つたその日から、オルガとニコライとを嫌つた、と云ふのは、彼等が斯んな生活を厭がつたからであつた。

「モスクワの貴族方が、此處でどんな暮らしやうをするか、一つ見てゐてやらうよ、」と彼女は毒々しく言つた。「いゝ見ものさね。」

或る朝、それは九月の初めであつた。フョークラは寒さのために顔を蒼薇色にして、強壯な、容子の好い姿を見せて、二つの手桶に水を一ぱい汲んで運んで來た。その時マリヤとオルガとは卓に坐つて、お茶を飲んでゐた。

「お茶に砂糖かね？」フョークラは當てつけるやうに言つた。「お前たちは立派な奥様方さね！」と手桶を置きながらつけ加した。「毎日々々お茶ア喰らつてるなんて、結構な暮し方もあつたもんだ。お茶でお腹がはち切れないやうに用心するがいゝや、」といかにも憎らしさうにオルガを見詰めた。お茶を飲んだら、この太つちよめながら續けた。「モスクワでよつほど御馳走ばかり喰つてゐやがつたんだらう、この太つちよめが！」フョークラは擔ひ棒を振りまあしてオルガの肩を打つた。オルガとマリヤとはたゞ手を握りしめて言つた。

「お、聖徒様！」

フヨークラはやがてまた、洗濯物を持って河へ下りていった。が、河にゐる間にも、彼女は家の中まで聞えるやうに、大聲で悪口をついてゐた。

日が経つて行つた、そして長い秋の夜が来た。河へ行くフヨークラのはかは、みんな家に坐つて、近所の工場から分配された絹糸を捲いてゐた。が、この仕事は家内中かゝつて、一週間に二十カベツク稼ぐのがやつとであつた。

「小作人をしてた昔の方がすつと好かつたなあ、」と祖父は忙がしく糸を捲きながら言つた。「あの時分は、働いて、食つて寝りやそれで好かつたんだ。晝飯に菜つ葉汁とお粥を食つたものだ。晩飯もやつぱり同じ菜つ葉汁とお粥よ。胡瓜と菜はうんとあつたし、食ひてえだけ饞腹食つたつげがなあ。それで今よりや掟があつて、誰だつて身分相應に暮らしてゐたもんだ。」

家の中にはたつた一つの小さいランプが點つて、薄暗く燦ぶつてゐた。誰かそのランプの傍を通ると、黒い大きな影が窓を横切つた。窓から明るい月光がさし込んでゐた。老人のオシツプは靜かな調子で、農奴解放以前には、人々がどんな風に生活してゐたかと云ふことや、この村は、今こそ斯んなに貧乏な、荒れ寂びれた有様になつてゐるが、その頃は遊曠者の大きな團體があつ

て、彼等が獵に出た時には、百姓達は飲み放題ウオツカの御馳走に會つたと云ふことや、獲物を積んだ幾臺かの荷馬車が、若い主人のためにモスクワへ急いで行つたことや、それから又、悪人は鞭で打たれたり、ツェールの領地へ追放されたりしたことや、善人が褒賞されたことや、そんな事をみんなに物語つて聞かした。祖母も何か知ら物語りをした。祖母は昔の事を何も彼もすつかり憶えてゐた。昔自分の奉公した家の妻君は、親切な、氣性の優しい女であつたが、その良人は自墮落な放蕩者で、その娘たちが不幸な結婚をしたこと、一人は飲んだくれの良人を持ち、一人は詰らない商人の處へ嫁ぎ、もう一人は祕密に結婚したこと、(その時分祖母はまだ娘で、その冒險を手傳つたのであつた)そして三人とも、ちやうど彼等の母がさうであつたやうに、悲嘆の餘り若くして死んでしまつたと云ふことなどを話した。こんな色々な事を思ひ出して、祖母はしく泣き始めた。

と、その時誰か扉をノックしたので、皆は吃驚した。

「オシツプ小父さん、今夜俺を泊めてもらひてえ。」

禿頭の小柄なお爺がはいつて来た。それは火事で帽子を焼かれてしまつた、ジューコウオ將軍の料理人であつた。彼はそこへ坐り込むと、ちつと物語に耳傾けて、それから自分でもいろいろ

な物語を話しだした。ニコライは煖爐の上から足をぶら下げながら聴いてゐた。そして此處の別荘ではどんな料理を拵へるのかと訊ねた。彼等はピフテキだの、カツレットだの、そのほかいろいろの吸物や野菜について話した。この料理人も記憶がよくつて、今では誰も味はないやうな御馳走の名前をいくつもあげた。例へばその中には、牛の眼玉から拵へる『朝のお目覚め』と云ふやうなものがあつた。

「ちやあ小父さんはカツレット、ア、ラ、マレシヤルを拵へたことがあるかね？」とニコライが訊いた。

「いゝや、そいつは知らねえ。」

ニコライは嘲笑するやうに頭を振つて言つた。

「ふん、ちや小父さんは變つた料理番なんだね。」

小さい娘達は煖爐の上に坐つたり寝そべつたりして、目をぱつちり見張りながらそこらを見下してゐた。それは雲の中に遊んでゐる天使のやうに、幾人ゐるのか分らない程大勢塊つてゐるやうに見えた。彼等はみんなの物語が好きであつた。ちつと話を聴きながら、喜びと恐れとで溜息をついたり、頬へ上つたり、眞蒼になつたりした。そして又身動きもしないで、呼吸を潜めて、

中でも一ばん面白い祖母さんの話に聴き入るのであつた。

みんなは黙り込んで寢床へ入つた。老人たちは若い時分の物語に興奮して、どんなに青年時代が華やかに樂しかつたかを思ひ耽つた。それが今は、たゞ生き生きとした、愉快な、感動的な記憶のみを残して、どんなに變り果てゝしまつたかを思ひ耽つた。そして遂に來るべき死が、どんなに冷めたく恐ろしいものであるかを思ひ耽つた。あゝ、そんな事は考へない方が好いのだ！ランプが消えてしまつた。そして黒暗、月光のさし込んでゐる小さい二つの窓、寂寞、搖籃の軋る音、それ等が、生涯はもう過ぎ去つてしまつて、再び歸つては來ないのだと云ふことを彼等に思ひ起さした。彼等はうとうと眠つて気が遠くなつた。と、不意に誰かゝ肩を小突いたり、頬へふうつと息を吹つかけたりした——誰もぐつすり眠つたものはなかつた。彼等の頭の中には、死に對する考へが彷彿つてゐた。寢返りを打つと、死の考へは何處かへ行つてしまつた。が、また食乏や、食物や、麥粉の價段の騰つたことや、煤けた、惨めな、煩はしい考へで頭が一ぱいになつた。そして又もや、生涯はもう過ぎ去つてしまつて、再び歸つては來ないのだといふことを彼等に思ひ起さした。

「おゝ神よ！」と料理人は溜息をついた。

誰かゞそつと窓を叩いた。フョークラが歸つて來たのにちがひなかつた。オルガは起きあがつて、欠伸をして、お祈りを言ひながら扉を開けて、それから玄關の門をはづした。が、誰もはいつては來なかつた。たゞ寒い風が不意に吹き込んで來ただけであつた。往來はひつそりと寂びれかへつてゐた。そして月が大空高く懸つてゐた。

「そこにゐるのは誰？」とオルガは聲をかけた。

「あたし、」と云ふ聲がした。「あたしだよ。」

扉のわきの壁にびつたりと體を寄せて、フョークラが眞裸體で立つてゐた。彼女は寒さに顫へて、嘴をがたつかせてゐた。明るい月の光で顔色が青白く、見違へるほど美しく見えた。月光のさしたところと影のところとが皮膚の上にくつきりと隈どられて、黒い眉毛と若い健康さうな胸とが際立つて鮮やかに見えた。

「河向うの悪者奴が、わたしを引つ剃いで、こんな生れたまんまの素つ裸體にしておん出しやつたんだよ、」と彼女は言つた。「何か着るものを持つて來てお呉れよ。」

「でも、まあ家へおはいりなさいよ、」とオルガは自分も顫へながら靜かに言つた。

「あたしや、若いばれ共に見られたくないんだよ。」

實際、祖母はまだ眠就かずに伸吟つてゐた。そして「誰だ、そこに居るなア？」と祖父が訊いた。オルガは自分の肌着と下衣とを持つて來て、フョークラに着せてやつた。それから音を立てないやうにこつそりと扉を閉めて、家の中へはいつた。

「やつぱり手前だな？この悪魔奴！」と祖母はフョークラなのに氣がついて、腹立たしげに呻吟つた。「夜鷹奴……死んじまやがれ！」

「まあ、まあ、好いちやありませんか、」とオルガはフョークラを護つてやりながら囁いた。「黙つてらつしやいよ、ね。」

あたりは又寂然となつた。みんなは何時もぐつすり眠つたことがなかつた。誰も彼も何か苦しんだり拗れたりしてゐた。爺さんは背中の中の痛みで、祖母は心配と怒りで、マリヤは恐怖で、そして子供たちは痒いのと空腹とで苦しんでゐた。今夜もみんなは眠れないで弱つてゐた。彼等はあつち此方へ轉がつたり、讒言を云つたり、絶えず水を飲みに起きたりした。

フョークラは不意に高い、荒々しい聲で泣き出した、が、直ぐに自分を抑へつけて、しばらくの間、靜かに咽び泣きに泣いてゐた。そして又黙り込んでしまつた。河向うの會堂から時々鐘の音が聞えて來た。が、時計は狂つてゐた——最初五時を打ち、それから三時を打つた。

「お、神よ！」と料理人は溜息をついた。

窓明りでは、まだ月光がさしてゐるのか、それとも最早夜が明けて来たのか分らなかつた。マリヤは起きあがつて戸外へ出ていった。やがて牛の乳を搾りながら「ちつとしてお出で！」と云つてゐる聲が聞えた。祖母も出て行つた。家の中はまだ暗かつたが、もう其處らがぼんやり見えてゐた。

夜通し眠らなかつたニコライは煖爐から這ひ下りた。彼は緑色の箱から自分の上衣を取り出してそれを着て見た。そして窓際へ行つて袖を撫でたり後髪を伸ばしたりして微笑んだ。それから又注意して上衣をぬいで、元の通りに箱へしまつて、再び横になつた。

マリヤは歸つて来て、煖爐を燃しはじめた。彼女はまだすつかり眼が覺めきらないでゐるやうに見えた。何か夢でも見てゐるのか、さも無ければ、前夜の話でも憶ひ出したのか、煖爐の前で氣怠るさうに伸をしながら斯う呟いた。

「いゝえ、自由でゐる方が好いわ。」

七

百姓たちが『旦那様』と呼んでゐる紳士が村へやつて来た——それは警視であつた。彼等は警視が何時やつて来るか、何の用でやつて来るかを一週間も前から知つてゐた。この村は戸數が僅か四十戸位しかなかつたが、大蔵省とゼムストワ地方自治局とに滞納金が二千ルーブリ以上もあつたからである。

警視は宿屋に部屋を取つた。彼はお茶を二杯飲んで、それから徒歩で村長の家に向つた。そこには滞納者の群が彼を待つてゐた。材長のアンチツプ・セデルニコフは未だ青年であつたが——彼はやつと三十を越したばかりであつた——極めて厳格な男で、自分も貧乏で、きちんきちん税金を納めてゐないに拘らず、何時も政府の肩を持つてゐた。彼は明らかに自分が村長であることを愉快に思つて、ひどく權勢に媚びてゐた。彼は權力を示すより他には自分を處する路を知らなかつたのである。村會ではみんな彼を恐れて、彼の言ふところに従つてゐた。彼は往來であらうが、宿屋の中であらうが、泥酔者に出會はずと、直ぐにそれを捕まへて、後手に縛りあげて、村の監獄へ入れてしまふやうな事がよくあつた。或る時、亭主の代りに村會へ来て、悪口をついたといふ廉で、祖母を捕へて幾日かの間監獄へ拘禁したことさへあつた。彼は曾て市街に住んだこともなければ、書物を一冊讀んだこともなかつた。が、彼は何處からか小むづかしい言葉を拾ひ

集めて来て、會話の中にそれを使ふのを得意にしてゐた。彼の言ふことは何時も譯が解らなかつたが、そのために、却つて人々から尊敬されてゐた。

オシツプが彼の税金簿をもつて村長の家へはいつた時、灰色の外套を着た、長い白い鬚をもつた、瘦せた老人の警視は、廊下の卓に坐つて、帳簿へ何か書き入れてゐた。家の中は綺麗に片づけられてゐた。凡ての壁は雑誌の切り抜きで飾られ、聖像の傍の一だん高い場所には、前にブルガリアの太公であつたバツテンベルヒの肖像畫が懸つてゐた。アンチツプ・セデルニョフは腕組みをして、卓の側に立つてゐた。

「閣下、この男は百九十ルーブリの滞納でございます。」オシツプの番が来た時彼は云つた。

「復活祭の前にルーブリ納めました、それから後には、一カベツクも納めてをりません。」

警視はオシツプの方へ眼をあげて言つた。

「それはどうした譯だ？ お前。」

「旦那様、どうぞ御勘辨くださいませ。」とオシツプは狼狽しながら始めた。「その斯んな次第で……この夏……リユートルツキイが私に『オシツプ、お前の乾草を俺に賣らねえか？……なあ賣れよ』と斯う申しました。所で、私はちやうど女共が刈り入れました乾草を、百ブードばかり賣物

にもつてをりましたんで、賣る約束を致しましたが、それは都合よく……」

彼は村長のことと苦情を云ひ立てながら、時々、助けを求めらるやうな容子で百姓たちの方を眺めまはした。彼の顔は眞赤になつて、汗が滲み出してゐた。そして目が鋭くきらきら光つてゐた。

「何故そんな話をくどくどするんだ、譯がわからん、」と警視は言つた。「わしはお前に訊いてるんだ……何故税金を納めないのか、と訊いてるんだ。お前たちが誰も税金を納めないとすると、私が一人で責任を負はなければならんぢやないか。」

「私には納めることが出来ねえのでございます。」

「閣下、この男の言上しますことは全然理由が立つてをりません、」と村長は言つた。「確かにその、チキルデエーフの家は貧乏階級に屬してをりますが、その理由を誰にでもお訊ね下さいまし。貧乏なわけは火酒ウオッカを飲みますからで、それに悪い事ばかりしてをりますからで。誠に言語同断の次第でございます。」

警視は帳簿に書き留めてから、水を一杯……とでも命ずるやうな穏やかな調子でオシツプに言つた。

「歸つてよろし。」

間もなく、警視は歸つていつた。彼が安つばい四輪馬車に乗つて、咳拂ひをした時、その長い瘦せた背中の容子を見ると、彼はもうオシツブのことや、村長のことや、ジューコウオの滞納者のことなどはすっかり忘れてしまつて、たゞ自分の家庭のことばかりを考へてゐるやうに思はれた。警視がまだ一露里も行かない間に、アンチツブは早くもチキルデエーフの住居からサモワルを押収して運び去らうとしてゐた。婆さんはそれを追つかけながら、喉咽のさけるほど金切聲をあげてゐた。

「それを遣ふことはならねえ、それを遣ふことはならねえぞ、畜生！」

村長は大股に急いで歩いた。婆さんは體を屈めて、ほとんど倒れないばかりになつて、呼吸を切らし切らし一生懸命に追つかけた。彼女の頭巾は肩へ滑り落ち、緑色の光を持つた灰色の頭髮は風に揺らいでゐた。たうとう彼女は立停つて、握拳で胸を叩きながら、まるで泣き咽んでゐるやうな長い音調で一さう叫び聲を大きくした。

「神様を信じてゐさつしやる皆さん！ 聞いて下せえまし、あの人たちが俺をいぢめるだ。親切な皆さん、あの人たちが俺をいびり殺すだ。おゝ！ おゝ！ 誰か助けて下せえ！」

「婆さん、おい、婆さん！」と村長は嚴然として云つた。「よく物を考へて言ふがいゝぞ！」

サモワルが失くなつたので、チキルデエーフの家は恐ろしく慘めになつた。この損失には、宛然この家の名譽が傷けられたかのやうに、何もか屈辱と不面目とがあつた。もしも村長が、卓とか、椅子とか、壺とかを持つて行つたのなら、まだこれほど空虚な感じはしなかつたらう。祖母は金切聲で叫んでゐた。マリヤは大聲に泣いてゐた。子供たちは、それを見ると一緒に泣き出して、祖父は自分にその罪を感じて、片隅に引つ込んで、悲しさうに頭を垂れ下げたまゝ、物も言はなかつた。ニコライもやつぱり黙り込んでゐた。今まで祖母はニコライを愛して、彼を憫んでゐたのであつたが、今、彼女は其の憐憫も何處かへ忘れてしまつて、彼を呪つたり侮辱したりして、彼の鼻先へ拳固を突きつけた。家の不仕合せもみんな此奴のお陰なのだ、スラウヤンスキイ・パザールで一箇月四十ループリも取つてゐると手紙に書いて置きながら、何故家へは僅かばかりの金しか送らなかつたのだ。何故家へ歸つて來たのだ。何故女房や子供をつれて歸つて來たのだ。もしお前が死んだら、葬式の費用は何處から出るのだ……と斯んなことを怒鳴り散らした。ニコライとオルガとサアシャとは傍で見えてゐるさへ惨めな有様であつた。

爺さんは何かぶつ／＼咳きながら、帽子を被つて村長のところへ出かけて行つた。もう夕方であつた。アンチツブ・セデルニコフは暖爐の前で、頬を脹らましたながら何かハンダ附けをやつて

ゐた。家の中は息が詰るやうに暑苦しかった。チキルチエーフの家の子供たちと似たり寄つたりな、皮ばかりのやうに瘦せた、汚れきつた彼の子供たちは床板の上に寝をべつてゐた。醜い、雀斑だらけな、鳩胸の妻君は絹糸を捲いてゐた。こゝも同じやうに神に見棄てられた、不幸な家族であつた。強壯な、小綺麗な客子をしてゐるのはアンテツブ一人だけであつた。長椅子の上には、サモワルが五つ並んで立つてゐた。爺さんはバツテンベルヒ大公の肖像に點頭おんづつをしてから言つた。

「アンテツブ、どうかお願いだから、そのサモワルを返してくれ、キリスト様のために！」

「三ルーブリ持つて来い、さうしたら何時でも返してやらう。」

「俺にはそんな金はねえ。」

アンテツブは頬を脹らした。火は音を立てながら燃えあがつて、サモワルの面にてらてらと反射した。爺さんは帽子をひねりまはしながら、ちよつと考へ込んでから言つた。

「それを俺おれに返してくれよ。」

色の黒い村長は、いつもより一さう黒く見えて、まるで魔術師のやうであつた。彼はオシツブの方を振り向いて、毅然と口早に言つた。

「かういふことは、何事も地方長官の御指圖に依るんだ。今月の二十六日に行政會議があるから御前の不服は、その時に書面で出すなり口述するなりするがいゝ。」

オシツブには、この學者めいた言葉は少しも分らなかつた。が、それでも彼は満足して家へ引きかへした。

それから十日経つて、警視は再びやつて来たが、一時間ばかりみて歸つていつた。いつか氣候は寒くなつて、風の吹き募る季節になつてゐた。少し前から河は氷結したが、まだ雪は降らなかつた。道路は泥濘ぬかつて往き來が困難であつた。日曜の晩になると、近所の誰彼がオシツブの家へ無駄話にやつて来た。休日に働くのは神を潰す罪になるので、彼等はランプも點けずに、暗闇の中で話した。色々な新しい話も出たが、どれもこれもみんな不愉快なことばかりであつた。滞納金の代りに鶏を押収された家が二三軒あつて、その鶏は縣廳へ送られたが、誰も餌をやるものがないので、餓死してしまつたといふ事や、又羊が繩で縛られて、村から村へと荷馬車に積み代へられて行つたが、その間に一匹死んでしまつたと言ふことや話を話し合つた。そしてその責任は一體誰にあるのかといふ事を論じ合つた。

「セムストウオ(地方自治局)だ、」とオシツブは言つた。「でなくて誰にあるものか。」

「さうよ、ゼムストウオが悪いんだ。」

彼は滞納金について、壓制について、饑餓について……何かにつけてゼムストウオを吐つた。が、その辭ゼムストムオが如何なるものであるかは誰も判然と知つてゐる者はなかつた。たゞ彼等は、多くの工場や、店や、居酒屋を所有してゐる富裕な百姓たちが、ゼムストウオの議員になつてゐながら、尙ほ且つ、その制度に不満を抱いて、自分たちの工場でも、居酒屋でもゼムストウオを吐つてゐるのから推し考へて、ゼムストウオは非難さるべきものであるといふのであつた。彼等はまた、神様が雪を降らして下さらないために、もう薪木を用意しなければならぬ時に、路が凍つてゐて、馬車を驅ることも歩くことも出来ないところばしてゐた。

十五年乃至二十年以前には、ジューコウオの話は、興味の深いことが澤山あつたものであつた。その時分には、年寄りたちは誰でも、何事か神秘を握つてゐて、何事かを了解してゐて、何事かを期待してゐたものであつた。彼等は金文字で書かれた勅令のことや、土地の分配法のことや、新しい領土のことや、何處かに隠された寶物のことなどを物語つたものであつた。が、今では、ジューコウオの人たちは、何の神秘も知らなかつた。彼等の生活は赤裸々で、見た通りの露出むきだしなものであつた。そして貧乏とか、食物のこととか、まだ雪が降らないとか、そんな事の

他には話の種がなかつた……

みんなは少しの間話を途切らした。が、やがて又乳のことや、羊のことやを思ひ出して、その責任は誰にあるかと云ふ議論に返つていつた。

「ゼムストウオよ、」とオシツプは物憂げに言つた。「でなくて、ほかに誰があるんだ？」

八

この村の教區の會堂は、六露里先のコソゴローフにあつた。百姓たちは洗禮とか、葬式とか、結婚式とか、そんな時でなければそこへは行かなかつた。彼等は河向うの會堂へお祈りにゆくのを常としてゐたのであつた。天氣の住い日曜日には、娘たちが晴衣を着飾つて、大勢連れ立つてお祈りに行つた。彼等が赤や、黄色や、緑色の服を纏へしながら、牧場を横切つて行くところは愉快な光景であつた。天氣の悪い時には、彼等はみんな家に閉ぢこもつて精進をして、お祈りを捧げて、聖餐の用意をした。大齋週間にこの勤行を怠つたものがあると、復活祭に牧師が十字架を持つて家々をまはつて歩く時、十五カベツクづゝ徴收した。

祖父は神を信じてゐなかつた。彼は今まで會つて、神といふものを考へて見たことがないので

あつた。彼は超自然なものある事は認めてゐた。が、そんなものに仕へるのは全然女の勤めだと思つてゐた。そして彼の前で宗教や奇蹟についての議論が出たり、彼に訊かれたりすると、彼は當惑したやうな顔付をして澁々言ふのであつた。

「誰がそんなことを知るもんか。」

祖母は神を信じてゐた。が、それは非常に漠然とした信仰からであつた。彼女の心中には色々なことが混亂して、罪悪や、死や、魂の救ひやに就てちつと考へてゐる事は出来なかつた。いつか貧乏や、饑餓や、その日その日の出来事に心が奪はれて、神様のことは直ぐに忘れてしまふのであつた。彼女は祈りの言葉を憶えてゐなかつた。夜寢床にはいる前には、何時も聖像の前に立つて言ふのであつた。

「ガザンに在す聖母よ、スモレンスクに在す聖母よ、三手の神の聖母よ！……」

マリヤとフヨークラとは十字架を切つた。齋戒をした。毎年聖餐を捧げた。が、宗教のことには何の了解も持つてゐなかつた。子供たちはお祈りの言葉を教へられもしなければ、神様の話を聞かされたこともなかつた。そして禮儀作法などは少しも習はせられなかつた。たゞ大齋週間に、肉と牛乳とを口にしてはならないと言はれてゐたゞけであつた。他の家々でも、やつぱりこ

れと同じ事であつた。神を信じてゐる者や、了解してゐる者は滅多になかつた。と同時に、彼等はみんな聖書を愛してゐた、温かな、敬虔な心持をもつて愛してゐたが、彼等は聖書を持つてゐなかつた、誰もそれを讀むことも出来なければ、説明することも出来なかつた。で、オルガが時々福音書をみんなに讀んで聞かせるので、人々は彼女を尊敬して、二人を呼ぶのに目上のものに對するやうな尊稱をつけた。

會堂の祭日や勤行の時には、オルガはよく隣村へ行つたり、この地方の町へ出かけたりした。その町には、二箇處の修道院と二十七箇處の會堂とがあつた。夢見るやうな氣持で、そこを巡禮してゐる間、彼女は家族のことを忘れてゐた。そして家へ歸つて來ると、まるで初めて良人と娘とを見つけたやうに喜ばされて、微笑んで、元氣づいて言ふのであつた。

「神様のお恵みがありますわ！」

村で起る事柄は、凡てが彼女を悩ました、凡てが彼女を苦しめた。彼等はイリヤの日にも酒を飲んだ。聖母昇天祭の日にも、聖十字架祭にも酒を飲んだ。聖母加護祭の時には、ジューコウオ村の教區祭があつた。そして百姓たちは三日間酒を飲みつゞけた。彼等は酔ひどれるために、共同積立金の中から五十ルーブリを費した。それから又火酒ウォッカを買ふために、家毎に金を集めて歩い

た。この祭の最初の日、チキルヂエーフは羊を一頭殺して、朝飯にも、晝飯にも、晩飯にもそれを食べた。キリヤークは三日間飲み通した。彼は帽子も長靴もみんな飲んでしまった、酷くマリヤをぶち擲つた。マリヤはその痛みを水で冷やさなければならぬ程であつた。この亂暴の後では、彼等は耻ぢて、辯ぎ込んでゐた。

こんな有様ではあつたが、この奴隸市のジューコウオでも、一度眞の宗教祭をやつたことがあつた。八月のことであつた。人々は生命守護の聖母の像を、村から村へと擔ぎまはつた。ジューコウオの村へその聖像の渡つた日は、静かな、曇つた日であつたが、村の娘たちは朝から晴衣を着飾つて、聖像を迎へに出た。聖像は夕方になつてから、行列と讚美歌とに伴はれてはいつて来た。その時、河向うの會堂の鐘が高く鳴り出した。村のものや近隣から集つて来た群衆が往來を埋めてゐた。喚き聲や、物音や、砂塵埃が湧き立つてゐた……爺さんや祖母やキリヤークや——みんなは聖像の方へ手を差し伸べながら熱心にそれを見つめた。そして眼に涙を浮べて言つた。「われらを護らせ給ふ御母よ、我等を護らせ給ふ神よ！」

すると、突然この地上も天國と同じ美しい世界となり、この世の強者も富裕者も、何等の搾取をしないやうになり、いろ／＼な迫害や、奴隸的服従や、重く堪へ難い貧乏や、恐ろしい火酒

やに對して、そこに神の救ひが降つたやうに思はれた。

「我等を護らせ給ふ御母よ、」マリヤは咽び泣いた。「御母よ！」

が、感謝のお祈りが終つて、聖像が運び去られてしまふと、凡ては以前と同様になつた。再びまた居酒屋から酔ひどれの罵り合ふ聲が聞えて來た。

富裕な百姓たちの他には、誰も死を恐れるものはなかつた。彼等は金持になればなる程、神を信じなくなり、靈魂の救ひを信じなくなつた。唯この世の最後の審判の日を恐れて、それから逃れるために燈明を點し、お祈りを捧げてゐるだけであつた。貧乏な者には、死の恐怖などを抱いてゐるものは誰もなかつた。爺さんや祖母はよく眼の前で、もう二人は生きるだけ生きたのだから、大抵死んでも好い時だと言はれてゐた。が、彼等は平氣でそれを聽いてゐた。彼等はまた、ニコライの眼の前で、「丁度ニコライが死ぬ時分には、亭主のデニースが軍隊から解除になつて歸つて來るだらう、」とフョークラがそんな事を云ふのを留めようとしなかつた。それからマリヤは、死を恐れないどころか、自分の死目が早く來ないのを悲しんでさへゐた。そして彼女の子供が死んだ時には喜んでさへもゐた。

こんな風に彼等は、死は恐れなかつたが、病氣に對しては異常な恐怖を持つてゐた。ほんの一

寸胃が痛むとか、風邪を引いたとかしたぐらゐの病氣にも、彼等は大騒ぎであつた。そんな時には、祖母は煖爐の上に縮み上つて、絶えず大聲で呻吟つてゐた。

「俺アもう死にさうだ！」

爺さんは祖母に懺悔をさせたり、最後の聖餐を受けさせたりするために、急いで牧師を呼びに行くのであつた。彼女は感冒や、病蟲や、最初胃の中へ出来て次第に心臓を侵して行く癌腫の話を始めやつてゐた。その中でも、彼等は感冒を怖がつて、夏でも恐ろしく厚着をして、煖爐の上で體を温めた。祖母は醫者の診察を受けるのが好きで、よく病院へ出かけて行つた。病院では、祖母は何時も七十だとは言はないで、五十八歳だと言つてゐた。もし醫者が本當の年齢を知つたら、診察するのを斷つて、「もうお前は死んでも好い時分だ」と云ひはしないかと思つたからであつた。彼女は何時も小さい娘を二三人連れて、朝早くから病院へ出かけて行くのであつた。そして自分の水薬と子供たちの膏薬とをもらつて——晩方になつてから、空腹になつて、ぶり／＼しながら歸つて來るのであつた。彼女は一度ニコライを連れていつた。ニコライはその後二週間ばかり薬を飲んで、大變に氣持が好くなつたと言つてゐた。

祖母は三十露里以内にある醫者や、助手や、巫子やをみんな知つてゐたが、婆さんは一人も好

かなかつた。生命保護祭に、牧師が聖像を持つて家々をまはつた時、助祭は婆さんに向つて、町の監獄の近くに、以前軍醫補をやつてゐたもので、非常に療治の巧い老人があるから、行つて見てもらつたら好からうと勧めた。彼女はその勧告に従つた。初雪の降つた日に、彼女は町へ行つて、顔に青筋の一ぱい立つた、長い鬚を生やした、長い外套を着た、年取つた猶太人を連れ歸つて來た。その頃、家には雇ひ職人が來て働いてゐた。大きな眼鏡をかけた仕立屋の爺さんは、襦袢で胴衣を縫ひ、二人の若者は毛皮の長靴を拵へてゐた。泥酔のために解雇されて、今家にゐるキリヤークは、仕立屋の傍に坐つて、馬具の修繕をやつてゐた。家の中は人が一ぱいになつて、狭苦しい上に煙が朦々と籠つてゐた。猶太人はニコライを診察して、蛭に血を吸ひとらせなければいけないと言つた。

彼は蛭を使つた。キリヤークや、仕立屋や、小さい娘たちはちつとそれを眺め入つた。彼等には、ニコライの體から病氣がそとへ出て行くやうに思はれた。ニコライも自分の胸に吸ひついてゐる蛭が、黒い血でだんだんふくれて行くのをぢつと見守つてゐた。そして實際何物かゞ自分の體から出て行くのを感じて、喜ばしげに微笑んでゐた。

「こいつは巧え、」と仕立屋は言つた。「きつと病氣に效くにちげえねえ。」

猶太人は最初十二匹の蛙を使つて、更に又十二匹の蛙を使つた。そしてお茶を幾杯か飲んで歸つていつた。ニコライはぶるぶる顫へ始めた。彼の顔はすっかり憔悴せうたいれてしまつた、女たちがよく言ふやうに握拳くせきのやうに小さくなつた。その指は眞蒼まそうになつてゐた。彼は寢床ねとの掛着かぎや、羊皮にくるまつてゐたが、それでも益々悪寒がひどくなるばかりであつた。晩方になると、烈しく苦しみ出して、床板の上へおろしてくれと言つたり、仕立屋に煙草を呑んでくれるなど言つたりした。そしてやはり羊皮にくるまつて寝てゐたが、曉方たうとう死んでしまつた。

九

おゝ、何といふ荒寥わうりやうとした、長い長い冬だつたらう！

基督降誕祭から此方、彼等は家に蓄へた食糧がなくなつて、他處たつちから麥を買はなければならなかつた。今家にゐるキリヤークは、夜になると暴れ出して家中のものを怖こはがらせ、翌朝は頭痛に悩まされて、悄然として耻ぢてゐた。小舎の中では飢ゑた牛が夜盡なく呻吟うげんつて、祖母とマリヤの心を痛めさせた。そして悲しいお定りであるやうに、冬中烈しい霜が降り、雪が往來に高く積つて、冬の光景が涯はてしもなく擴がつてゐた。降誕告示祭の日には雪嵐が吹き荒れた。復活祭の前

週には雪が降つた。

が、それが済むと、冬もやうやく去つた。四月の初めには、晝間は温かく、夜は寒かつた。冬はまだ冴え返つて來たが、暖かな日光が到頭それを追ひやつた。小河の水は解け出して、小鳥どもは啼き聲を立てはじめた。牧場や河添ひの灌木林は、一めんに春の雪解に浸されて、ジュウコウオから彼方の村までの間には大きな湖水が出来た。そしてその湖水の中には、野鴨の群がそこ此處に飛んでゐた。美しい雲の間に燃え輝く春の落日は、後になつてそんな色彩やそんな雲を晝の中に見ても、誰も眞實と思ふものはあるまいと思はれるほど、夕暮れ毎に或る新しい、異常な、微妙な光景を描き出した。

幾羽かの鶴は人を誘つてゆくやうな悲しげな啼聲を立て、迅く迅く飛んで行つた。オルガは崖縁に立つて、若々しく蘇生したやうに見える洪水を湛へた牧場や、日光や、輝いてゐる會堂やを長い間眺め入つてゐた。そして何處か遠くへ行つてしまひたい、世界の涯はてまでも遠くへ行つてしまひたいと思ふ彼女の抑へ難い憧れから、彼女は涙を頬に流して、思はず呼吸をはずませてゐた。彼女は最早や此處を去つて、モスクワへ歸つて、下婢の口を探さうと決心してゐたのであつた。そしてキリヤークも馭者か何かの職業を得るために、彼女と一緒に出立することになつてゐ

たのであつた。お、一日も早く出掛けなければならぬ！

路が乾いて、氣候が温かになると直ぐに、彼等は旅の用意をした。オルガとサアシャとは頭陀袋を背負ひ、藁靴を穿いて、朝未明に出發した。マリヤは二人を送つて來た。キリヤークは體が好くなかつたので、一週間ばかり出發を延ばすことになつた。

オルガは會堂の方を向いて、最後のお祈りを捧げた。そして死んだ良人のことを思ひ出した。彼女は泣き出しはしなかつたが、彼女の響めた顔は、年取つた女のやうに醜く見えた。冬の間に彼女は瘦せて、醜くなつて、頭髮は少し灰色になつてゐた。愛想の好い、嬉しさうな微笑みを浮べる昔の面影はなくなつて、長い間の屈辱と悲哀とに曇つた陰鬱な色が面に現はれてゐた。その眼の中には、人が何か云つても耳に入らないやうな、何となく生氣のない、無感覺な容子があつた。彼女はこの村と百姓たちとに別れてゆくのが悲しかつた。皆がどんな風にニコライの葬式をして呉れたか、近處の家々では、どんなに追悼をして呉れたか、そしてどんなに皆が彼女の悲痛を自分たちのことのやうに泣いてくれたか、とそんな事を彼女は思ひ浮べた。夏と冬とは、獸よりも淺ましい生活をしてゐる人々と一緒に住むことを思ふと、彼女は又恐ろしくもあつた。彼等は粗暴で、不正直で、淫蕩で、酔ひどれである。彼等は親密に暮らさうとはしないで、お互に

恐れ合ひ、憎み合ひ、疑ぐり合つて、絶えず喧嘩をしてゐる。一體、居酒屋を拵へて、人々に酒を飲ましたのは誰だらう？ それは百姓たち自身なのだ。學校や、會堂や、組合の金を酒のため費やすのは誰だらう、それも百姓たち自身なのだ。近所の物を盗んだり、家を焼いたり、一杯の酒に目が眩んで、法廷で偽つた證言をするものは誰だらう？ 百姓たちなのだ。ゼムストウオの會議や他の團體で、最初百姓たちを罵り出したのは誰だらう？ やつぱり百姓たち自身なのだ。さうだ、彼等と一緒に暮らすのは本當に恐ろしい。が、こんな事があるにしても、彼等も矢張り人間である。人間として悲しみ、人間として泣いてゐるのだ。そしてその全生涯には、心を和らげるやうな事が一つもないのだ。夜になると、體中が痛み出すやうな堪へ難い労働、酷烈な冬、空しい收穫、多すぎる家族―何處にも救ひはない、何處にも救ひを求めやうといふ希望もない。富裕な者も、強い者も、彼等を救はうとはしない、彼等自身もやつぱり粗野で、不正直で、放埒で、頑迷で、口穢くお互に罵り合つてゐる。下級の官吏や書記やは、百姓たちを浮浪人のやうに取扱ひ、村長や教會の事務員までが百姓たちを目下に見て『貴様』などと呼んでゐる。そうして自分達にはそれだけの權利があるのだと思つてゐる。そして事實、たゞ百姓たちを侮辱する事と、威嚇する事と、搾取する事のためのみ、村を歩きまはつてゐる左様した横着な、放埒な、貪婪な、

憤懣な人間から、どうして救助や好模範が得られやう？ オルガは此多キリヤークが呼び出されて笞刑に處せられた時、祖父がどんなに哀れな、腹立たしい顔付をしたかを思ひ出した……今、彼女はこれ等の人々を悲しく憫れに思つて、家々を振りかへり振りかへり歩いていつた。

三露里ばかり一緒に來ると、マリヤは左様ならを言つたが、不意に膝をついて、地面に顔を伏せておいおい泣き出した。

「私やまた一人ぼつちになるんだわ！ あゝ情けない！ 私を可哀想だと思つて下さい。」
マリヤは長いこと泣き續けてゐた。大分離れてからも、オルガとサアシャには、彼女が膝をついた儘、何かに凭れかゝつて、手で頭を押へてゐるのが見えた。

太陽が高く昇つて、暖くなつて來た。ジューコウオの村は遙か後ろになつた。二人はうねうねした道をたどつていつた。オルガとサアシャはいつか村の事もマリヤの事も忘れてしまつた。氣が晴れやかになつて、色々なものが楽しさを誘つた。前方には舊い土堤があつた、それから電柱の列りがあつた。不思議な音響を立てゝゐる幾筋かの電線は、何處とも知れない遠い彼方へ續いてゐて、遙か地平線の上に消えてゐた。やがて一めに緑で掩はれた畑が遠くから見えて、濕つばい麻の香が漂つて來た。何故かそこには、幸福な人々が住んでゐるものゝやうに思はれた。廣

い平野に出ると、その中に白い馬の骸骨が一つ光つてゐた。雲雀は頻りなしに歌ひ、鶉は互に呼び交はし、そして水鶏は古い鐵の門でも軋らせるやうな聲で啼き叫んでゐた。

正午頃オルガとサアシャとは、或る大きな村に着いた。彼等はその廣い往來で、ジューコウオ將軍の年取つた料理人に出會つた。彼は如何にも暑さうな容子で、その赤い、汗ばんだ禿頭を日光にてかてか光らしてゐた。最初彼はオルガとは氣がつかなくかつたが、する中にそれと知つて振りかへつた。が、兩方とも一言も言はずに別れてしまつた。オルガはその邊の他の家よりも新しい、富裕らしい家の傍に立ち停つて、開け放された窓の前で低く點頭おんていをした、そして高い、細い、歌ふやうな聲で言つた。

「お慈悲深い基督教徒の方々、どうぞキリスト様のためにお恵み下さいませ。あなた方のために神様の祝福をお祈りいたします。あなた方の御両親様が、平和な天國にお眠りなさいませやうに。」

「御慈悲深い基督教徒の方々、」とサアシャもあとについて歌ひ出した。「キリスト様のために、お恵み下さいませ、天國の神様の祝福を……」

・ 苺畑

空は朝早くから雨雲に掩はれてゐた。野良の上いちめん長い間雲が垂れかゝつて、今にも降り出しさうでゐながら、まだ降り出さずにゐる、どんよりとした陰鬱な天気の時でありがちな、暑くはないが重苦しい、静かな日であつた。獣醫のイワン・イワヌウキツチと高等學校教師ブルキンとは、もはや歩き疲れて、野原が涯しもないものに思はれた。遙か前方には、ミロノシツコエ村の風車が見えて來た。右手には、小さい丘陵がつゞいて、その列の遠くは、村の後方に消えてゐた。そこには河土堤があつて、牧場や、青々とした柳の樹や、家々の散在してゐることを二人は知つてゐた。その小さい丘陵の上から、同じやうに廣々とした野原や、電線や、遠目には甲蟲の這ふやうにも思はれる汽車の見えることも、天氣が良ければ町さへ見えることも知つてゐた。今、この森閑とした天氣に、すべての風物が、夢のやうに軟かに暈かされてゐるのを見ると、イワン・イワヌウキツチとブルキンとは、その田園風景に魅惑されて、この國土が、いかに大

きく、いかに美しいかを想はずにはゐられなかつた。

「さつきプロコーフイの百姓家にゐた時、」とブルキンは言つた。「君は或る物語を僕に聞かせると言つたね。」

「さう、僕は弟の話をしようと思つてゐたんだ。」

イワン・イワヌウキツチは深い溜息をついて、話をはじめようとパイプに火を點けた。が、ちようどその時雨が降り出した。そして五分もすると、空一めんの驟雨となつて、話は出来なかつた。イワン・イワヌウキツチとブルキンとは狼狽しながら立停つた。びしょ濡れになつた二匹の犬が、後足の間に尻尾を垂下げながら、愁はしげな眼付で二人を見詰めながら立つてゐた。「何處かで雨歇みしなければならん、」とブルキンは言つた。「アレヒンのところへ行かう、すぐ其處だ。」

「うん、行かう。」

彼等は方向を換へて、刈株の跡の野原を、時には眞直に進んだり、時には右へ曲つたりしながら、村道へ出た。やがての中に、ポブラヤ、園や、百姓家の赤い屋根が見えた。向うには河の水がちらちら輝いて、風車と水浴場の家屋とをもつた、ひろびろとした景色が開けて來た。そこ

がアレヒンの住んでゐるソフイノであつた。

水車場は仕事をやつてゐて、雨の音を掻き消すほど響を立て、堰堤は顛へてゐた。幾臺かの荷馬車の傍には、びしょ濡れになつた馬が、頭を垂下げながら立つてゐた。頭に袋をかぶつた人達が、往つたり來つたりしてゐた。あたりは濕つぽい空氣の下で、泥濘やら荒跡に汚れて、水が寒々と不氣味に見えた。イワン・イワヌウキツチとブルキンとは、いつかぐしよ濡れになり、泥だらけになつて、氣持ちが悪かつた。足は泥で重かつた。堰堤を横切つて、百姓家へと近づきながら、二人は、お互に腹を立てゝゐるかのやうに押黙つてゐた。

小舎の一つでは、脱穀機の音が響いてゐた。戸口は開け放してあり、塵埃の雲を吐いてゐた。その戸口に立つてゐたのは、頭髮を長く伸ばした、丈の高い、がつちりと肥つた、四十年輩の男で、地主といふよりは、美術家か學者のやうな容子に見えるアレヒンその人であつた。彼は汚れきつた褌衣シヤツを着て、繩の帯をしめ、下跨スボンの代りに股引をはいてゐた。彼の長靴も泥と藁とで汚れてゐた。眼も鼻も塵埃まみれであつた。イワン・イワヌウキツチとブルキンとに氣がつくと、彼は思ひがけない喜びを面に現はした。

「どうぞ住居の方へいらしつて下さい、且那方」とアレヒンは笑顔を浮かべながら言つた。「私は直

にまゐります。」

住居は大きな二階建であつた。アレヒンは、圓天井と幾つもの小さい窓をもつた、下の階に住んでゐた。以前は執事の住んでゐた部屋であつた。建具や調度は何もかも質素で、麥麵麴や、安物の火酒ウヰツカや、馬具の匂が漂つてゐた。彼はめづらしい來客の折にしか使はない、二階の一ばん良いい部屋へ二人を案内した。イワン・イワヌウキツチとブルキンとは、思はず立停つて、顔を見合はしたほど美しい、若い女中に迎へられた。

「お訪ね下すつて、何とも嬉しいですよ」と二人を客間へ導きながら、アレヒンは言つた。「實に嬉しいですよ！ ペラーダア」と彼は娘に聲をかけた。「お客様に着換への服を差しあげて呉れ。序に私も着換へよう。その前に顔を洗つて來なければいけない、私は春から、まるで顔を洗はなかつたやうな氣持ちだ。いかゞです、あなた方も水浴場へいらつしやいませんか？ その間にこの支度が出來ませう。」

美しいペラーダアは、いかにも肅やかな、物優しい容子を見せながら、二人に拭布と石鹼とを持つて來た。アレヒンは水浴場へ客を導いていつた。

「久しぶりの水浴です」と彼は服をぬぎながら言つた。「御覽のやうに、こんな良い浴場が手には

いりました——私の父親が建てたものです——けれども、私は時偶にしか浴びる暇がありません。」

70

彼は階段に腰を下して、長い頭髪や頸首に石鹼をぬりつけた。彼の居まはりの水は赤黒い色に變つた。

「ふむ、いかにも、」とイワン・イワヌウキツチは仔細らしく彼の頭を眺めながら言つた。

「まつたく長いこと浴びませんでした、」とアレヒンは再び石鹼をぬりながら、恥かしげに言つた。彼の居まはりの水はインキのやうな青黒い色になつた。

イワン・イワヌウキツチは外側へ出て、いきなり水へ飛び込んで、ばしやばしや飛沫をあげた。そして兩腕を大きく操りながら雨の中を泳ぎ出した。彼は水面に白百合の花模様を描き散らしたやうな波紋を揺らめかした。彼は水車池の中央へと泳いで行つて、そこから又飛びこんだり、ちよつとの間他の場所へ上つてゐたり、水底まで達しようとして幾度も跳込みをやり直したりした。

「お、實に愉快だ！」と彼は無上に面白がりながら、いく度も繰返した。「お、實に愉快だ！」彼は水車場へ泳ぎ着き、百姓達と話してゐたが、やがて引返すと、池の中央に仰向けに浮いて、雨に顔を打たした。ブルキンとアレヒンとは服を着て、歸り支度をした。が、彼は尙も泳いだ

り、飛びこんだりしてゐた。

「お、實に愉快だ！」と彼は言つた。「神よ、歡びを與へ給へ！」

「もう止め給へ！」とブルキンは彼に叫んだ。

彼等は住居へ引きかへした。階上の大きな客間には燈が點つてゐた。絹の寬衣と温い上套を着けたブルキンとイワン・イワヌウキツチとは凭掛椅子に腰を下した。水浴の後で頭髪を掃つて、新しい上衣をまつたアレヒンは、温さや、清潔さや、乾いた服や、光つた靴の感じを、いそいそと楽しみながら、客間の中を歩きまはつた。ところへ、可愛らしいベラーゲアは、絨氈の上を物靜かに歩いて、やさしく笑み傾けながら、お盆にのせたジャムとお茶とを運んで來た——やがてする中に、イワン・イワヌウキツチは、彼の物語といふのを語りはじめた。そして聽手はブルキンとアレヒンばかりではなく、金色の額縁の中に淑やかな、嚴めしい面持ちして、靜かに室内を見下してゐる若い淑女や、老婦人や、役人達も、ちつと耳傾けてゐるかのやうに思はれた。

「私たちは兄弟二人でした、」と彼は始めた。

「私、イワン・イワヌウキツチと二つ年下の弟ニコライ・イワヌウキツチとです。私は學校を出ると獸醫になり、ニコライは十九の歳から役所に勤めました。私たちの父親チムシヤ・ヒマライ

71

スキイはカント哲學の研究者でしたが、官吏になつて出世しました。そして私達に小さい領地と貴族の地位とを遺してくれました。父の死後、その小さい領地は負債と訴訟費用とに失つてしまひましたが、ともかく、私たちは、田舎で遊びまはりながら少年時代を送つたものでした。百姓の子供たちと同様に、馬の後を追かけたり、樹の皮を剥いたり、魚釣をしたりして、明けても暮れても、野原と森で時を過しました……知つての通り、一生の中に一度でも鱧を捕まへたことのある人や、晴々とした秋の季節に、候鳥の鶉が、どんなに群をなして村を渡つてゆくかを見たことのある人は、誰しも眞の都會人にはなり切れずに、生涯、自由の空氣に憧れを持つものです。で、私の弟は役所勤の身の上で惨めなものでした。何年もの間、彼は同じ地位に留つて、同じ書類を書きながら、どうにかして田舎へ行つて暮らしたいと、その事ばかり考へてゐました。この憧憬は、次第に強い慾望を煽り、何處かの河岸か湖畔に、小さい農場を買ひたいと夢想するまでになりました。

「弟は温厚な、氣質の善良な男でした。私は彼が好きでしたが、その小さい農場に後半生を閉ぢ込めようといふ、彼の欲望には同感しませんでした。一個の人間には三アルシン以上の土地を要せずといふ諺は眞實です。けれども、三アルシンの土地は屍體に必要なので、生きてゐる人間に

對してではありません。今日では又、われ／＼知識層の者が、土地に魅惑されたり農場に憧れたりすること、誠に嘉すべきことだと言はれてゐます。けれども、この農場なるものは、三アルシンの土地と同じこつてす。町から退き、争鬭から、人生の動搖から退き、農場に自分を埋めてしまふといふ事は——それは生活といふものではありません。それは自己主義であり、怠惰であり、一種の修道主義、而も良き仕事無しの修道主義です。生きた人間には、三アルシンの土地や農場は必要ありません。あらゆる性能を發揮したり、自由精神の特異性を發揮したりする餘裕を持ち得るために、全地球が、全宇宙が必要です。

「弟のニコライは、菜園に美味さうな香氣を放つ手作りの甘藍を味つたり、緑の草の上で食事したり、日光を浴びながら假睡んだり、野良や森を見晴らしながら、長い間門傍のベンチに坐つてゐたり、そんな有様を夢想してゐたのです。彼を歎ばし、彼の心を温かに慰めるものは、園藝書や曆にある栽培摘要でした。彼は新聞も愛讀してゐましたが、彼の讀む記事と言へば、河とか、果樹園とか、水車とか、水車池とかにつゞいてゐる耕作地の賣物、納屋、建物附の牧草地の賣物、廣告などが主でした。かういふ夢想は、園の小徑や、花や、果物や、頑丈な羊小屋や、池の鯉や、さうした種類のものを彼の心中に描かせました。これらの空想畫は、彼の眼に映る廣告の如何に

よつて、いろいろ様々でしたが、どういふ譯か、いつも彼の欲してゐた一つの事は、その賣地に必ず葎畑が附いてゐなければならぬといふことでした。彼には葎畑の附屬してゐない住居や、農場を想像することは出来なかつたのです。

『田舎の生活には、それ特有の利益が幾つもある、』と彼は時々言つてをりました。『露臺ベランダに坐つてお茶を飲んでゐる間にも、鴨は池に泳いでゐるし、すがすがしい香氣は漂つて来るし……葎は育つてゆくし……』

「彼はよく設計圖をかいてをりましたが、その圖面に書き込まれるのは、いつも同じものでした。(a)家族の住居、(b)女中部屋、(c)蔬菜園、(d)葎畑。彼は吝嗇りんしやくな暮らし方をして、食物も飲物も、ひどく儉約してゐました。衣服はともお話にならない襤褸れんじを身につけて、どう見ても乞食の姿でしたが、銀行には絶えず貯金をつゞけてゐました。彼は恐ろしく貪慾こんよくになりました。私は彼のさうした有様を見るのが嫌で、時々彼に金を送つてやり、クリスマスや復活祭には贈物をしましたが、彼はそれをも貯金に加へました。一つの欲望に熱中した人間といふものは、實に始末の悪いものですね。

「それから何年か経つて、彼は他の縣内に移りました。その時はもう四十歳を越してをりました。

そしてやはり新聞廣告を読み、貯金をつゞけてゐました。私は彼が結婚したことを聞きました。尙も農場と葎畑の附屬した土地を買入れる目的は變へず、女に對する何らの情熱は持たずに、單に卑しい利益のために、年上の醜い寡婦と結婚したのです。彼は結婚後も儉しい生活をして、妻の食事まで儉約させ、彼女の金を自分の名前で銀行へ預けてをりました。

「彼女の最初の良人は郵便局長で、その頃は、始終パイや家庭作りの酒類を攝取してをりましたのに、今度の良人は、黒麵麩くろめんこさへ十分には食べさせませんでした。彼女はさうした生活の苦痛を訴へるやうになりましたが、それから三年後に、たうとう神様の御許に行つてしまひました。彼女の死に對して、弟が只の一分間でも責任感を持つたことのないのは言ふまでもありません。金といふ奴は、火酒ウヰツカと同じやうに、人間を奇妙なものにさせます。われわれの町にゐた或る商人は、臨終の時に、一皿の蜂蜜を取り寄せて、自分の金と債券とが、誰か他人の利益にならないやうにと、蜂蜜と一緒に吞んでしまつたといふ話です。また、私が或る鐵道の驛で家蓄を見物してゐた時のことです、一人の牧夫が機關車の下に落ちて、足を曳かれました。人々は彼を待合室へ運びましたが、血だらけになつて、見るも恐ろしい光景でした——ところが、彼は曳かれた足を取つて來てくれと、その事ばかり氣を揉んでゐました。切斷された足に穿いてゐる長靴の中に、金が

二十ルーブリ入つてゐる、それを失くしては大へんだと恐れたのです。」

「話が少し別の所作事に移つたやうだね。」とブルキンが言つた。

「妻の死後、」とイワン・イワヌウキツチは、ちよつとの間考へ沈みながら續けた。「弟は一つの領地を探し當てました。もちろん、五年も探した揚句は、大てい失敗に終るのが落ちで、夢見てゐたものとは非常に異つたものを買入れるやうになり勝ちです。弟の買つた領地は、家族の住居や、女中部屋や、遊歩園もついてゐましたが、果樹園もなければ、苺畑も、鴨を飼ふ池もない、百十二デシヤーチン程の低當流れの土地で、或る事務官の世話で手に入れたのでした。河にはつゞいてゐましたが、領地の一方の側には煉瓦工場があり、もう一方の側には骨粉製造所がありましたので、河の水は珈琲色に濁つてをりました。けれども、ニコライ・イワヌウキツチは大して悲觀しませんでした。彼は二十畝ほど苺を植えさせて、領地の旦那様としての生活をはじめました。「昨年、私は一度彼を訪問しました。どんな風によつてゐるか、見て來たいと思つたのです。彼の手紙によると、その領地をチュンバロクロフ(未開墾地)、一名ヒマライスコエと稱してをりました。私が一名ヒマライスコエに着いたのは、午後でした。暑苦しい日でした。そこには方々に溝や、柵や、垣根や、樅の並木などがあつて、どつちを行けば農場へ出られるのか、どこに馬を

繋いだらいつのか、譯のわからない場所でした。私はやつと家屋のところへ着きました。そして豚のやうな容子をした、太つた赤犬に迎へられました。犬は吠えつかうとしましたが、きよとんとして吠えもしませんでした。肥つた女料理人が、裸足で臺所から出て來ました。彼女も豚のやうに見えました。旦那様は晝食後の假睡をなすつていらつしやいますと彼女は言ひました。私は弟のゐる部屋へはいりました。彼は脚に蒲團をかけて、寢床に坐つてゐました。彼はひどく年取つて、むくむくと肥つて、皺だらけの顔になつてゐました。その頬や、鼻や、口元は妙に突出して——ちようどその時蒲團に向つて、何かぶつくさ滾してでもゐたやうに見えました。

「私たちは抱き合ひました。そして若かつた日のことを思ひ、今は二人とも頭髪が灰色になつて墓場に近づいてゆくのだと思ひ、歡びと悲しみの涙を流しました。弟は服をつけて、領地を私に見せようと案内に立ちました。」

「ところで、この生活はどんな具合だね？」と私は訊ねました。

「さう、神様のお蔭で、非常にうまく行つてゐます。」

「彼はもはや怯々とした貧しい官吏ではなく、眞の地主になり、紳士になつてゐました。オでにその生活に馴染んで、すっかり身についたものになつてゐました。彼は腹一ぱい食べ、風呂浴び

に行き、體もがつしりと肥つて強壯になつてゐました。すでに、村の共同組合や、煉瓦工場と製粉工場の組合にも入つてゐました。そして百姓たちが『旦那様』と呼ばないやうなことがあると氣嫌を悪くすると言つた調子でした。彼はいかにも紳士らしい、實質的な方法で救済事業に携はつて、重々しく勿體ぶつた態度で慈善を行つてをりました。その慈善のやり方と言つたら、どうでせう？ 彼は病氣の種類が何であらうとお構ひなしに、曹達と蓖麻子油とを百姓たちに施しました。彼の命名日には、村の中央で感謝祭を催しました、その後で火酒を一ガロン百姓にちに振舞ひました——そうするのが義務だといふ風に彼は考へてゐたのです。この恐るべき火酒の一ガロン！ この肥つた地主は、或る日、構内侵入の廉で、村長の前に百姓たちを曳いて行つたりしますが、その翌日には、祭日祝として火酒を一ガロン百姓たちに振舞ふのです。彼等は飲んでウラアを叫びます。酔がまはると、百姓たちは彼の足下に膝まづくのです。より良き生活への轉換とか、飽食と怠惰に日を送るとか言ふことが、どれほど傲慢な自負心を露西亞人に發達させたか知れませんか。ニコライ・イワヌウキツチは以前役所にゐた頃、自分の意見を吐くことを非常に恐れてゐたのですが、今や、彼は福音書の眞理にも比すべき意見を、或る長官でゝもあるかのやうな調子で、堂々と述べたてゐるのでした。『教育は重要缺くべからざるものであるが、百姓たち

に對しては尙早である』『體刑は概して有害であるが、或る場合には止むを得ない、それに代へるべき他の方法がないのである』

『私は百姓たちを知つてゐる。どんな風に彼等を取扱へばいゝか分つてゐる。』と彼は言ふのでした。『百姓たちは私を好いてゐる。私はたゞ、私の小さい指をさし上げればいゝのだ。彼等は、私の欲するがまゝに動くのだ。』

「かうした意見が、思遣りの深い調子で、さも賢明らしく述べられるのです。『われわれ貴族は』とか『私は紳士として』とか、いく度もいく度も彼は繰返してゐました。明かに彼は、私たちの祖父が百姓であつたことを忘れてしまひ、父親が兵隊であつたことを思ひ出しもしないのです。チムシャ・ヒマライスキイといふ私たちの異名さへ、もはや彼にとつては、事實とは全く離れたむしろ音調の愉快な呼名と思へるのでした。

「けれども、彼の話は此處でちよつと後まはしにして、私自身のことをお話しなければなりません。彼の田園の家で僅か數時間を過した間に、私がどんな影響をうけたかをお話したいのです。その夕方、私たちがお茶を飲んでゐた時でした、料理人が苺を盛つた皿を卓の上に置きました。それは買つたものではなく、苗を植えてから今日はじめて採取した、彼手作りの苺でした。ニコ

ライ・イワヌウキツチは嬉しさうに笑ひましたが、そのまゝ抑黙つて、眼に涙を浮かべながら、その莓をちつと見詰めてゐました。興奮して、物も言へなかつたのです。やがて彼は、莓の一口を口にに入れて、氣に入りの玩具をもらつた子供のやうに、得意の眼付で私を眺めながら言ひました。

『何て美味いんだらう！』

「そして彼は貪るやうに食べつゞけながら、何度も繰りかへすのでした。『なんて美味いんだらう！ さあ、食べて見て下さい。』」

その莓は、まだ熟してもゐず、酸っぱくつて不味かつたのですが、ブーシユキンの詩にある

味氣なき眞實よりも

恍惚を誘ふ嘘偽こそ親しけれ

と言ふ句の通りでした。

「こんな風に、胸に描いてゐた夢を、紛れもない現實とした、幸福な男の姿を、私は眼の前に見たのです。彼は人生の目的を達したのです。望みが叶つたのです。その運命に満足し、自分自身に満足してゐたのです。かういふ人間の幸福に對する思想には、何故か、一種言ひ知れの悲哀の情が混り合つてゐます。眼の前に幸福な男を見たこの場合では、私は絶望にも近いやうな一種の

壓迫感に襲はれました。夜になると、一さうしみじみと感じました。私の寢床は、弟の寢室の隣りの部屋に用意されました。私は彼が目を覺ましてゐて、時々起上つては、皿の莓を一つ、また一つと取りにゆく物音を聽いてゐました。私は、こんな風に満足した幸福な男が、世上にはどんなに多いかを思つて見ました。それは何たる強い迫力でせう！ 人生を見よ……です。強者の傲慢や怠惰、弱者の無智と野蠻、我々の周圍には、信じ難いやうな貧窮、雜聞、頹廢、泥酔、嬌飾、虚偽……而も、家々の中や街上は靜肅に保たれて、町に生活する一萬五千人の中、誰一人として堂々と抗議を唱へるものはないのです。民衆は食糧のために市場へ行き、晝は食べ、夜は眠り、愚にもつかない謔言を語り合ひ、結婚をし、いつか年をとつて、卒氣なく共同墓地に葬られてしまふのです。けれども、我々は人生の苦みに眼をそらし、人々の悲みに耳をそむけてゐます。人生の悲惨事は、どこかの舞臺裏に隠されてゐます……あらゆるものが靜かで、平和で、無言の統計が抗議を示してゐるだけです。澤山の人間が發狂し、火酒に酔ひ泥れ、澤山の子供たちが營養不良のために死んでゆきます……物の秩序といふものは勿論必要です、これあるがために、幸福な人間は、平穩無事に暮らしてゐられるのです。不幸な人々が、彼等の代りに、黙々として重荷を負ふてゐればこそ、安靜にしてゐられるのです。この無言の人々がなかつたら、幸福といふも

のは、在り得ないので。かういふのが、一般の催眠術的状態です。それ故、幸福な人間や満足した人間の扉口の蔭には、誰かゞ鐵槌をもつて、絶えず扉を叩いては、そこに不幸な人々があることを思ひ出させる必要があります。彼がいかに幸福であらうと、人生は早かれ晩かれ、その爪を現はすものだといふことを、又、病氣や、貧窮や、破滅の悲惨事は、誰の身の上にもやつて来るものだといふことを、そしてその時には、今、彼が人々に對して見ず聞かすにゐるに同様に、誰一人見ても聞いてもくれないものだといふことを、絶えず思ひ出させなければなりません。が、鐵槌をもつた者が誰もゐないので、幸福な人間は、安靜に暮らして、日常の些末な煩ひさへ、箱柳の梢を吹く微風ほどにも感ぜず——凡てが都合よく行くのです。

「その晩、私もやはり幸福な、満足した人間の一人であることを知りました、」とイワン・イワヌウキツチは起ち上つて、續けた。「私もやはり、食事の時や狩獵の時に、生活の法則や信仰を説き立てたり、百姓たちを支配する方法を論じたりするのを好んでをりました。私もやはり、教養の大切であること、科學の重要であることを、いつも主張してをりました。けれども、單純素朴な人達にとつては、讀むこと書くことが出来れば、時にとつて十分です。自由は天與の賜物である、自由なくしては何事をもなし得ず、それは空氣よりも更に大切であると私はいつも主張してゐま

した。けれども、まあ、ちよつと待つて下さい……さうです、私はそんな風に主張してゐたものです。そこで今、私が待つて下さい、と言つたのは、何のためでせう？」とイワン・イワヌウキツチはブルキンに向つて憤りつけるやうに言つた。「何故、待つてと言ふのか、何の理由があるのか？ それは斯うです……それらの事は、直ちに實現するものではなく、除々に、適當の時期に生活の上に形造られるのだと言ふのです。けれども、そんな事を言ふのは何者でせう？ それが眞理だといふ證據はどこにあるのですか？ 物の自然の順序や現象の統一を手頼りにして、どうなると言ふのです？ 生活し、思考してゐる人間が、現在、陥坑の縁に臨んでゐるのに、それが自然に埋まるのを待つてゐて、何の順序ぞや、何の統一ぞやです。泥の一ぱいになるのを待たずに、この時こそ、飛び越したらいゝちやありませんか、橋をかけて渡つたら、いゝちやありませんか？ もう一度言ひますが、何のために待つてといふのですか？ 生きる力も何も抜けてしまふまで待つのですか？ さういふ間にも、人間は生きなければなりません。生きたい要求に追はれてゐるのです！」

「翌朝早く、私は弟に暇を告げました。そしてその時以來、私は町に住んでゐるのが耐へ難いものになりました。町の人々の平和と靜肅とが私を苦めるのでした。幸福な家族たちが卓を圍ん

で、お茶を飲んでゐる有様が、私には堪らなく辛かつたので、私は窓を覗くのさへ恐れしました。私はもはや老更けて、争闘には適さなくなつてゐます。憤激する氣力もありません。私はたゞ心秘に悲んで、苛立つたり惰沈したりしてゐるだけです。けれども、夜になると、いろいろの理念に頭腦が熱くなつて、眠ることも出来ません……あゝ、私が今若かつたら！」

イワン・イワヌウキツチは興奮して、あつちへ行き、こつちへ行きしながら繰返した。「あゝ、私が今若かつたら！」

彼は不意にアレヒンに近づいて、まづ彼の一方の手を握りしめ、それからもう一方の手を握りしめた。

「パーウエル・コンスタンチノウキツチ、」と彼は哀願するやうな調子で言つた。「安静にしてゐ給ふな。満足してゐ給ふな。眠を食つてゐ給ふな。若く、強く、自信のある間は、善を行ふに躊躇してはいけませんよ。幸福などといふものはありません。幸福など求めるべきではありません。けれども、人生には一つの意義があり、目的があります。その意義と目的は、われわれの幸福ではないのです、もつと大きな、もつと合理的な或物です……善を行へす！」

イワン・イワヌウキツチは、一種個人的な好意を彼に求めるかのやうに、哀れつばい、嘆願の

調子で言つた。

やがて三人は、客間のそれぞれ違つた端にある肱掛椅子に坐つた。イワン・イワヌウキツチの物語は、プールキンをもアレヒンをも満足させなかつた。金色の額縁から見下してゐる將軍たちや淑女たちは、薄暗がりの中で、まるで生きてゐるかのやうに見えたが、莓を食べた哀れな書記の物語を傾聴するには、あまりに退屈らしかつた。みんなは、何故ともなく、もつと華かな紳士淑女の話を開きたかつた。この客間に坐つてゐると、そこにある凡てのものが——色笠の中の枝附燭^{シヤンブ}も、肱掛椅子も、足の下の絨履も、何もかもが——今縁縁の中から見下してゐる人達の姿を、曾てはこの部屋を歩いたり、坐つたり、お茶を飲んだりしてゐたその姿を思ひ起させるのであつた。そして可愛らしいベラーダが足音靜かに歩いてゐる現實の方が、どんな物語よりも好ましかつた。

アレヒンは、ひどく睡氣に襲はれてゐた。彼は曉方三時前に、仕事の見まはりに起きなければならなかつた。そして暎が今にも寒きさうであつた。が、彼は自分が出て行つた後で、何か面白い話をはじめるとも知れないと氣遣つてゐた。先刻からイワン・イワヌウキツチが論じ立てゝゐた正義とか眞理とかの問題に對しては、彼は關心を持つてゐなかつた。お客達は麥の話をするわ

けではなし、乾草や、タール油の話もしないし、彼の生活とは直接関係のない話ばかりだったの
で、彼は早くお終ひになるのを待つてゐた。

「ところで、もう寝る時刻です、」とブールキンは起上りながら言つた。「御機嫌よう、お休みな
なさい」

アレヒンは挨拶を言つて、自分の層間へと階段を降りていつた。二階に寝つた二人は、大きな
一室に導かれて、そこに眠るやうにと言はれた。室内には、彫刻の裝飾を施した、木製の古い
寝臺が二臺置かれ、片隅には象牙の十字架像が立つてゐた。可愛らしいペラーダアの手で支度さ
れた、大きな、すがすがしい寢床は、眞新しいリンネルの佳い匂をほのめかした。

イワン・イワヌウキツチは押黙つたまゝ服をぬいで、寢床へはいつた。

「神よ、われぬれ罪あるものを許したまへ！」と彼は言つて、枕に顔をのせた。

卓にのせてある彼のパイプは、吸ひ残りの煙草の強い匂を立てゝゐた。そしてブールキンは、
どこから蒸せばい匂が来るのかと怪みながら、長い間寝就かれずにゐた。

窓框を叩く雨の音は、一晩中やまなかつた。

職務

代理檢察長と管區の醫師とは、或る審問のためにシールニヤへと向つて行つた。途中で吹雪に
會つて、彼等は長い間あつちこつちと迷つた後で、やうやく到着はしたが、豫定してゐた日中
はなく、いつか夕方になり、もうそろそろ暗くなりかゝつてゐた、彼等は地方自治局の小舎に泊
ることにした。その小舎といふのが、事件の起つた、死人の横はつてゐるその小舎なのであつた
——地方自治局の保險事務員で、三日前にシールニヤに着いたレスニツキイといふ男が、その小
舎に泊つて、湯沸を湧かしてもらつたりしてゐたが、突然銃自殺をして人々を仰天させた事件
があり、その死體がそのまま置いてあるのであつた。その男は食料を包みから取りだし、それを
卓の上にひろげ、眼の前に湯沸を湧かしておきながら、奇怪にも突然その生涯を終つたといふ事
實は、人々に疑惑を起させずには措かなかつた。捜査は是非とも必要であつた。

外側の部屋で、檢事と醫師とは、自分で雪を振るひ落し、長靴の雪を蹴りのけた。少し経つて

村の保安警部ロシヤーチンが小さいブリキ製の洋燈ランツを手にして入つて来た。パラフィン油の強い匂ひが漂つた。

「誰かね？」と醫師は訊いた。

「保安警部……」と保安警部は答へた。彼は役所で領收書に署名する時、Constable と綴る癖があつた。

「立會人は何處にりますか？」

「お茶を飲みに行つたら幸いです。」

右側には、旅客用でもあり貴賓室でもある客間があり、左側には大きな煖爐たろきと柵の下に寢臺棚をもつた臺所があつた。醫師と検事とは、頭の上高く洋燈を捧げてゐる保安警部の後について客間へはいつた。そこに白のリンネルに掩はれてゐる長身の體軀が、卓の脚の傍の板敷にちつと横はつてゐた。洋燈の薄暗い光で、白い掩ひ物のほかに、新しいゴム套靴がはつきりと見えた。その居まはりのものは、何もかも不氣味で奇怪であつた。煤けた壁、靜寂、套靴、屍體の靜止。卓の上には冷えきつた湯沸があり、その周りに食料らしい包みが幾つも置かれてあつた。

「地方自治局の小舎で自殺するとは、何たる無分別だ！」と醫師は言つた。「頭へ彈丸を打ち込む

なら、自分の家でやるか、もつと他の場所でやるべきだね。」

醫師は縁無帽キャッソをかぶり、毛皮の外套とフェルトの長靴をはいたまゝで、腰掛ベンチに腰を下した。同導の検事は、向ひ合つて坐つた。

「かういふ氣狂ひじみた、神經虚弱の人間は、非常な自己主義者だ、」と醫師は熱心につゞけた。「神經虚弱者がもしも君と同じ部屋に眠つたとすれば、彼は新聞をがさがさ言はせるだらう。もし一緒に食事でもすれば、君の面前であることも願みないで、妻君と諍いさかひを始めるだらう。そして自殺したいといふ衝動に驅られると、こんな風に自治局の小舎などで拳銃ピストル自殺をして、みんなに大騒ぎをやらせるのだ。老人たちが『神經虚弱時代』を嫌ふのは、そのためさ。」

「老人たちは、いろいろな事を嫌ふものだ、」と検事は欠伸をしながら言つた。「君は前代の自殺と今日の自殺との差異について、舊時代の人たちに指摘してやるといふね。舊時代には、紳士と呼ばれるほどの者は、官金を使ひ込んだために自殺した。然るに、今日の自殺は生の惱み、困憊疲勞のためだ……それはどつちが良いか、とね。」

「生の惱み、困憊疲勞。けれども、どうしても自殺したいのなら、何處か他でやつて貰ひたいものだ。」

「實に人騒がはせな厄介者です。」と保安警部は言つた。「全く人騒がせな、厄介者です。みんなは借えてしまつて、もう三晩も眠りませんでした。子供たちは泣きたてゝゐます。牡牛は乳をしぼつてやらなければならぬのに、女たちは牛小舎へ行きません……日が暮れると、その紳士が暗の中に姿を現すにちがひないと怖がつてゐるのです。もちろん、女たちは愚者ぞろひですが、男の連中でも、怯氣をふるつてゐるものが、一人や二人ぢやありません。彼等は一人づゝ順番に見まはりに行かなければならぬのに、みんな塊まつて行きます。立會人もやはり……」

頭髻の濃い、鼻眼鏡をかけた中年輩の醫師スターチエンユと、二年前に學位をとつたばかりで官吏といふよりは、まだ學生のやうに見える、若い、容子のいゝ検事のルーチンは、黙つて想ひ沈みながら坐つてゐた。彼等はいつか日が暮れてしまつたのに閉口してゐた。もはや朝まで待たなければならなかつた。まだ六時にはならなかつたが、こゝに泊らなければならなかつた。彼等の前には、長い黄昏、暗い暗い夜、退屈、不快な寢床、害虫などがあつた。朝は寒氣が控えてゐた。そして煙突や天井裏に唸る雪嵐に耳傾けながら、二人は、凡てかうした有様が、自分たちの選んで來た人生と、また曾て夢見てゐた人生と、どれほど相異つてゐるかを想ひやつた。自分たちの同僚や友人たちは、今時分は、燈火の輝いてゐる街の大通りを、天氣のことなど氣にも留

めずに歩きまはつたり、或は劇場へゆく支度をしたり、書齋に坐つて本を讀んだりしてゐるにちがひない。おゝ、今頃、ネフスキイの大通りを歩いたり、すぐれた歌を聴いたり、一時間でも二時間でも料理店に坐ることが出来るのだつたら、どんな辛い事を忍びもしようが！

「ウオー、ウ、ウ、ウー！」と嵐は天井裏で吼えた。外側の何かと烈しく打つた。多分、小舎の掲示板であらう。「ウオー、ウ、ウ、ウー！」

「君は随意だが、僕はこゝに坐つてゐないつもりだ。」とスターチエンユは起ち上りながら言つた。「まだ六時前だ。寢床へ入るには早過ぎる。僕は外出するよ。フォン・トウニツツがこの近くに住んでゐる。シールニヤから幾露里でもないから、僕は彼を訪問して、今夜あすこで過すつもりだ。保安警部君、大急ぎで僕の馭者に、馬をはづさないやうに言つてくれ給へ。君はどうする？」と彼はルーチンに訊いた。

「さあ、どうしたら良いか。寝る他はあるまう。」

醫師は毛皮の外套にくるまつて、出て行つた。馭者と話してゐる壁がルーチンの耳にはいつた。そして凍けた馬の上で鈴の音が鳴りはじめた。馬車は行つてしまつた。

「今夜こゝでお休みになるのは、御氣持が悪いでせう。」と保安警部は言つた。「あちらの部屋へ

おいで下さい。むさ苦しいですが、一と晩のことですから、御辛棒願ひます。私は百姓たちから湯沸を借りて来て、すぐに湧かします。乾草も敷いて差しあげますから、具合よくお休みになれませう。」

暫く経つて、検事は臺所でお茶を飲んでゐた。その間、保安警部のロンヤーヂンは扉口に立つて話してゐた。彼は顔と潤ひのある眼に邪氣のない微笑みを見せてゐる、丈の低い、瘦せた、背の屈んだ、色の白い、六十歳ぐらゐの老人であつた。彼はしよつ中、何か美味い肉を噛んでゐるやうに唇をびちや／＼鳴らしてゐた。彼は短い羊皮の外套とフェルトの長靴を着けて、いつも手から杖を離さなかつた。検事の年若さは、彼に隣憫の氣持ちを起さした。彼に親切に話しかけたのは、そんな氣持ちからであつた。

「村長の命令によりますと、警察署長か検事さんがおいでになつたら、報告するやうにとのことでした。」と彼は言つた。「で、私はこれが行つてまゐります……ウオロストまで四露里近くですが、この風と吹雪では、可なり難澁です——夜中までに着くのは難しいでせう。おゝ、ひどい風の音ですな！」

「村長の來る必要はありませんよ、」とルーチンは言つた。「村長には何の用もないのです。」

検事は好奇心をもつて老人を眺めながら訊いた。

「御老人、あなたは何年保安警部をしておいでですか？」

「何年？ さうですな、三十年です。解放令が出てから五年目に、私は保安警部を勤めるやうになつたのです。この職務に期待するところがあつたからでした。その當時から、私は毎日毎日出勤してをります。他の人たちには休日がありますが、私には休日がありません。復活祭の日、會堂の鐘が鳴りわたつて、キリストが昇天し給ふ時でも、私は鞆を下げて歩いてをります——出納局へ、郵便局へ、警察署長の官舎へ、地方監督官のところへ、稅務検査官のところへ、役場へ、貴族へ、百姓へ、信心深い教徒へと言つたやうな具合にです。私は包や書類や、納稅通知や、さまざまの形式をした手紙や布告状をもつてゆくのです——實際、今日では、その様式の種々雑多なことは、黄色、白、赤などの番號を記入しておかなければならぬ程です。そうして貴族や、僧侶や、富裕な百姓たちは、播種はどれだけ、收穫はどれだけ、ライ麥のためにどれ程の地積を要し、どれほどの收穫を得たか。又、燕麥はどう、乾草はどう、種類の多い害蟲の有様はどう？ と一年の中に十二度も書いておかなければならぬのです。それでも、書く方は、たゞ規定通りに書いておけばいいのですが、私の方は往つたり來たりして、書類を届けたり、集

めたりしなければならんです。例へば、この事件のやうに、この紳士を解剖する必要はない、と言つたやうな具合です。それが何の役にも立たぬことは判りきつたことで、たゞ、あなたの御手を汚すだけです。それでも、あなたはその厄介な處置をお取りにならなければなりません。規則ですから、おいでにならん譯にも行きません。丁度そんな風に、私は規則に従つて、三十年といふもの歩きまはつてをります。夏の間は温かで乾いてをりますからよろしいですが、秋と冬は惨めなものです。時々溺れることもあれば、凍死するかと思ふこともあります。凡ゆる種類の事件に出會ひます——意地の悪い奴らは、森に陥坑をしかけたり、私の鞆を隠したりします。私は打たれたこともあれば、法廷へ呼び出されたこともあります。」

「何のために告訴されたのですか？」

「詐偽だといふので。」

「といふのは何故ですか？」

「斯うなんです。書記のフリサンフ・グリゴリエフが誰か他人の所有してゐる地面を請負人に賣つたのです——事實は、彼が欺かれたのですが——私はその事件に巻添を喰つたのです。彼等は居酒屋へ私を連れこんで、火酒を飲ませました。ところが書記は、この仲間には加はらず——一

ばいの火酒も私に提供しませんでした。けれども私が貧乏してをるので、誰も私を信用せず、又、私が有力者でもありませんから、容疑者として私たち二人とも法廷に呼び出されました。書記は監獄へ送られました。私は幸ひに、どの點からも潔白になりました。御承知のやうに、法廷は法令づくめですから、宣告文が讀みあげられたのです。ところで、私の職務のことですが、馴れない人たちにとつては、私の仕事はとても困難の多いもので、まったく死ぬやうな思ひですが、私にとつては何でもないのです。實際、私の足は歩いてゐないと却つて痛みを感じる程です。家に坐つてゐるのは、私には苦痛です。家にをると、ウオロスト局の書記のために、煖爐を焚いたり、水を運んだり、彼の長靴をみがいたりしなければならんです。」

「あなたの俸給はどれくらいですか？」

「一ヶ年八十四ルーブリです。」

「他にもう少しは収入の途もあるでせう？」

「他に収入ですつて？ どうしまして！ 貴族たち、近頃は滅多に心附チップを出しませんからね。今日の貴族たちは、とても頑迷固陋で、何事によらず今までとは反對です。或る書類を届けてやれば、それに難辭をつけますし、途中で出會つて挨拶しても、横を向いて知らん顔です。『邪魔な時

に來たものだ』とか、『飲んだくれ者』とか、『蕙臭い』とか、『謙け者』とか、『狼の息子』とか悪口をつきます。もちろん、親切な人たちもありますが、その人たちから何の得るところがありません。彼等はたゞ私を笑ふだけです。私にいろいろな呼名を附けるだけです。例へばアルツィン氏は、人柄の良い紳士です。その人の容貌風彩から見ると、眞面目で、心の正しい人のやうに思へますが、私に出會ふと、たちまち怒鳴りつけて、自分では何を言つてゐるのか分らなくなつてしまふのです。彼はこんな名稱を私に附けました。『君は……』と彼は言ひました。』

保安警部はその名前を言つて聞かせたが、いかにも低聲だつたので、何と言つたのか聞きとれなかつた。

「何ですつて？」とルーチンは訊いた。「もう一度言つて下さい。」

「Administration（行政）」と保安警部は聲高に繰りかへした。『彼は六年の長い間、その名稱で私を呼んでゐました。』「ハロー、アドミニストレーション！」けれども、私は構ひません、放つておきます。時偶には、誰か淑女が火酒ウオッカの一壺ぐらゐや、麵麩の一切ぐらゐ出してくれることもあり、招待されて御馳走になることもあり。けれども、百姓たちの方が餘程多分に呉れます。百姓たちは、もつと親切で、心に神を恐れてゐる人達です。麵麩を一つくれるものや、甘藍汁を

飲ましてくれるものや、酒を一杯おごつてくれるものもあります。村の長老たちは、お茶の會に居酒屋へ人を招くのが通例です。ですから、さういふお茶の會へ立會人たちは行つたのです。『ロシャーチン』と立會人たちは言ひました。『君はこゝに残つて、私らの代りに番をして下さい。』で、一カベツクづゝ私にくれました。お判りでせうが、滅多にない事件なので、憎えてゐるものですから、昨日は十五カベツク私にくれた上、酒を一ぱい振るまつてくれました。』

「あなたは……あなたは怖くはないんですか？」

「怖くはありません。けれども、私の職務ですから、どう逃れやうもありません。この夏でした、私は町へ囚人を連れて行つたことがあります。すると、彼は途中で私に襲ひかゝつて、棒で私をなぐりました！ あたりは一めん野原と森——どう逃れやうもありませんでした。今の場合は、ちようど、それと同じこつてす。私は紳士のレスニツキイが金満家であつた頃のことを思ひ出します。私は彼の父親や母親を知つてをりました。私はネドシチョートツ村の出身で、レスニツキイの家族は、われわれの處から一露里、いや、もつと近いところに住んでゐました。その領地は、我々の地面の隣りでした。レスニツキイ氏には、信心深い、氣遣の優しい妹が一人ありました。神よ、永遠とこしの追憶のために、使女ユリヤの靈魂を守り給へ！ 彼女は一度も結婚しません

でした。彼女が亡くなつた時には、その財産をみんなに分配しました。御魂の記念として、修道院へ百デシヤチンを、ネドシチョートワの農民組合へ二百デシヤチンを寄附しました。ところが噂によると、兄貴はその遺書を隠して、煖爐で燃してしまひ、土地は残らず自分の所有にしたといふことでした。彼が漁夫の利を占めたことは明かです。けれども、世間は、不正を押し通して済むものではありません。この紳士は、それ以來十二年の間懺悔祭に出ませんでした。もちろん、いつも教會を避けてゐたのです。そして悔悟の折を得ずに亡くなつてしまひました。急死でした。肥つた男でしたから、腦溢血を起したのです。全財産が——負債を拂ふために何もかも——若主人のセリョージャから取り上げられました。そこでセリョージャは、もはや學校をつゞけることも出来なくなり、何の仕事にも向かない身の上となりました。地方長官をしてゐた彼の伯父は、「セリョージャを引きとつて、事務官にしてやらう。保険金を集める役目なら、難しい仕事ぢやない、」と思つたものか、その地位に世話しました。セリョージャは未だ青年で、矜持をもつてゐて、華美な身装をして、贅澤に我儘に暮らしてゐました。汚れた馬車で村を驅けまはつたり、百姓たちと話交はしたりするのは、彼には零落としか思はれなかつたと見えて、彼はいつも眼を落して、悄然と頭を垂れ下げ、物も言はずに、ちつと地面を見詰めながら歩いてゐました。

「セルゲイ・セルゲイウキツチ」と誰かに聲をかけられると、「えつ！」とばかりに四邊を見まはしてから、又もや地面を見詰めながら、手を拱いてゆくのでした。こんな物語には、何の意義もなければ、何の理念もありません。意義の探しようもありませんね。父親は金持ちであつた、そして息子が貧乏になつたといふことは、そりやあ苦難にはちがひありません。けれども、其れならそのやうに諦めれば可いのです。私も以前は、豊かな生活を遂つてゐたものです。馬を二頭、牝牛を三頭、羊を二十頭も所有してをりました。けれども、時の經つに連れて、私に残されたものは、擦りまれた靴一つの他は何にも無くなりました。それさへ、私の所有ではなく、官廳のものなのです。打明けて申上げますと、今、ネドシチョートワでは、私の家は村で一ばん見すばらしい住居です。マキーイは下僕を四人使つてをりましたが、今では、自身身下僕になつてゐます。ペトラツクは四人の労働者を雇つてをりましたが、今は自分が労働者です。」

「どうしてあなたは貧窮に陥つたのですか？」と檢事は訊いた。

「悴どもが飲んだくれたのです、どれ程飲んだか、お話ししても本當にはなさらん程です。」
ルーチンは耳傾けながら、想ふのであつた、自分は早かれ遅かれ、モスクワへ歸つてゆくであらう。一方、この老人は永久にこゝに住んで、いつもいつも歩きまはつてゐることであらう。自

分の生涯の間には、いかに屢々、かういふ打ちのめされた、寝れきつた、「一片の値打ちもない」老人——その心中に、十五カベツクの金や、火酒の燗や、不正に依つては出世できるものでないといふ深い信念が、固く一緒に根を張つてゐる——かういふ老人に出會ふことであらう。

検事は、いつか聴き飽きて来たので、寢床に敷く乾草を持つて来てくれるやうにと老人に言つた。この客間には、枕と一枚の蒲團とを添へた鐵の寢臺があつて、泊ることは出来るのであつた。が、その直ぐ傍に、もう三日間も死體(多分、死ぬ前にはこの寢臺に横はつてゐたにちがひない)が横はつてゐる。今、その上で、どうして快く眠ることが出来るやう……

「まだ、やつと七時半だ、」とルーチンは懐中時計を見ながら思つた。「恐ろしいこつた。」

少しも眠くはなかつたが、どう時間を過しようもないので、彼は横になつて、襪蒲團へもぐり込んだ。ロシヤーチンはいく度も出たり入つたりして、お茶の道具を片づけたり、唇をびちやびちや鳴らしながら溜息をついたり、卓のまはりに足音を立てたりしてゐたが、たうとう彼は、小さい洋燈を取りあげて出て行つた。その長い灰色の頭や、屈んだ後姿を眺めながら、ルーチンは想つた。

「オペラに出て来る魔術師をつくりだ！」

眞暗であつた。窓と窓框につもつた雪が白々と見えたので、雲の中に月のあることがわかつた。

「ウオー、ウ、ウ、ウー」と嵐は唸つた。「ウオー、ウ、ウー。」

「聖なる……使徒たち！」と天井裏から女の咽び泣きにも似た音響が聞えた。「聖なる使徒たち！」

「ぶうつ！」外側では何かが壁にぶつかつた。「さあ！」

検事は聴耳をたてた。そこには女は誰もゐなかつた。聞えたのは風の吼聲であつた。寒くもあつたので、彼は蒲團の上に毛皮の外套をおいた。温かになつた時、彼は、これら凡ての事が——嵐や、小舎や、老人や、次の部屋に横はつてゐる屍體や——これら凡ての事が、彼自身の願つて来た生活とは、どんなに縁遠いものであり、どんなに彼に背馳したものであり、どんなに馬鹿げて不快であるかを想ひやつた。もしもこの男が、モスクワか、或はその附近で拳銃自殺をしたのだつたら、そしてその街で捜査するのだつたら、興味もあり、重要でもあつたにちがひない。多分彼自身も、屍體のある隣室に眠る事を恐れたにちがひない。が、モスクワから千露里も離れた此處では、凡ては異つた光景の中にあつた。それは生活ではなかつた。人間の存在といふ程のものではなかつた。ロシヤーチンが言つたやうに、たゞ規則の下に置かれた何物かに過ぎなかつた。ルーチンがこのシールニヤから馬車で引きあげるや否や、それらは直ぐに忘れられてしまふにちが

ひない。眞の祖國露西亞は、モスクワであり、ペテルブルグであり、こゝは片田舎であり、移住地なのであつた。未來への生活に進むことを夢想し、名聲ある人物にならうと夢想するやうな時には、例へば検事が殊に重要である場合とか、起訴者が巡迴裁判に於ける社會的大立者である場合には、誰しも心中にモスクワを描くものなのだ。生活はモスクワでなければならぬのだ。こんな片田舎とは、何の關係もないのだ。誰しもその無意味な地位を顧みて、生涯にたゞ一つのことを——出来るだけ早く、早く逃れてしまひたいと——願つてゐるだけである。ルーチンは、自分がモスクワの街を歩きまはつて、親しい家を訪問したり、親戚や友人たちに出會つたりした時の有様を胸に描き出しながら、自分はまだ二十六歳になつたばかりで、今から五年か十年の中に、この土地から離れることが出来、モスクワに住むことが出来るやうになつたら、それでもまだ遅くはないであらう、自分の前には全き生涯があるであらうと想像して、一種恍惚とするやうな感傷を心に覺えた。そして意識が朦朧となり、彼の想像が入り亂れた時、彼はモスクワの法廷の長い廊下や、辨論を述べてゐる自分の姿や、妹たちや、何故か「ウォー、ウ、ウ、ウ」と物憂げな音色をつゞけてゐる管弦樂合奏を幻影に描き出した。「ばたん、ぶらう」と再び響いた。「ぶらう！」と、不意に、或る日彼が、地方局の小さい事務室で書記と話してゐた時、濃い頭髮と暗い眼付

とをもつた、瘦せた蒼白い男がはいつて來たことを想ひ出した。その男は、晝食の後であまり假睡み過ぎた人によく見るやうに、眼の中にどんよりとした色を浮べてゐて、それが彼の華奢な敏感さうな横顔を損つてゐた。彼のはいてゐた長靴は、彼に似合つてゐなかつた。無様な格好であつた。書記はその男を紹介した。

「我々の保險事務官です。」

「さうだ、レスニツキイだつた、あの男は、」とルーチンは想ひ出した。

彼はレスニツキイの軟かな聲を想ひ出した。彼の歩調を想像した。すると、誰かゞレスニツキイのやうな足付で、彼の居まはりを歩いてゐるやうに思はれた。

突然、彼はぞつと顫へあがつた。彼の頭は寒さに震はれた。

「そこへ來たのは誰だ？」と彼は驚いて訊いた。

「保安警部です！」

「何か用ですか？」

「ちよつとお訊ねに來ました……あなたは今夜、村長を呼ぶ必要はないと仰しやいましたが、村長は立腹なさりはしませんまいか。知らせるやうにとの命令でしたが、行かなくても宜しいでせう

か？」

「どつちでも良いです、そんな不快なことは、」とルーチンは不興げに言つて、再びもぐり込んだ。「立腹なさるかも知れませんが……お知らせにゆくことにします。御機嫌よう、お休み下さい、」とロシヤーチンは出ていつた。

通路の方で咳拂や、抑へつけたやうな聲がした。立會人たちが歸つて來たのであらう。

「明日は早く、あの乞食どもを追拂つてしまはう……」と検事は思つた。「夜が明けたら、直ぐに審問をはじめやう。」

うとうとと眠りに落ちはじめた時、不意にまた足音がした。今度は、おづおづした音ではなく、素早い、うるさい足音であつた。一つの扉口がぎいつと開いて、燃寸を擦りながら何か言つてゐるのが聞えた……

「寝てるのかね、起きないか、」と醫師スターチエンユが燃寸を一本一本擦りたしながら、氣忙しい、苛々した調子で訊いてゐた。彼は雪まみれになつて、凍つた空気を一緒にもつて來た。

「眠つてるのか、起き給へ！　いつしよにフォン・トウニツツのところへ行くのだから。彼は君のために自分の馬を寄越したよ。行かう。ともかく、行けば晚餐の御馳走はあるし、人間らしく

眠れるのだ。僕は自分で君を迎へに來たんだ。素敵な馬だ。二十分もかゝらずに向ふへ着く。」

「今、何時だ？」

「十時十五分。」

ルーチンは眠さうな、忌々しげな容子で、フェルトの套靴をはき、毛皮の縁のついた外套をつけ、縁無帽と頭巾とをかぶつた。そして醫師と一緒に出ていつた。そこらには鋭い寒氣はなかつたが、烈しい、刺すやうな風が吹き捲くつて、物恐ろしく疾走してゐるやうに見える吹雪を、道路に沿ふて馳らしてゐた。雪溜はすでに柵や扉口の通路に積もつてゐた。醫師と検事とは楹に乗りこんだ。眞白になつた馭者は、二人の上に屈んで、幌をかぶせた。二人とも、むつと熱かつた。

「出發！」

彼等は村を通して驅けた。「羽のやうな溝を切つてゆくものだな、」と検事は足跡をつけてゆく馬の足の運びを絶えず見詰めながら思つた。どの家にも、まるで大祭の夜でもあるかのやうに灯がさしてゐた。百姓たちは死人に恐怖を抱いて、寢床にはいらなかつたのであつた。馭者は自治局の小舎の傍に待たされてゐた間に氣嫌を悪くしたものか、不愛想に黙りこんでゐた。そして今、彼も死人のことを思つてゐるらしかつた。

「フォン・トゥニツの家ぢや、」とスターチエンコは言つた。「君が一人残つて、小舎で泊ると聞くと、何故連れて來なかつたかと僕を責めたてたよ。」

村を出はづれると、馭者はあたりを見まはしながら、突然、聲高に叫んだ。「道が間ちがつた！」
彼等は誰か人影の立つてゐるのに気がついた。彼は膝頭まで雪の中に突き込んで、道路をそろそろと進みながら、馬を見詰めてゐた。検事は蛇曲のついた杖や、頤髯や、鞆を見た。それは多分ロシヤ人にならぬと思つた。彼が笑顔を見せたかのやうにさへ思つた。する中に、彼の姿はバツと閃めいて、たちまち消え去つた。

道路は最初のうち森の縁をつゞき、やがて廣い疎林づたひになつた。古い松林や、若い樺の樹立や、丈の高い、瘤だらけの、若い樺の木が、近頃切られたばかりの切跡に、一本一本立つてゐるのが、ちらちらと見えた。が、やがて吹雪の中に包まれてしまつた。馭者は森が見えると言つた。が、検事には、馬の足跡のほか何にも見えなかつた。風は彼等の背中に吹きつけた。

突然、馬が立ち停つた。

「おい、どうしたんだ？」とスターチエンコは苛立たしく訊いた。

馭者は物も言はずに馭者臺から下りて、地だんだ踏むやうな格好をしながら、櫓のまはりを見

てまはつた。彼はだんだんと大きく、より大きく輪となつて、だんだんと遠く、より遠く離れてゆき、まるで踊つてゐるやうな姿に見えたが、やうやく彼は歸つて來て、右の方へ曲りはじめた。

「道を見失つたのか？」とスターチエンコは訊いた。

「さうがす。」

間もなく小さい村にはいつた。そこにも一つの灯も見えなかつた。またもや森、野原。又もや彼等は道路を見失ひ、馭者は再び馭者臺を下りて、櫓のまはりを踊り歩いた。櫓は暗い並木に沿ふて、素疾く走つた。勢ひ立つた馬は、蹄鐵で櫓を蹴りつけた。そこにも此處にも樹立から凄じい音響が聞えてゐたが、さながら空間を翔つてゐるかのやうに何にも見えなかつた。する中に、突然、通路と窓に灯のさしてゐるのが彼等の眼を射つた。そして濃厚しさうな引き伸ばしたやうな犬の吼聲が聞えた。彼等は到着したのであつた。

彼等が毛皮の外套とフェルトの長靴をぬいでゐると、その時階上にピアノの音がして、*Un petit Verre de Clicquot* (クリツコートの小さい鏡) を弾いてゐるのが聞え、それに合せて子供たちの足拍子を踏んでゐるのが聞えた。室内にはいるや否や、彼等は大邸宅の古い部屋に特有な、居心地のいい温かさや或る香氣とを感じた。戸外の悪天候にも拘らず、こゝの生活は瀟洒で

快適であつた。

「ようこそ！」

びつくりする程太い頸首と口髭とをもつた、圓々と肥つたフォン・トゥニッツは、検事と握手しながら言つた。「ようこそ！ お待ちして頂きました。お目にかゝれて歡ばしいです。私は或る範圍で、あなたの同僚です。たつた二年間でしたが、私も代行検事をしてゐた事があるのです。領地を見守るために、この地に移つて來まして——いつの間にか老ひこんでしまつたやうな譯です。よくおいで下さいました。」と彼はあまり聲高にならぬやうにと、抑へつけた調子で言つた。彼は客を階上へ案内していつた。「私は妻をもつてをりません。亡くなりましたのです。けれども娘たちを御紹介出來ます。」

彼は階段下へ振向きながら、鳴りわたるやうな聲で叫んだ。

「イグナットに言ひつけて、明日の朝八時に、櫓を用意さして置け。」

みんな同じ灰色の服を装ひ、同じ型に頭髮を結んだ、若い、綺麗な彼の娘たちと、やはり若く、美しい彼の従姉妹たちとは、その子供たちと一緒に客間に集まつてゐた。すでに彼女たちと知己になつたスターチエンコは、何か歌つてくれるやうにと、さつそく彼女たちに乞ひはじめた。

女たちの二人は、もう長いこと歌ふ機會はなかつたし、弾きもしなかつたからと逡巡してゐたがやうやく従妹がピアノの前に坐つた。彼等は顫へる聲で「The Queen of Spades (スベットの女王)」の中から二人奏曲を唄つた。それから再び「Un petit Verre de Chicquot」が弾かれ、子供たちが足拍子を踏み鳴らした。スターチエンコも踊りまはつた。みんなは笑聲をあげた。

子供たちは、お休みなさいを言つて、寢室へと出ていつた。検事は笑つたり、四班舞踏を踊つたり、巫山劇たりした。そして何もかもが、たゞ夢なのではないかと彼は怪んだ。地方自治局の小舎、その片隅にある乾草の堆積、蜚蟲のかさかさいふ音、煤け汚れた周圍、立會人の話聲、風、吹雪、道路を見失ふ危険、それらが忽のうちに變つて、この立派な、あかあかと燈の輝いた部屋、ピアノの音色、美しい娘達、捲毛の頭をした子供達、楽しい賑かな笑聲——僅か一時間ほどの中に、二露里か三露里の距離を置いて回轉したこの變化は、或る神仙譚のやうにしか思へなかつた。實際にあり得ることとは思へなかつた。そして胸中に起る、さまざまの想ひは、彼を長く楽しませなかつた。眼の前にあるこの光景は、生活といふものではなくて、生活の断面であり、碎片であり、この部屋の凡ゆるものは、何と解釋していかもわからない、たゞ偶然の出來事としか思へなかつた。凡ゆるものが偶然ではなしに、確固とした理由と法則の下にある教養の中心地、

例へば、自殺の場合にしても、物の一般状態から見て、それぞれ理由が明白であり、何故それが起つたか、それに何の意味があるかを説明出来る教養の中心地から、遙かに遠いこの邊鄙な荒野に、彼等の生を終るであらう娘たちに對して、彼は何となく憐憫をさへ感じた。今、この荒野で彼をとり捲いてゐる生活が、彼にとつて事理明白でないとすれば、了解し難いとすれば、それは實在のものとは言へないのだと彼は思つた。

夕餐の時に、會話はレスニツキイの上に移つていつた。

「あの男は妻君と子供とを遺して亡くなつたのです」とスターチエンコは言つた。「排拒すべきは神經虛弱者です。神經組織の狂つてゐる人々の結婚に、私は反對です。私は彼等の同類を繁殖する權利と能力とを認めることが出来ません。この世に神經病を振りまくものとして、虚弱質の子供といふものは一つの罪惡です。」

「あの男は不幸な青年でした」とフォン・トゥニツは靜かに頸づいて、嘆息をつきながら言つた。「人間といふものは、生活を……若々しい生活を……育て上げてゆくためには、どんなに悩み、どんなに考へなければならぬでせう？ あゝいふ不幸は、どんな家族にも起るかも知れません。悲しむべきこつてです。かういふ生活に耐へてゆくといふことは、何といふ苦しい……」

娘たちは、みんな黙りこんで、生眞面目な顔付で父親の言葉に耳傾けてゐた。ルーヂンは自分も何か意見を吐かなければならぬと思つた。が、何の考へも浮かばなかつた。彼はたゞ單純に言つた。

「さうです、自殺は好ましからぬ現象です。」

彼は温かな部屋で、枕の下に綺麗な純白の敷布の伸べられた、軟い寢床に横はつた。が、何故か、快さを感じなかつた。多分、醫師とフォン・トゥニツとが次の部屋で話してゐるためかも知れなかつた。それとも、天井と煙穴を吹きぬける風が、自治局小舎に唸つてゐたと同じやうに、

「ウオー、ウ、ウー！」と頭の上で鳴りどよむためかも知れなかつた。
フォン・トゥニツの妻君の亡くなつたのは二年前であつた。が、彼は今でも、妻君の居ないことに馴れ切らず、話が出る度に妻君の名を口にしてゐた。そして代行検事だつた素振などは、もう見られなかつた。

「若しかしたら、かうした状態の日は、自分の上にも來るかも知れないではないか？」とルーヂンは尙も壁越しに吸ひとられてゆくやうな主人の聲に耳傾けて、うとうと眠に落ちながら思つた。検事は熟睡出来なかつた。身内が熱して、氣分がわるかつた。うとうとしながら彼は、今ゐ

る處がフォン・トゥニツの家ではなく、軟い綺麗な寢床に横はつてゐるのでもなく、やはり自治局小舎の乾草の上に寝てゐて、立會人たちの抑へつけた聲を聞いてゐるやうな氣がしてならなかつた。彼は、レスニツキイが、十五歩とは離れてゐない間近のところにあるやうな幻覺に襲はれた。夢のうちに、黒い頭髮をした、蒼白い保険事務官が、汚れた長靴をはいて、書記の事務室に来てゐる姿を思ひ浮べた。「この人が我々の保険事務官です……」

すると、やがて又彼は、レスニツキイと保安警部のロシヤーヂンとが、肩を並べて、お互に身を支へ合ひながら、雪の曠野をそろそろと歩いてゆく姿を夢に見た。雪は二人の頭のあたりに渦まき、風は背中に吹きつけてゐたが、彼等は「われらは進む、たゆまず進む……」と歌ひながら歩いてゐた。

老人はオペラに出て来る魔術師そつくりであつた。二人は、さながら舞臺にゐるかのやうに歌つてゐるのであつた。

「われらは進む、たゆまず進む……君は温かになつて、明るい、居心地のいい部屋にゐるが、僕らは深い雪の中を、寒氣と嵐に晒されながら歩いてゐる……僕らは慰安といふものを知らない、歎びといふものを少しも知らない……僕らは、人生の重荷を……君らの、又僕らの重荷を負ふて

ゆくのだ……ウオー、ウ、ウー！ われらは進む、たゆまず進む……」

ルーヂンはばつと覺めて、寢床に起直つた。何たる混亂した、悪い夢を見たことか。何故、保安警部と事務官とを、いつしよに夢に見たのか。何たる諍けた夢だらう！ が、今、彼の胸は烈しく動悸打つてゐた。そして手に頭を支へて、ちつと坐つてゐると、あの事務官と保安警部との間には、實際、何か共通點があるやうに思はれて來た。實際、あの二人は、肩を並べて、お互に身を支へ合つてゐるではないか？ 二人を繋ぐ結紐は見えないが、その意味と精神とは、二人の間のみか、彼等とフォン・トゥニツの間にも、凡ての人々の間にさへも存在してゐるのだ。この生活に、この邊鄙な曠野にさへも存在してゐるのだ——何事も偶然ではないのだ。あらゆるものは或る共通の理念を持つてゐる。あらゆるものは一つの精神をもち、一つの標準を持つてゐる。それを理解するためには、考へるだけでは十分でない。論ずるだけでは十分でない。人生に對する内觀的能力を以てしなければならないのだ。誰にも附與されてゐる譯ではないところの天賦の能力を以てしなければならないのだ。破滅に陥つた不幸な人間や、自殺した不幸な人間や、醫師が「神經虛弱者」と呼んでゐる人間や、この人生を、たゞ彼方こつちへと歩きまはつて日々を費してゐる百姓たちの生活は、自分自身の生活をたゞ偶然の出來事と考へてゐる者から見れば、凡て

は、單に偶然であり、人生の斷片にしか過ぎないであらうが、自分自身の生活を、全宇宙の一部分として考へもし、理解してもゐる者にとつては、凡ては——驚異に價する合理的の——一つの有機體なのだ。ルーヂンはこんな風に思つた。それは長い間、彼の胸底に隠されゐた一つの思想であつた。それが今現に開かれ、明かに意識されたのであつた。

彼は横になつて眠りはじめた。と、再び彼等は、みんな一緒になつて、歌ひながら歩いてゐた。「われらは進む、たゆまず進む……僕らは人生の、いとも苦難な慘酷なものを負ふてゆくのだ。僕らは君に安慰な楽しいものを残してゆくのだ。それ故にこそ、君は夕餐に坐つて、何故僕らが苦み敗れたかを論じ、何故僕らが、君と同じやうに元氣で満足してゐないかを冷靜に鋭敏に論ずることが出来るのだ。」

彼等の歌つてゐる事柄は、會ては彼の心中にも起つたものであつた。が、この想念は、何か他の想念の背景の中に隠されて、霧の夜の遠い燈火のやうに、影薄くぼかされてゐたのであつた。そして彼は、自殺者や百姓たちの苦みが、彼自身の意識にも横はつてゐたことを——これらの人々が、その運命に甘んじて、人生の、いとも苦難な陰惨な重荷を負ふてゐることを、彼自身に會得させるために——彼自身の意識にも横はつてゐたことを覺つたのであつた。かうした想念を會

得して見れば、幸福な満足した人々の間の、光明と活動とに充たされた人生を、彼自身にも念願することは、夕餐の幾時間かの感興に、困難と不安に打ちひしがれた人々の新しい自殺を非難したり、弱い見棄てられた人々に救ひの手を差出すこともなく、たゞ冷笑と嫌惡とを以て論じたりすることとなるのである。

と、またもや誰かが、槌で彼の額を叩くやうに歌つた。「われらは進む……たゆまず進む……」翌朝彼は、頭痛のために早く眼を覺まして、物音に呼び起された。次の部屋でフォン・トゥニツが醫師に向つて言つてゐた。

「今、出かけられやしませんよ。戸外の模様を御覽なさい。強情おつしやらずに、馭者にお訊きになるがよいです。こんな天氣に百露も人を連れてゆけるもんぢやありません。」

「しかし、たつた三露里ばかりです」と醫師は嘆願するやうな調子で言つた。

「ところが、一露里としたつて、駄目な時は駄目ですからね。門を出れば、たちまち地獄です。瞬く間に道にはぐれてしまふでせう。お留めしても、おきゝにならなければ、御隨意ですが。」

「この容子ぢや、夕方までには靜かになりやす」と煖爐にあたつてゐた百姓が言つた。

そして隣りの部屋で、醫師は、長い長い冬の嚴酷な氣候とその影響のために、場所から場所へ

の運動を防げられ、人々の智的發達を阻まれる露西亞人の性格について話しはじめた。ルーチンはその意見を苦々しく聴きながら、窓框に雪のつもつた窓から戸外に眼を移した。見渡すかぎり涯もなく曠野を蔽ふてゐる白銀の碎片や、右に左に頸垂れた頭を振つてゐる樹々を眺めながら、風の呻吟と戸のがたつく音とに耳傾けた。そして陰鬱な想ひに打たれてゐた。

「うむ、あんな意見から、何の倫理を曳出すことが出来るといふのだ？ それは暴撃といふものだ。たゞ、それだけだ……」

正午に彼等は間食をとつた。それから家の周圍を當もなく歩きまはつてから、窓のところへ行つた。

「レスニツキイはあすこに横はつてゐる、」とルーチンは、あたり一めんにくるぐると猛烈に渦まき吹雪を見渡しながら思つた。「レスニツキイはあすこに横はつてゐる。立會人が待つてゐる……」

雪嵐は、大てい二日二晩ぐらゐ、稀れにはもつと長くつゞくものだと思つた。彼等は天氣の話をした。六時に晝餐をとつて、それから骨牌をやつたり、歌つたり踊つたりした。たうとう又、彼等は夕餐についた。その日は暮れて、彼等は寢床にはいつた。

その晩、曉方になつて、嵐は歇んだ。起きあがつて、戸外を見ると、弱々しい、垂れさがつた枝をもつた裸の柳は、ぢつと靜かに立つてゐた。自然は今、その興宴を、その狂氣の夜を恥ぢ、その興奮にまかせてゐたことを恥ぢてゐるかのやうに、どんよりと靜まり返つてゐた。二頭並んで鞍を置かれた馬は、朝の五時から正面の扉口に待つてゐた。すつかり明るくなると醫師と檢事は毛皮の外套と長靴をつけて、主人に左様ならを言つてから戸外へ出た。

馭者の立つてゐる横側の踏段の傍に、古ぼけた皮の靴を肩にかけた、全身雪まみれになつた保安警部のロシヤーチンが立つてゐた。彼の顔は赤くほてつて、汗でぬれてゐた。紳士たちを助けのせたり、足に蔽物をかけたりするためにやつて來た下僕は、彼を見ると叱りつけるやうに言つた。「何だつて其處へ立つてゐるんです、退いて下さい！」

「長官、みな心配してをります、」とロシヤーチンは満面に邪氣のない微笑みを浮かべながら言つた。長い間待つてゐた人達をやつと見つけて、いかにも嬉しさうであつた。「みんな非常に御案じしてをります。子供たちは泣いてをります……街へお歸りになつたものと彼らは思つてをりました。どうぞ、おいで願ひませ……」

醫師と檢事とは口を噤んだまゝ櫓にのつた。そしてシールニヤへと走らした。

女教師

馬車が街を出はづれたのは、八時半頃であつた。

縣道は乾いてゐた。和やかな四月の陽光は、暖かに照りわたつてゐたが、溝河や森にはまだ雪溜りがあつた。呪はしい、陰鬱な、長い冬はやうやく終つて、春が俄かに訪れたのであつた。が、その暖かさも、春のそよ風に温められた荒跡の疎林も、湖水のやうに廣々とした雪解水の上を渡つてゆく鳥どもの黒い群も、遠く恍惚の氣持ちを誘つてゆく、美しい、深い青空も、いま馬車に坐つてゐるマリヤ・ワシリエフナには、何の新しさもなければ、何の感興をも起させなかつた。彼女が女教師になつてから、もはや十三年経つてゐた。そしてその長い歲月の間、町へ月給を受取りにゆく途中、いく度この路を通つたか知れなかつた。今見るやうな春であらうと、霖雨のつゞく秋の夕であらうと、彼女にとつては、凡てが同じであつた。彼女は何時も、何時も——明けでも暮れても、たゞ一つのことを——出来るだけ早く、この異郷の生活を終りたいといふ一つの

ことを願つてゐるのであつた。

彼女には、この村で送つた生活が、年から年へと、百年もつゞいたやうな氣持ちがした。そして其處らの石塊の一つ一つも、町から學校までの途上に見る樹木の一本一本も、残らず見馴れたものばかりのやうに思はれた。彼女の過去はこゝにあつた。現在もこゝにあつた。學校から町へ町から學校へと、往つたり歸つたりする他には、何の未來をも想像することが出来なかつた……

彼女は女教師になるまで、過去を振返つて見るやうな氣持ちは持つてゐなかつた。過去のことば、傍から忘れていつた。その頃は、父親も母親もまだ存命だつた。彼等はモスクワの赤門近くにあつた大きな貸部屋に住んでゐた。が、その頃の生活の凡ては、今、夢のやうに色褪せた記憶を残してゐるに過ぎなかつた。彼女の父親は、彼女の十歳の時に亡くなり、それから幾年も経たずに、母親も逝つてしまつた……彼人になつた一人の兄がゐた。最初の間は、よく手紙を交換してゐたが、その中に、兄は書く習慣を失つたものか、手紙の返事をよこさなくなつた。彼女に残された古い持物と言へば、母親の寫眞だけであつたが、それも今では、學校の濕つぽい空氣に面影が薄れて、頭髮や眉毛のほかには、臘氣にしかわからなかつた。

何處里か、可なり遠くまで來た時、馬を御してゐた老爺のセミヨンは、振向いて言つた。

「町で官廳の書記が捕縛されたつてことです。曳つばつてかれたさうです。或る獨逸人と共謀になつて、モスクワ市長のアレキセエーフを暗殺したんださうでさ。」

「誰にきいたの？」

「イワン・イワノフの居酒屋で新聞讀んでるのをきいたんです。」

そして再び、彼等は長いこと黙りこんでゐた。

マリヤ・ワシリエフナは學校のこと、近づいてゐる試験のこと、授驗させる男女の子供たちのことなどを思つてゐた。試験のことを彼此と思ひめぐらしてゐると、一臺の四頭曳の馬車が、後方から彼女の馬車を追つて來た。それには去年學校の試験委員をした、ハーノフといふ隣家の地主が乗つてゐた。彼は近づくと、彼女に氣がついて、點頭おせうをした。

「お早うございます。」彼は彼女に聲をかけた。

「町からお歸りですか。」

暢氣者らしい態度と、はやくも衰褪の徴向を見せてゐる容貌とをもつた四十男のハーノフは、可なり老けてはゐたが、まだ血色がよく、女に持て囃されてゐた。彼は大きな邸宅に獨り暮らしをしてゐて、どこへも勤めてゐなかつた。人々の噂によると、家では何一つせず、口笛吹きながら

室内を往つたり來たり、年とつた下僕と將基をさしたりしてゐるといふことであつた。彼はまた、非帯な飲酒家だといふ評判であつた。事實、去年の試験の時、彼の持つて來た試験用紙は、酒と香水の匂がした。その際彼は、上から下まで新調の服装をしてゐたので、マリヤ・ワシリエフナは、彼の垢抜けした容子に惹きつけられて、彼の傍に坐つてゐた間中、何となく嬌羞を覺えさせられたものであつた。學校ではいつも嚴格な、氣むづかしい試験委員を見馴れてゐたのに、この男はお祈禱いのちの言葉を一行も暗記してゐないばかりか、質問の出し方もわからず、たゞ非常に愛想がよく、ゆつたりとして、いゝ點數を與へることしか知らなかつた。

「私はバリピストを訪問に行つたのですが、留守だつたので、引返して來たんです。」と彼はマリヤ・ワシリエフナに言つた。

彼等は縣道から曲つて、村への横道にはいつた。ハーノフの馬車は先にたち、セミヨンは後につゞいた。四頭の馬は泥濘の中に重い馬車を懸命に曳きながら、歩くやうにのろのろと進んだ。セミヨンは道端の方へと避けながら、雪溜りに乗りつけたり、水溜りをはね散らしたり、あちこちへ馬車を變へて、振り落されさうになつては、手綱をひかへてゐた。マリヤ・ワシリエフナは尙も學校のこと、算術の問題が難し過ぎはしないかといふことなどを考へつゞけてゐた。そして

昨日、誰も出てゐなかつた自治局に對して、抑へ難い腹立たしさを感じた。誰もゐないとは、何たる怠慢だらう！ 何一つ實直に勤めるではなく、たゞ彼女に盾衝いたり、子供たちを打つたりする守衛を解雇してくれるやうにと、二年もつゞけて當局者に頼んでゐるのに、彼等はまるで注意を拂はなかつた。役所で代表者を見つけ出すことは困難であつた。時偶に採しあてると、彼は責任を果す暇がなかつたと詫び入るやうな調子で言ふのであつた。檢察官は三年にたゞ一度學校を視察するだけであつた。彼は稅務局の官吏で、たゞ手蔓によつて檢察官の地位を得た男であつた。その職務については何にも知らなかつた。學務委員會は、めつたに開かれず、何處で開かれるのかもわからなかつた。學校管理者は無學文盲の百姓で、鞞皮なかしがはの名人と言はれる男、愚劣で、粗暴で、守衛とは大の仲善しであつた。嘆願しても、相談しても何の役にも立たなかつた。

「あの人、ほんとに住い顔色だわ、」と流し目にハーノフを見ながら彼女は思つた。

村道は悪くなるばかりだつたので、彼等は森の中へはいつた。が、どつちに向つても、避けて行きようがなかつた。車輪は深く浸り、水をはね散らかし、ごぼごぼ音を立て、泥土どろがびしやりと跳びついた。

「何といふ道だ！」とハーノフは言つて、笑ひ出した。

女教師はちつと彼を眺めながら、この風變りな男が、何故、こんな田舎に住んでゐるのか、了解出来なかつた。彼の財産、氣の利いた風彩、洗練された態度など、この泥濘路や、見棄てられたやうなこの邊鄙な寂びしい土地に何の用があるのだらう？ 彼は何か特別な利益を得てゐるわけではなし、セミヨンと同じやうに、この凄じい道路に馬車を驅つて、あつちこつちへ抛げ出されさうになつたり、同じ不快を我慢したりするだけではないか。ペテルブルグにでも外國にでも住んでゐられるのに、何故こんな處にゐるのか？ 彼のやうな富裕者にとつては、この惡道路の代りに立派な道路をつくることも、この耐え難い荒野を開拓することも、彼の馭者やセミヨンの掣め顔を和げてやることも、何の難かしいことはないと言つてゐた。が、彼はたゞ笑つてゐた。そんなことは氣にもかけず、佳い生活を欲してもゐないらしかつた。彼は親切で、溫和で、單純で、試験委員の時に、お祈禱いのりの言葉を一行も暗記してゐなかつたと同じやうに、この寂寥たる生活を少しも氣にかけてゐなかつた。彼が學校へ寄附したものは、地球儀一つであつたが、一般教育の普及のためには、最も有用な人間であり、優れた活動家であると、自ら思ひ込んでゐた。あの地球儀は、こんな處で何の役に立つだらう？

「捕つかまつて、下せえ、ワシーリエフナ、」とセミヨンが言つた。

馬車は烈しく跳りあがつて、今にも轉倒しさうになつた。何か重いものがマリヤ・ワシーリエフナの足に凭れかゝつた——それは彼女の買入れて来た荷包であつた。そこには險しい登り坂があつて、うねり曲つた幾筋もの小流が音をたてながら流れてゐた。道路はその水に喰ひ喰はれてゐるらしく、うまく越えられさうもなかつた。馬は苦しげに息喘いでゐた。ハーノフは馬車から下りて、長外套を着たまゝ道路の縁を歩いた。彼は汗をかいてゐた。

「何といふ道だ！」と彼は言つて、又もや笑ひ出した。「これちや馬車が忽ち滅茶々ですよ。」

「旦那は、こんな天氣にわざわざ馬車を出すものはねえでせう。」とセミヨンは當てこするやうに言つた。「お宅にゐらしつやればいゝぢやがあせんか？」

「家にゐるのは退屈だからね。老爺さん、私は坐り込んでゐるのが嫌ひなんだ。」

老ひふけたセミヨンにくらべては、彼は若々しく、頭丈に見えた。が、それでも疲勞に勝てない衰退の影は、その身振りにも現はれて、荒れた道路には弱りきつてゐた。と、不意に、森の中で元氣のいゝ口笛の音がした。マリヤ・ワシーリエフナは、この男が、これといふ明らかな原因も、理由もなしに、いつの間にか老ひこんでゆく様を、彼のために悲しくも思ひ、憫れにも思つた。自分が彼の妻か妹であつたら、彼の困憊疲勞を救ふために、自分の生涯を捧げるだらうと思

つても見た。彼の妻であつたら！が、生活には運命づけられたものがある。彼がこんな處で獨り住んでゐるといふのも、彼女がまた、見棄てられたやうなこの村に、たゞ獨り暮らしてゐるといふのも、言はゞ運命なのだ。その上、彼と彼女がお互に接近し合ふべきだといふやうな考へは、成り立ち難い一笑話に過ぎないのだ。實際、生活は定められたものであり、人間の關係といふものは、思へば思ふほど、すべての判断を超えた、複雑微妙なものなのだ。

「まったく解らないわ。」と彼女は思ひ沈んだ。何故神様は、弱い、不幸な、無用な人間に、優雅な姿や美を與へて下さつたのか、何故、憫れに美しい眼を與へて下さつたのか——何故それらが魅力に充ちてゐるのか？」

「私はこゝから右へ曲らなければなりません。」とハーノフは馬車に跳び乗りながら言つた。「左様なら、氣をつけていらつしやい。」

彼女は又もや生徒のこと、試験のこと、守衛のこと、學務委員會のことなどに想ひをとられた。風が遠ざかりゆく馬車の響を送つて来た時、これらの想ひは、他の想ひと混り合つた。彼女は美しい眼や、戀や、決して有り得ない幸福について想ひ耽らすにはゐられなかつた。

「彼の妻になつたら！」

朝の寒さに、暖爐を焚いてくれるものは誰もゐない。守衛は姿を見せない。明るくなると直ぐに、子供たちは雪や泥まみれになつて、がやがや騒ぎながらはいつて来る。何もかも不便で、むさ苦しい。彼女の寓居は、臺所の附いた一室であつた。毎日勤めの後では、きまつて頭痛がした。晝食の後では胸焼けがした。彼女は薪木代や守衛の給料に、生徒たちから金を集めなければならなかつた。學校管理者——あの肥りかへつた、不仕鱈な百姓——に金を送つて、薪木を寄越してもらふやうに哀願しなければならなかつた。夜は試験や、百姓や、吹雪を夢に見た。かうした明け暮れが、彼女を老けさせ、野鄙にさせ、鉛人形でもあるかのやうな醜い姿にさせ、片意地にも、臆病にもさせた。彼女は、しよつ中怯けてゐた。自治局の委員や學校管理者の前では、いつも椅子から起つて、もう掛けようとはしなかつた。誰か彼らの一人について話す時には、禮儀正しい謙遜な物腰になつた。誰も彼女を美しいと思ふものはなかつた。愛情もなしに、親しい友情も、愉快な知己もなしに、その日その日は物寂びしく過ぎてゆくのであつた。かうした境涯で、彼女が若し戀に落ちたとしたら、それはどんなに惨めであらう？

「しつかりして下せえ、ワシーリエフナ！」

再び急な登り坂……

彼女が女教師になつたのは、或る使命を感じたからではなく、たゞ生活の必要からであつた。曾て使命について考へたことはなかつた。教育の普及に奉仕するといふやうなことも考へたことはなかつた。何時も彼女にとつて、勤務の中の最も重要なものは、生徒のことでもなければ教化のことでもなく、たゞ試験のことだけであつた。神聖な使命や教化の普及について考へるやうな餘裕が、どうして彼女に得られよう？ 教師たちや、俸給の安い醫者たちや助手たちは、烈しい仕事に疲れて、頭の中は何時も、日々の麴麴や、薪木や、病氣の勞苦に一ぱいになつてゐるので、或る理想に仕へるとか、民衆に奉仕するとか、そんな理念に慰められることすらなかつた。それは過重の仕事であり、感興のない生活であつた。そしてマリヤ・ワシーリエフナと、たゞ黙々と耐へ忍ぶ馬車馬のみが、同じやうに、それに甘んじてゐるのであつた。神聖な使命や理想への奉仕について語るやうな潑刺とした、頭腦の鋭敏な人たちは、やがて直ぐに屈托して、その仕事を見棄てゝしまふのであつた。

セミヨンは乾いた、距離の近い道を選んでいつた。最初は牧場づたいに、次には村の家々の後側を、といふ風に。或る場所では百姓たちがそこを通させなかつた。他の場所では僧正の領地があつて、横切ることが出来なかつた。また、も一つの場所では、地主から一つの區劃地を買ひと

つたイワン・イワノフが、その周囲に溝を掘つておいたので、馬車を後戻りさせなければならなかつた。

馬車はニージニエ・ゴロデイスチエに到着した。まだ雪溜りの残つてゐる、馬糞の散らかつた廣場にある居酒屋の近くに、廢物の硫酸の大壘を一ぱい積んだ荷馬車が停つてゐた。居酒屋の中には、大勢の客がゐた。誰も彼も馭者であつた。あたりには火酒ウヰツカの匂や、煙草や、羊皮の匂がした。壁の外側からは、店口で絶え間なしに演奏してゐる手風琴の音が聞えて來た。マリヤ・ワシリエフナは腰を下して、お茶をいく杯も飲んだ。その間、隣りの卓では、百姓たちが火酒ウヰツカと麥酒ビールを飲んでゐた。彼等は飲みたてのお茶と居酒屋の蒸せつばい雰囲気とに汗をかいてゐた。

「なあ、おい、クジマ！」

「何がどうしたつて？」

「神よ助け給へだ！」

そんな高聲が、のべつに混り合つた。

「イワン・デメンツキッチ、俺の言ふ通りだ。氣をつけろよ、爺さん。」

もう酔ひ泥れてゐる、黒い鬚をもつた、少し痘痕のある男が、突然何事かに驚いて、口汚い

調子で言つた。

「お前、何をそんなに毒づいてるんだ？　おい、」と少し離れて坐つてゐたセミヨンは、忌々しげに言つた。「若い御婦人がゐらつしやるぢやねえか。」

「若い御婦人！」と誰かど向ふの隅で口眞似した。

「豚のやうな鶏かよ！」

「俺ア何にも言やしねえ……」と小さい男はしどろもどろに言つた。「まあ、勘辨さつしやい。俺たちや俺たちの金でやつてるんだし、若い御婦人は御婦人のお金で飲んでらつしやるんだ。お早うございます。」

「お早うございます、」と女教師は答へた。

「わしらは眞からあなたに感謝してをりますだ。」

マリヤ・ワシリエフナは満足した氣持ちでお茶を飲んだ。彼女も百姓たちと同じやうに顔色を火照らした。そして又もや、薪木のことや守衛のことを想ひはじめた……

「止せよ、爺さん、」といふ聲が隣りの卓から聞えた。「ありやあ、ヴィヤゾーフニから來た女教師さんだ……俺たちや知つてるが、若い立派な御婦人だ。」

「もうともー！」

誰か出ていったり、入って来たり、搖扉が始終ぎいぎい音を立てた。マリヤ・ワシーリエフナは腰を落着けたまゝ、同じことを繰返し考へてゐた。その間、手風琴も演奏をつゞけてゐた。板敷にさしてゐた日光の縞は、やがて勘定臺へ移り、壁へ移つて、たうとう消えていつた。その日差しで見ると、時間は午過ぎであつた。隣りの卓にゐた百姓たちは歸り支度をした。小さい男は、ちよつとおづおづしながら、マリヤ・ワシーリエフナに近づいて、彼女に手を差し出した。彼に習つて、他のものもお別れの握手をして、一人づつ出ていつた。搖扉は七八遍も軋んだり鳴つたりした。

「ワシーリエフナ、さあ、まゐりませう、」とセミヨンは彼女を促がした。「みんな行きましたぞ。」
彼等は居酒屋を出て、再び徒歩をつゞけた。

「ニージニエ・ゴロディスチエチヤ、今から少し前に、學校を建てゝゐましたつげが、」とセミヨンは振り向きながら言つた。「出来上つたのを見ると、から鱈仕のねえもので、呆れやした！」「どうしてなの？」

「校長は衣兜ボケットに千ルーブリ突込むし、學校管理者もやつぱり千ルーブリ、教師達は五百ルーブリ

くすねたつて噂でさ。」

「學校つてものは千ルーブリぐらゐしか掛らないものよ。人の悪口をひろめるのは罪深いことですよ、お老爺さん、みんな謔言ですわ。」

「私やよく知りませんがね、たゞ、そんな話なんで！」

が、セミヨンは女教師の言葉を納得なつさくしないらしかつた。百姓たちは彼女を信頼してはゐなかつた。彼女の俸給一ヶ月二十一ルーブリさへ多過ぎると思つてゐたほどであつた。彼女が薪木代や守衛の給料に子供たちから集める金の中、大部分は、彼女自身に取つてしまふにちがひないと思つてゐた。學校管理者も百姓たちと同じ考へであつた——そして彼自身は薪木代の中から儲けをとつてゐたが——職務の智識もなしに、學校管理者として、百姓たちから報酬を取つてゐた。

やうやく森を出はなれた。そこからはヴィヤゾーフエまで平坦な廣々とした野原がつゞいて、もはや遠くはなかつた。あとは河を渡り、鐵道線路を横切ればいゝのであつた。やがて間もなく、ヴィヤゾーフエの村が見えて來た。

「そんな方へ行つていゝの？」とマリヤ・ワシーリエフナはセミヨンに訊いた。「右まはりするのよ。」

「こつちを行つても大丈夫ですが。心配するほど深くはありませんや。」

「馬が踏み込まないやうに用心して頂戴！」

「何ですが？」

「だつて、御覽よ、ハーノフは橋の方へゆくぢやないの、」とマリヤ・ワシーリエフナは右の方遙かに四頭の馬を眺めながら言つた。「あの人でせう。」

「さうですが。パリピストに留守を喰つたつて、あの豚頭いゝ氣味ですよ。何だつてあつちへゆくのか？こつちを行く方が、たつぷり三露里は近いでさ。」

馬車は河縁に達した。夏なら徒歩で容易に渡れる小さい流であつた。八月にはすつかり干上つてゐたが、今、春の雪解の後で、幅四十ナイートの早瀬をなした、泥濁りの寒い河になつてゐた。土堤の上と水際の右側とに、そこを横切つていつた轍の新しい跡がついてゐた。

「とつとへ行け！」とセミヨンは急ぎ込んだ調子で言つた。手綱を荒々しく引いて、鳥が羽をひろげた時のやうに兩腕を張りながら、「とつとへ行け！」

「行け！」と彼女も勢ひながら言つた。「ぐんぐん行け！」

馬車は土堤の上ののぼつた。

「やれやれ大骨折らせやがる！」とセミヨンは馬具を直しながら呟いた。「この自治局の村と來たら、全く疫病のやうに厄介なところだ。」

彼女の靴や套靴には水がはいつてゐて、服の裳や一方の袖はぐつし濡れになつて筆をたらしてゐた。砂糖や麥粉をぬらしたのが、彼女には何よりも辛かつた。マリヤ・ワシーリエフナは兩手を握り合はして、情なささうに言つた。

「セミヨン、セミヨン！ あんたが頭旋曲りなことをするもんだから！」

鐵道の踏切には柵が下りてゐた。停車場から汽車が進んで來た。マリヤ・ワシーリエフナは踏切に下り立つて、汽車の通り過ぎるのを待ちながら、全身寒さに顫へてゐた。ヴィヤゾーウオはもう向うに見えてゐた、碧色の屋根をもつた學校も、屋根の十字架に夕日の輝いてゐる教會堂も見えてゐた。汽車の窓もきらきらと反射して、汽罐の吐き出す煙も赤かつた。そうしてそれら凡てのものも、寒氣にふるへてゐるやうに思はれた。

汽車。會堂の上の十字架と同じやうに輝いてゐる窓、窓。それを見ると、目が眩みさうであつた。二輛の一等客車の間の小さい展望臺に、一人の婦人が立つてゐた。通り過ぎる時、マリヤ・ワシーリエフナは、その婦人をちらりと見た。彼女の母親に何とよく似た人だらう！ 母親では

ないか知ら！ 彼女の母親は、この婦人にそっくりな豊かな頭髪をもつてゐた。その眉毛や頭を曲げた容子もそっくりであつた。今では、もう十三年の昔になつてゐるのに、驚くほど鮮かに、母親や父親や兄弟たちの生き生きとした影像が、そしてモスクワの住居や小さな魚を入れた養魚器や、いろいろ雑多なものまでが、まさまさと浮んで來た。今、彼女は、自分が若くて、綺麗で、立派な服装をしてゐて、彼らといつしまに、明るい温い部屋にゐるやうな氣がした。と、不意に、歡喜と幸福の感情が湧きあがつて來た。彼女はうつとりと横顔へ手をやつて、優しく訴へるやうに呼びかけた。

「お母さん！」

彼女は咽び泣きに泣き出した。たゞ譯もなしに泣けるのであつた。ちやうど、その時、ハーノフは四頭曳の馬車をそこへ乗りつけた。彼を見ると、彼女はこれまで曾て知らなかつた歡喜の情に包まれながら、話對手として、友達として、笑み傾けて挨拶した。この幸福、この歡喜は、大空や、あたり一めん、窓々に、樹々の上にも擴つてゆくやうに思はれた。彼女の父親や母親がまだ生きてゐるといふ想ひや、自分が女教師ではないといふ想ひなどは、長い、退屈な奇妙な夢であつたことに、彼女は氣がついた。

「ワシーリエフナ、お乗りなさい！」

たちまち凡ての幻影は消え去つた。楯はしづかに揚つた。マリヤ・ワシーリエフナは寒氣に痺痺して、ぶるぶる顫へながら馬車にはいつた。四頭曳の馬車は鐵道線路を横切つた。セミヨンはその後につゞいた。信號手が帽子をぬいで挨拶した。

「ヴィヤゾーウオです、着きましたよ。」

新しい別荘

オブルチャーノウオ村から三十露里のところに、巨大な橋の架設工事がはじまつてゐた。急傾斜の河土堤の上にだんだんと高まつてゐる村から、その格子型の骨組を見ることが出来た。霧のかゝつた天気や静かな冬の日に、その精緻な鐵の桁やその他の構材が、眞白な霜に蔽はれてゐる時には、畫のやうな、といふよりは、むしろ幻影的な光景をさへ現はしてゐた。技師のクチエーロフは、體のがつしりと肥つた、肩幅の廣い、頭髻をのばした男で、揉みくたになつた縁無帽をかぶり、速力の疾い四輪馬車か幌馬車にのつて、村道をかよつてゐた。時折の祭日には、橋の工事をやつてゐる工夫たちが村へやつて来て、施物を乞ふたり、女にからかつたり、時とすると、何か搔扱つたりした。が、大たいから言つて、橋工事などやつてはゐないかのやうに、靜かに穩かに日は経つていつた。たゞ夜になると、橋の近くに夜營の灯が輝いて、工夫たちの唄ふ聲が遠

く風に送られて來た。

ある時、不意に、技師の妻君が彼に會ひに來た。彼女は河土堤や、樹立の多い緑の谷の上の晴々とした展望や、會堂や、鳥の群などを嬉しがつてゐた。彼女は、そこに少し地面を買つて、田園風の家を建て、くれるやうにと技師にせがんでゐた。良人は承諾した。彼等は以前オブルチャーノウオ村の牝牛を放してあつた土地を二十デシヤチン買入れて、野原の中の高臺に瀟洒とした露臺と展望廊とをもつた二階建の家をたてた。その展望廊の上には、一つの塔と旗架があつて、日曜日には旗がひるがへるといふ趣向であつた——建築は三ヶ月ばかりの間に出來あがつて、やがて冬の間に、大きな樹々が植ゑられた。春になると、あたりは芽立ちの緑にかざられ、家の方へは、はやくも並木路が通じてゐた。上着をつけた一人の園丁と二人の人夫とは、その近くを掘つてゐた。そこには小さい噴水がつくられ、きらきらした反射鏡が据ゑられて、眼の痛くなるやうな眩しい光を放つた。この家は、たちまちの中に、新しい別荘と呼ばれるやうになつた。五月末の晴れわたつた暖い日に、二頭の馬がオブルチャーノウオの村鍛冶屋ロヂオン・ベトロフのところへ連れて來られた。新しい別荘から來た馬であつた。二頭とも艶々として、雪のやうに眞白な、驚くほどよく似た、美しい白馬であつた。

「素晴らしい白だな！」とロチオンはつくづく眺めながら、感に耐へたやうに言った。

彼の女房や、子供たちや孫たちは、馬を見物しようとして通りへ出て来た。だんだん人だかりがした。頬の窪んだ、少しも髯のない顔をもつたルチヨフ父子は、帽子も被らずにやつて来た。ちよつぱりとした髯を長く伸ばした、丈高の、瘦せたユーゾフ老爺さんは、握柄（ぎつて）の曲つた杖をついてやつて来た。彼は狭るさうな眼をしば叩きながら、何か面白いことでも知つてゐるかのやうに、皮肉らしい微笑みを浮べてゐた。

「たゞ眞白なだけだ。こんな馬どこがいゝんだ、」と彼は言った。「俺を麥粉を積んだ上に乗せて見る、この位にや艶々すらア。奴ら勢（いき）を見かせて、一鞭くれるにや丁度いゝ馬だ。」

馭者は彼を蔑むやうに、ちろりと見たゞけで一言もいはなかつた。やがて、彼等は驕（よこ）の火を起してゐた。その間馭者は煙草をくゆらしながら話してゐた。百姓たちは馭者からいろいろなことを聞いた。主人は金持ちであること、妻君のエレーナ・イソノウナは結婚するまで女事務官を勤めて、モスクワで貧しい暮らしをしてゐたこと、彼女は氣遣の優さしい、慈悲深い女で、貧しい者に施與（ほご）をするのが好きだといふこと。そして領地は、耕作するとか、播種するとかいふのではなく、たゞ趣味のため、新鮮な空気を呼吸するために住むのだと馭者は話した。話を終つて、馬

を連れ戻してゆくと、子供たちの群は後からぞろぞろついていつた。犬きもが吼えた。ユーゾフはその後を見送つて、嘲笑ふやうに眼をしば叩いた。

「ほう、また例の地主様かい！」と彼は言った。「奴らア家を建つたり、馬を飼つたりするが、何の役にも立ちやしねえ、やつぱり、たゞ地主様だ！」

ユーゾフは何故か最初から、その新しい別荘に、白い馬に、身綺麗な血色のいゝ馭者に悪意を抱いた。彼は寂びしい生活を送つてゐた。脱腸とか、蛆蟲とか呼ばれてゐる病氣のために働くことが出来ないものであつた。彼は息子の爲送（しやくり）で暮らしてゐた。息子はハリコフの製菓會社に勤めて、彼に金を送つてゐたのであつた。爺さんは朝早くから夕方まで、暇にあかして河のあたりを歩いたり、村をまはつたりしてゐた。例へば彼は、馬車に丸太をつんでゐる百姓に出會つたり、釣をやつてゐる者を見たりすると、「その丸太の乾いたのは腐つてる」とか、「こんな天氣にや餌ア食はねえ、」とか、こんな風に言ふのであつた。早魃の日がつゞくと、霜が来るまで雨は降らないと斷言したり、いく日も雨がつゞくと、畑のものがみんな腐ると言ひ張るのであつた。そしてこんな言ひ草をする時、彼は何か面白いことでも知つてゐるかのやうに、眼をしば叩くのであつた。

新しい別荘では、日が暮れると、時たま、ベンガル花火を燃したり、打上花火をあげたりした。

そして又赤い提燈ランタンをつけた小さい帆船をオブルチャーノウオの側に浮べた。或る朝、技師の妻君のエレーナ・イワノウナと小さい娘とは、二頭の栗毛の小馬に曳かせた、車輪の黄色い軽馬車を村へ走らせた。母親も娘も、鍔つばの廣い麥藁帽子を、耳の上まで深々とかぶつてゐた。

ちやうど、百姓たちが肥料を荷馬車に積んでゐる最中であつた。丈の高い、瘦せた、鍛冶屋の老爺ロチオンは、帽子もかぶらず、裸足で、汚れきつた見すばらしい荷馬車の傍に立つてゐるが、二頭の馬を見ると、膽を奪はれた容子であつた。こんな小馬は、今まで見たことがないのであつた。

「クチエーロフの奥さんが来た！」とあたりに嘯き聲がした。「見ろよ、クチエーロフの奥さんだ。」

エレーナ・イワノウナは其處こゝの百姓家を眺めて、どれか一軒を選んでゐるやうであつた。やがて、一ばん荒れはてた百姓家の前で馬車をとめた。その窓から、いくたりもの子供の頭――亞麻色のや、赤毛のや、黒いのや――が見えた。體のがつちりとした、ロチオンの女房のステパニードは、急いで小舎から出て来た。被つてゐた頭巾が、灰色の頭髮から滑り落ちた。彼女は日光を反射してゐる馬車を見ると、笑顔になつて、眩しさうに眼をほそめた。

「子供たちに、これをあげて頂戴、」とエレーナ・イワノウナは言つて、女房に三ルーブリ與へた。ステパニードは早くも涙をぼろぼろ落して、低く點頭おんづをした。ロチオンも赤黒い禿頭を見せながら、低く頭を垂れさげた。彼は頭を垂れさげた時、危く女房の胸にフォークをつき付けさうにした。エレーナ・イワノウナは狼狽しながら引きかへした。

二

ルチヨフ父子は、二頭の荷馬車馬と一頭の小馬と、顔の幅のひろいアールハウス産の若い牡牛とが、彼等の牧場を歩いてゐるのに出會つた。鍛冶屋のロチオンの息子の赤髪あかみげのヴォロードカの手を借りて、彼等を村へ連れていつた。ルチヨフは村長を呼んで来て、次に證人を集めて、荒らされた場所を見にいつた。

「ようし、放つておくものか、放つて！」とユーゾフは、眼をしば叩きながら言つた。「逃れやうたつて逃がすものか、あの技師奴が！法律といふものが無いとでも思つてやがるのか？よし、監察官に訴へよう、上申書を出すだ……」

「上申書を出すだ、」とヴォロードカは繰返した。

「俺やこのまゝには濟ませねえ！」と若いルチコフは叫んだ。彼の怒鳴り聲はだんだん高くなり、髯のない顔は一さう窪んだやうに見えた。「奴らは、いゝ氣になつてやがるんだ。放つて置きや、牧場は隅から隅まで荒らされつちまはア。俺たち民衆を侮辱する権利はねえだ。俺たちやもう奴隷ぢやねえ！」

「俺たちや、もう奴隷ぢやねえ！」とヴォロドカは繰返した。

「橋なんぞ架けなくつたつて、俺たちや困りやしねえ、」と年とつたルチコフは重苦しい調子で言つた。「俺たちが頼んだわけぢやねえ。何のために橋が要るだ。俺たちにや用はねえ。」

「兄弟たち、教徒たち！ 俺たちや、このまゝぢや濟まされねえ！」

「さうとも、放つておいて成るものか！」とコソゾフは眼をばちばちやりながら言つた。

「逃れようたつて、逃がしやしねえ。まつたく地主の奴と來たら！」

彼等は村へ歸つていつた。若いルチコフは、歩きながら拳で自分の胸を打つては、しよつ中怒鳴つてゐた。ヴォロドカは他人の言葉を繰返しながら、やつぱり怒鳴つてゐた。暫くすると、村中から集まつた群衆は、肥つた若い牡牛と馬のまはりを取りまいてしまつた。若い牡牛は狼狽して、額から見上げてゐたが、不意に、鼻面を地面につけるほど下げたかと思ふと、膝を低くし

て、後足を跳ねあげた。コソゾフは膽をつぶして、杖を振りまはした。みんなは笑ひ出した。そしてこの獸たちを小舎へ閉めこんで待つてゐた。

日の暮れ頃、技師は損害賠償として五ルーブリ届けてよこした。馬と小馬と若い牡牛とは、飼料も食はず、水も當てがはれずに、捕縛された囚徒のやうに頭を垂れ下げて、おづおづと歸つていつた。

五ルーブリ貰つたルチコフ父子と、村長とヴォロドカとは、小舟で河を渡り、向側の部落へいつて、その居酒屋で何時までも酒宴をあげてゐた。若いルチコフの歌聲と怒鳴り聲は、こつちの村まで聞えた。彼等の女房たちは心配して、夜通し眠らなかつた。ロチオンも眠らなかつた。

「良くないこつた、」と彼は寝返りをうつては、溜息つきながら言つた。「あの旦那は怒るにちげえねえ。すると、面倒なことになるぞ。奴らは、あの旦那を侮辱した。おゝ奴らは、紳士を侮辱したんだ……良くねえこつた……」

或る日、百姓たちは、ロチオンも共々、手分けして、刈草を始末するために森へ行つてゐた。そして歸り途中で、彼等は技師に行き會つた。彼は赤い羊毛の襦袢を着て、長靴をはいてゐた。セフター種の犬が長い舌を垂らしながら、彼の後についてゐた。

「今日は、兄弟たち、」と彼は言った。

百姓たちは足を停めて、帽子をぬいだ。

「私は夙から君たちに話したいと思つてゐた、」と彼は續けた。「といふのは斯ういふわけだ。春になつてから此方、君たちの家畜が毎日私の植込みや園へはいつて来る。何もかも荒しまはる。豚は牧草をほじくるし、他の奴らは野菜畑を駆けまはるし、植込みの下草は踏み折つてしまふ。君たちの牧夫とは、うまく折合がつかない。丁寧に頼んでも、荒つて困る。領地は荒され放題だが、私にはどうしようもない——私は君たちに會つて、聞いて貰ふ機会がなかつた。ところが、君達の方は、私の馬や若い牡牛を閉ぢこめて、五ルーブリ倍償をとつた。さういふ遣り方は正しいかどうか？ 隣人の爲すべきことだらうか？」と彼はつゞけた。その顔付は穩かに懇願してゐるやうに見えた。その言葉には叱責するやうな調子はなかつた。

「さういふのは正しい人たちの態度だらうか？ 一週間ばかり前に、誰か村人の一人は、私の植込みから櫛の若木を二本切つていつた。君たちは、エレスノーヴォへゆく通路を鋤きかへしてしまつた。お陰で私は三露里ばかり遠まはりしなければならぬ。どうして君たちは、事毎に私を阻害するのですか？ 私は君たちに何んな害をしたといふのですか？ さあ、言つて下さい。私

ら夫妻は、君たちと打ち融け合つてゆきたい、懇親にしてゆきたいと望んでゐる。力の及ぶ限り百姓たちに助力してゐる。私の妻は親切な、同情深い女だから、君たちへの助力を断つたことはない。君たちや子供たちの役に立ちたい——といふのが彼女の願ひなのだ。けれども、君たちは、われわれの善に報ゆるに懇を以てした。さういふ遣り方は、正しいとは言へないでせう、君たち！考へ給へ、よく考へてくれ給へ！私たちは君たちに對して人道を守つてゐるのだから、君たちも、同じ金貨をもつて報ひてくれなければいけない。」

彼はそこから傍路へと曲つていつた。百姓たちは少時立停まつてゐたが、帽子をかぶつて歩き出した。ロチオンは、彼の聞いた凡ゆる事柄を、いつも彼特異の流儀で解釋するので、深く溜息つきながら言つた。

「俺たちは拂はなければいけない、『同じ金貨』でよ、友達……」

彼等は押し黙つて、村へと歩いた。ロチオンは家につくと、お祈りをあげてから靴をぬいで、女房と並んで腰掛に坐つた。

ステパニード夫婦が家にゐる時には、並んで腰かけるのが常であつた。いつも一緒に食べ、いつも一緒に飲み、一緒に眠るのであつた。彼らは年をとればとる程一さう愛し合つた。彼の小舎

の中は狭くて暑苦しかった。どつちを向いても子供たちが——板敷にも、窓際にも、煖爐の上に——ゐた。ステパニーダは年を加へてゆくにも拘らず、子供を生んだ。今、その子供たちを見ると、どれがロチオンの子供たちで、どれがヴオロドカの子供たちか見わけがつかないほどであつた。出眼で、鳥の嘴のやうな鼻をもつた、若い、邪氣のないルーケリヤは、木鉢の中に掬粉をこねてゐた。ヴオロドカは煖爐に腰かけて、長い脚をぶらぶらさせてゐた。

「ニキータの麥畑の傍の道で……犬を連れたあの技師が言ふには……」とロチオンはちよつと息を切つて、肋をかいったり眩をかいったりしながら始めた。「君たちは同じ『金貨』で拂はなければいけません。『金貨』で、と言ふんだ。金貨だらうと、金貨でなからうと、俺たちは一軒十カベツクづゝ集めなけりやならねえ。俺たちは、あの紳士を怒らしちまつたんだ。困つたことをしたもんだ。」

「俺たちや、今まで橋なんぞ無しで暮らして来た、」とヴオロドカは誰にもなく言つた。

「橋なんぞに用はねえ。」

「そんな事ア話にならねえ。橋はお上の仕事だ。」

「俺達にや用はねえ。」

「そんな意見を訊かれたんぢやねえ。橋のことなんぞ、どうだつていゝ。」

「さうとも、そんな意見を訊かれたんぢやねえ、」とヴオロドカは口眞似した。「俺たちは何處へ車遊するわけぢやなし、橋に何の用があるだ。河を渡るにや小舟で澤山だ。」

中庭の外側から、小舎が揺れるほど烈しく窓を叩いたものがあつた。

「ヴオロドカ、居るか？」と若いルチョフの聲が聞えた。「ヴオロドカ、出て来いよ、一緒に行かう！」

ヴオロドカは煖爐から跳び下りて、帽子を採しはじめた。

「行つちやならねえ、ヴオロドカ、」とロチオンは氣遣はしげに言つた。「あいつらと一緒に行つちやならねえ。お前、まるで小ちえ餓鬼のやうに馬鹿だな。奴らア善くねえことをお前に仕込むだ。行つちやならねえ。」

「行かないでお呉れよ、」とステパニーダは今にも涙を落しさうに眼をしば叩いた。「お前を居酒屋へ連れ込むにきまつてるんだから。」

「居酒屋へ……」とヴオロドカは口眞似した。

「あんたは又、酔つばらつて歸つて来るんでせう、やくざ狗のヘロド、」とルーケリヤは眼に怒りの色を見せながら言つた。「行くがいゝや、行つて火酒で焼かれるがいゝやね。尾のない悪魔！」

「憎まれ口叩くな、」とヴオロドカは怒鳴った。

「こんな謔け者の女房にされて、不仕合せの孤兒の私の一生は臺無しだわ。赤毛の酔っぱらい……」とルーケリヤは捏粉だらけの手で顔を撫でながら、咽び泣いた。「あんななんぞ振向いても見なけりやよかつた。」

ヴオロドカは彼女に一撃を與へて、さつさと出ていった。

三

エレーナ・イワノウナと小さい娘とは、徒歩で村を訪れた。二人は遠足に出たのであつた。日曜日であつた。百姓の女房たちや子供たちは、色とりどりの晴衣を着て、村の通りを往來してゐた。扉口に並んで腰かけてゐたロチオンとステパニーダとは、エレーナ・イワノウナと小さい娘を見ると、馴れ馴れしく笑顔を見せながら、お點頭をした。窓からは一ダース以上の子供たちが彼等を眺めてゐた。その顔付は驚嘆と好奇心とを現はしてゐた。「二人には、その囁き聲が聞えた。」

「クチエーロフの奥さんが來たつてばよう！　クチエーロフの奥さんが！」

「お早よう、」とエレーナ・イワノウナは言つて、足を留めた。彼女はちよつと息を休めてから訊

ねた。「どう？　都合よく行つてゐますか？」

「神様のお蔭で、私どもは相變らず、」とロチオンは口早に答へた。「どうやらやつてをります。」

「この通りの暮らしてございますよ！」とステパニーダは微笑んだ。「こんな貧乏暮らしを、よく御覽になつたでございませう、奥さま！　家族のものは十五人もをりますのに、稼ぐ者と言つたら、二人つ限りでございませう。私どもは鍛冶屋と言はれてをりますが、蹄鐵打ちに馬を連れて來られますと、石炭がないつて始末でございませう。石炭を買ひたいにも、お金がないのでございませう。死ぬやうな憂目でございますよ、」と彼女は笑ひながらつゞけた。

「まったく、死ぬほどの憂目でございます。」

エレーナ・イワノウナは入口に腰を下して、彼女の小さい娘を抱き寄せながら、何事かを想ひふけつてゐた。そして小さい娘の顔付から、娘の心中にも、何か物悲しい思ひのさ迷つてゐることがわかつた。抱き寄せられながら彼女は母親の手から受けとつた日傘の華美な飾布をいちぢつてゐた。

「貧乏だの、」とロチオンは言つた「數へきれぬ程の心配だの——まったく切りがござえませぬ。御覽の通り早魃はつゞいてをりますし……私たちの暮らしは、樂になるつてことがござえませ

ん。と言つて、どう始末しようもねえのでござえます。」

「あんた達の生活は、さぞ苦しいでせう。」とエレーナ・イワノウナは言つた。「でも、一方から言へば幸福ですわ。」

ロチオンには彼女の言ふことが了解出来なかつた。そして答への代りに拳で咳を抑へただけであつた。ステパニークは言つた。

「奥さま、お金持ちの方は、あの世でも仕合はせてございますよ。お燈明はあげられますし、お祈禱の席に出られますし、物乞ひには施與をなさいますしね。ところが、貧乏人は、まあ、どうでございませう？ 十字を切る暇もありやしません。自分が乞食の中の乞食ですもの、魂のこともなんぞ考へてはゐられません。ですから、貧乏のために色々の罪を犯すのでございます。苦しい餘り、犬のやうに噛み合ふのでございます。口汚く諍ひをするのでございます。罰當りのことばかり起つてまゐりますよ、奥さま！ この世で不仕合はせなばかりか、あの世へ行つても、きつと不仕合はせてございませう。仕合はせといふものは、お金持ちの方だけに授けられたものでございます。」

彼女は快活に饒舌つた。苦しい生活には、馴れきつてゐるらしかつた。そしてロチオンも微笑

んでゐた。彼は婆さんが、いかにも伶俐に、いかにも上手に述べたてゐるのを嬉しがつてゐた。

「お金持ちは幸福に見えても、それはたゞ表面だけですよ。」とエレーナ・イワノウナは言つた。

「人間には誰にも悲みがあるものですわ。例へば私や私の良人は、貧しい暮らしをしてはゐません。財産をもつてゐます。けれど、それで幸福でせうか？ 私はまだ若いけれど、四人の子供があつて、始終病氣をしてゐますわ。そして私にも病氣があつて、始終お醫者にかゝつてゐますわ。」

「どんな御病氣で？」とロチオンは訊ねた。

「女によくある病氣なんですの。夜眠れないし、しょつ中頭痛がして、氣持ちの休まる時がないんです。かうして坐つて饒舌してゐても、頭痛がして堪らないんですよ。私は體中弱いんですの。こんな病氣さへ無いのなら、どんな辛い労働をしてもいゝと思ふくらゐですわ。それに魂の問題でも、やつぱり苦んでゐますわ。子供たちのことや良人のことが、いつも、どんなに苦勞の種だか知れせんわ。どんな家族だつて、それぞれ何か苦みをもつてゐるものですわ。ですから、私たちに私たちの苦みがあるんです。私は貴族の生れではありませんのよ。私の祖父さんは百姓でしたし、私のお父さんはモスクワの商人で、やつぱり身分の低い、教育のない男でした。けれど、私の良人の兩親は財産家で、立派な身分の人でした。兩親は、私を嫁にするのが氣に入らな

かつたんですけれど、クチエーコフは両親の言葉を聞きいれずに、両親に抗つて結婚したんです。ですから、両親は今でも、私たちを許してゐないんですよ。その問題は私の良人を苦めてゐます。良人はそのために惱んで、始終いらいらしてゐます。あの人は心から母親を愛してゐますから……それを思ふと、私も苦しくなつて、気が滅入つてしまひますわ。」

百姓たちは男も女も、いつの間にか、ロデオンの小舎のまはりに集まつてゐて、話に聴き入つてゐた。コーゾフもやつて来て、狭い長い傾斜をしごきながら立つてゐた。ルチコフ父子はすぐ傍に寄り寄つてゐた。

「何と言つても人間は、自分の身に適つた境遇にゐないと思ふ時には、幸福ではありませんわ。満足してはゐられませんか」とエレーナ・イワクウナはつゞけた。「あなた方は、みんな地面をもつてゐて、働いてゐて、何のために働いてゐるかも知つてゐらつしやるわ。私の良人は橋をかけたゐます——一語で言へば、誰もみんなそれぞれ身に適つた場所を持つてゐるのです。それなのに、私はたゞ歩きまはつてゐるだけですわ。私には何にも仕事がないんですよ。私は働かずにゐるものだから、置いてきぼりにでも遇つたやうな気がしてなりませんのよ。あなた方は、たゞ表面の姿から判断してゐらつしやるけれど、本當の話は斯ういふものですよ。華美な身装や財産

は、生活に満足してゐる證據にはなりませんわ。」

彼女は出かけるために、子供の手をとつた。

「私は、とてもこの村が好きですわ」と彼女は言つて微笑みを浮べた。その弱々しい、謹み深い笑顔から、彼女がいかにも若くて、綺麗で、どんなに病身であるかどわかつた。彼女の顔は蒼白く瘦せてゐて、黒い眉毛と美しい金髪とをもつてゐた。そして小さい娘も、母親と同じやうに、瘦せて、綺麗で、すらりとしてゐた。二人の居まはりには香料のかをりがした。

「私は河や、森や、この村が好きですわ」とエレーナ・イワクウナはつゞけた。「私は一生こゝに住んでゐたいと思ひますわ。こゝに住んでゐたら、私は丈夫になれるでせうし、私の仕事も見つかるやうな気がしますわ。私はあなた方に助力したいと思つてゐるんです……あなた方の役に立ちたい、心から親みたい——と一心に願つてゐるんです。私には、あなた方の要求がわかりません。私の知らない色々な事は、胸の中で推量してゐますわ。私は病身で、弱いですから、私の願つてゐるやうに生活を換へることは、とても出来さうありません。けれど、私には子供たちがあります。子供たちは、あなた方のお役に立つやうに、あなた方を愛することが出来るやうに教へてゆきたいと思つてゐますわ。ですから、私があなた方に心からお願ひするのは、心底からお願

ひするのには、私たちを信頼して下さいといふ事ですわ。私たちと打融け合つて下さいといふ事ですわ。私の良人は親切な善い人です。どうぞ、あの人の気持ちを害さないで下さい。あの人は小さな事にも神経質なんですから、あの人を怒らせないで下さい。例へば、昨日も、あんた方の家畜が私たちの野菜畑へはいつてみました。あんた方の誰かは、垣根を破つて、蜜蜂の巣箱にいたづらをしました。さういふ仕打ちは、あの人の感情を害してしまふんですわ。ですから何卒、と彼女は哀願するやうな聲音でつゞけながら、胸の上に手を組み合はせた。「お願ひです、私たちは善き隣人として打融けて下さい。私たちを平和にさしておいて下さい。『悪しき平和さへ、善き争に勝されり』といふ諺がありますわ。『富を求むる勿れ、隣人愛を求めよ』ですわ。もう一度言ひますけれど、私の良人は、親切な善い人です。萬事折合よく行けば、私たちは、あんた方のために出来るだけのことは何でもしますわ。道講請をしたり、村の子供たちのために學校を建てたりもしますわ。」

「恐れ入ります。申上げるまでもなく、私どもは、あなたに感謝してをります、」とルチョコフは眼を伏せながら言つた。「あなたは教育のある方ですから、おわかりでせうが、まあ、ヴオローノフのことをお聞き下さい。あの男はエレスノーウオの金持ちの百姓で、やつぱり、學校を建てると

約束いたしました。そして、『俺はお前たちに、かういふ事もしてやる。』『あゝ言ふこともしてやる』と言つたものです。ところが、奴は骨組を造つただけで、それから先の工事は少しも進めませんでした。そこで百姓たちみんなして屋根を葺いて、やつと工事を仕上げました。その費用は千留ルイブリかゝりました。ヴオローノフはそれを氣にもかけず、たゞ髯を撫でまはしてをります。百姓たちは酷ひえ目にあつたわけでござえます。」

「あいつは黒鴉だが、今度は白嘴鴉かな、」とコーゾフは言つて、眼をばちばちさせた。

どつと笑聲が起つた。

「この村にや學校は要らねえ、」とヴオローノフは不愛想に言つた。「村の子供たちはベトロフスコエへ通つてるから、それで間に合つてら。この村にや學校はいらねえ。」

エレーナ・イワノウナは突然脅かされたやうに見えた。顔色が一さう蒼ざめて、一さう瘦せたやうに見えた。彼女は何か汚らしいものに觸れたかのやうに顫へあがつて、もう一言も口を利かずに、歩き出した。彼女は振り向きもせず、足早に歩いた。

「奥さま、」とロデオンは彼女の後を追ひかけながら言つた。「奥さま、ちよつと待つて下せえまし。どうか私の言ふことをお聞きなすつて下せえまし。」

村を出はづれてから、エレーナ・イワノウナは古木の秦皮樹の蔭に停めてあつた馬車の傍で立ちどまつた。

「氣持を悪くして下せえまな、奥さま」とロデオンは言つた。「何て譯はねえんですが。どうぞ我慢なすつて下せえ。二年ばかり辛棒なすつて下せえまし。この村でお暮らしになるからは、辛棒なすつて下せえまし。さうすれば、何もかもうまく行くやうになります。村の者は穏やかな善い人間ですが。何も悪氣はねえですが。神様の前に、眞實のことを申し上げてゐるのでござえます。ユソフヤルチコフや、それからヴオロドカのこと、お氣にかけねえで下せえまし。ヴオロドカの奴は謙け者で、何でも初めに聞いたことを眞に受けるんでござえます。他の者はみんな暢氣者で、何とも申しやいたしません。中には、心かち一言申し上げて、申譯し度えと思つてる者もありますが、うまく口が利けねえのでござえます。奴らにや魂も良心もあるのですが、舌が言ふことをきかねえのでござえます。どうか、お氣を悪くしねえで下せえまし……辛棒なすつて下せえまし……何の譯がありますものか……」

エレーナ・イワノウナは廣々とした靜かな河を眺めながら思ひに沈んだ。涙が頬を流れ落ちた。ロデオンはその涙に感動して、叫び出さなればかりであつた。

「お氣にかけねえで下せえまし……」と彼は口籠つた。「二年ばかり辛棒なせえまし。學校を建てたり、道譜請したりなさることは出来ませんが、今すぐおやりにならねえが宜うござえます……まあ、言つて見りや、麥を播きつけるのに、先づ石を拾ひすてゝから、鋤きかへしたり、耕したり、それから働いて働きぬくやうなものが……奴らに向つちや、それと同じ譯で、あなたが奴らに勝つまで、辛棒なさらなければいけません。」

群衆はロデオンの小舎から、道路のこちらへ、秦皮樹の方へと向つて來た。彼等は歌を唄ひ出し、手風琴を弾きはじめた。そしてだんだん近づいて來た……

「お母さん、他所へ行きませうよう」と小さい娘は青ざめて、身を顫はせながら、母親に縋りついて言つた。「ねえ、他所へ行きませうよう、お母さん！」

「何處へ？」

「モスクワへ……モスクワへ行きませうよう。」

子供はしくしく泣きはじめた。

ロデオンはすつかり仰天してしまつた。彼の顔には大粒の汗が滲みだした。彼は衣兜からライ麦の麵麩片に包んだ、半月のやうに曲つた小さな胡瓜を取りだして、小さい娘の手に押しつけは

じめた。

「ど、どうしましたか、」と彼は真面目くさつた蹙顔をしながら吃つた。「さ、この胡瓜をあげますからお食いなせえ……泣いちゃいけません……お母さんに打たれますよ……お家へ歸つて、お父さんに言ひつけられると大變ですよ。え、どうしたんです……」

彼等はまた歩き出した。彼は尙も後に蹤いて、何事かを親密に話したり、説得したりしたい容子であつた。そして母娘が自分たちの考へと悲みとに氣をとられて、彼には眼もくれないのを見ると、彼は立ちどまつた。そして手を臉にかざして、母娘の姿が樹叢に隠れてしまふまで後を見送つてゐた。

四

技師は腹立ちつぱく、氣が小さくなつたやうに思はれた。そしていろいろな些細な事件にも掠奪行の跡を發見した。そこで彼の門口は晝は門がかけられ、夜は二人の番人が拍子木を叩いて園を見まはつた。そしてオブルチャーノウオ村から人夫を雇入れることを止めてしまつた。不吉な證據としては、誰か——百姓か人夫の一人が——荷馬車の新しい車輪をはづして、古い車輪と換

へていつた。間もなく又、二つの馬銜と二組の鐵錐が盜まれた。村にはいろいろな噂がひろまつてゐた。ルチヨフやヴオロードカの家は今に搜索されるだらう、と百姓たちは言ひふらした。すると馬銜と鐵錐とは、技師の園の垣根の下から發見された。誰かそこへ捨て、行つたのであつた。

或る日、百姓たちは大勢連れだつて森から歸つて來た。その時彼等は、再び途中で技師に行き會つた。技師は立ちどまつて、挨拶の言葉もかけずに、腹立たしうな顔付で、最初に一人を、次に他の者を見やりながら言ひ始めた。

「私は園や中庭から茸をとらないやうにと皆さんに頼んでおきましたが、村の娘たちは夜の明けきらない中からやつて來て、一つ残さず採つてしまつた……そんなぢや、君たちに願つても願はなくつても、同じぢやありませんか。懇願も、親密も、勤告もあつたものぢやない。」

彼は忿怒の眼をロヂオンに向けながら續けた。

「私ら夫妻は、人間としての、われわれと平等な人たちとしての君たちに交渉したのです。ところが、君たちの爲たことは何ですか？ だが、この上もう言ふ必要はない！ 交際を止めて、君たちを卑むだけです。他にどうしようもありませんからね！」

忿怒を抑へて、あまり多くを言ふまいと努めながら、彼は顔をそ向けて歩き出した。

ロヂオンは家へ歸ると、お祈禱をあげてから長靴をぬいで、女房の傍へ腰を下した。

「うむ……」と彼は嘆息をついて言ひはじめた。

「さつき歸つて来る途中で、俺たちはクチエーロフさんに出會した……うむ、あの人は夜の明けの前に娘たちの入りこんでるのを見つけたさうだ……『何故、私の妻や子供たちのところへ茸を持つて来ないんだ？』とあの人は言つてたが……その後で、あの人は俺の方を向いて『私たち夫婦は、君たちだけは世話してあげるつもりだ、』と言つた。私はその足元に膝まづいて挨拶したいと思つたが、勇氣が出なかつた……神よ、あの人に健康を恵ませ給へ！……」

ステパニーダは胸の上に十字を切つて、嘆息をついた。

「あの人たちは親切な、悪氣のない人たちだ、」とロヂオンはつゞけた。『私たちは、君たちだけは世話してあげるつもりだ』とあの人は、みなの前で私に約束した。この年寄りになつて、そりや有難えこつた……これからは、あの人のために、いつもお祈禱をあげよう……聖母さまあの人たちに祝福を……」

九月十五日、十字架禮拜の日は、村の會堂の祭日であつた。ルチコフ父子は、朝早く河を渡つ

た。晝食に歸つて来た時には酔ひ泥れてゐた。二人は長い間村中をまはり歩いてゐる中に、たうとう喧嘩をはじめ、その揚句に新しい別荘へ泣き事を言ひはじめた。最初にルチコフの父親が、手に秦皮樹の長い棒をもつて中庭へはいつた。彼は立停つて、もちもちしながら帽子をぬいだ。ちやうどその時、技師とその家族は、露臺に坐つてお茶を飲んでゐた。

「何の用です？」と技師は叫んだ。

「旦那さま……」とルチコフは言ひ出しながら涙をこぼした。「神様のために、お助け下せえませ……悴奴が私をいぢめますだ……旦那さま……」

つゞいてルチコフの息子もはいつて来た。彼も帽子なしで、手に棒をもつてゐた。彼は立ちどまつて、酔ひどれた、どろりとした眼で露臺を見上げた。

「君たちのことは、私の關係したことぢやない、」と技師は言つた。「監督官か警察官のところへ行きなさい。」

「何處へも行つて見ました……訴へて見ました。もう何處へも行きやうがねえですが……悴奴に殺されてしまひますだ……悴奴、何を仕出かすか知れません。こんなことが親爺にする仕打ちでがせうか、親爺に？」

彼は棒を振りあげて、息子の頭を打つた。すると、息子も棒を取りあがるが早いか、その棒がはね返るほど父親の頭を打ちかへした。親爺は少しもひるまず、いく度となく息子の頭を打ちつづけた。かうして二人は立つたまま、頭を打ち合つてゐたが、その有様を見ると、喧嘩といふよりは、何か一種の競技をしてゐるやうに思はれた。百姓たちは門のところへ集まつて来て、みんな生真似目な顔付して、圍を覗きこんでゐた。彼等は技師とその家族に祭日の祝福を言ひに來たのであつたが、ルチコフを見ると、耻ぢて門をはいらなかつたのであつた。

次の朝、エレーナ・イワノワナは子供たちを連れてモスクワへ出發した。そして技師は別莊を賣物に出したといふ噂がひろまつた。

五

百姓たちは、もはや長い間、橋の光景に馴れてしまつた。その附近では、橋のない河の有様を想像することさへ出來ないほどであつた。その工事の後に残された石屑の堆積の上には、早くも草が茂り、工夫たちのことも夙に忘れてしまつた。工夫たちがよく唄つてゐた『デビニユーシユカ』の節の代りに、今では、ほとんど一時間ごとに汽車の通る響きが聞えた。

新しい別莊は、とうに賣れて、今、そこは官廳書記官の所有になつてゐた。今度の所有者は、日曜日に家族連れで町からやつて来て、露臺でお茶を飲んだりしてゐたが、すぐに又、町へ歸つてゆくのであつた。彼は縁無帽に徽章をつけてゐた。彼の位階は高等文官に過ぎなかつたが、或る重要な官位にあるやうな話振りや咳拂ひをした。百姓たちが點頭をしても、何の挨拶も返さなかつた。

オブルチャーノウオ村では、誰も彼も一さう年をとつた。ユーゾフは亡くなつた。ロデオンの家では、子供が尙も殖えた。ヴオロードカの義は前よりも長く赤くなつた。彼等は昔と同じやうに貧乏であつた。

春まだ早い頃、オブルチャーノウオの百姓たちは、驛附近の森を切り開いてゐた。仕事を終つて、彼等は家路についたが、誰も急ぐものはなかつた。肩には大きな鋸をかついでゐた。日光が透ら透ら反射した。霧は樹叢に歌ひ、雲雀は大空に聲をふるはしてゐた。新しい別莊はしんと静まりかへつてゐて、人影一つ見えなかつた。たゞ黄金色の鳩——日光を浴びて黄金色に輝いて見える——が、屋根の上に飛んでゐるだけであつた。仲間のみんな——ロデオン、ルチコフ父子、ヴオロードカの四人は、白馬の姿や、小馬や、花火や、提燈をつけた短艇を思ひ出してゐた。非

常に美しい、華美な身装をした技師の妻君が、よく村を訪れては、どんなに親密に百姓たちに話しかけたかを彼等は思ひ出した。そしてそれは実際にあつたことではないやうに、一場の夢か神仙譚かであつたやうに思はれた。

彼等は疲れてゐて、ゆつくりと歩きながら想ひに沈んだ……彼等の村の者は、氣質が穏かで、物判りがよくて、信心深かつた。そしてエレーナ・イワノウナも蕭やかで、親切で、濃厚で、誰の眼にも物優しい感じを與へたのであつた。それが何故、打ち融け合つてゆけなかつたのか？ 何故、敵同士のやうに別れなければならなかつたのか？ 何が最も重要なものを彼等の眼から隠してゐたのか？ 今では、ほんの諒けたこととしか思はれない家畜のことや、馬銜や、鐵錐のためについた暴行や、その他の些末な事件のほか、何にも氣がつかずにあつたのは、どうした譯であつたか？ 新しい所有者とは何の事件も起さないで済んでゐるのに、あの技師とは何故相反目してゐたのか？

彼等はこの疑問を、どう解釋していつのかわからずに、たゞ押し黙つてゐた。たゞ一人ヴオロドカは口の中で何か呟いた。

「何、何だつて？」とロヂオンは訊いた。

「俺たちや橋がなくつたつて困らねえつてことさ……」とヴオロドカは陰鬱な調子で言つた。

「橋なんぞ無かつたつて困りやしねえ。橋なんぞ頼みやしなかつたんだ……俺たちにや、橋なんぞ用はねえ……」

誰も彼に答へるものはなかつた。そして沈黙をまもつきたゞ、深く頭を垂れ下けながら歩いてゐた。

氣むづかしい人達

166

管區の牧師であつた故人の父親が、或る將軍の未亡人マダム・クヴンニコフから百〇ニヂシヤチンの地面の寄附をうけたお蔭で、今では小さい農場主になつてゐるイエフグラフ・イツヌヅキツチ・シリヤーエフは、銅板製の洗面臺の前で、その片端の方に立つて手を洗つてゐた。彼はいつもと同じやうに、氣むづかしい、不機嫌な顔付をしてゐた。長く伸びた鬚は、もぢやもぢやになつてゐる。

「何といふ天氣だらう！」と彼は言つた。「こんなぢや天氣とは言はれねえ、俺たちに課せられた呪のろひといふものだ。又、降つて來た！」

彼はぶつくさ呟いてゐた。その間、家族たちは卓の前に坐つて、彼が晝食前に手を洗つてしまふのを待つてゐた。女房のフォードシャ・セミヨノウナ、學生である息子のビョートル、長女のパーバラ、それから三人の子供たち。みんなは長い間坐に就いて待つてゐた。圓つこい顔と、刈

込みのしてない、もぢやもぢやの頭髮をもつた、獅子つ鼻の、小さい、垢じみた子供たち——コルカ、ワンカ、アルヒブカの三人は、待ち通しきうに椅子を動かしてゐたが、大人達は、みんなの晝食のことも、待つてゐることも、まるで氣に留めてゐないかのやうに、ぢつと落着いてゐた。

シリヤーエフは、みんなの忍耐を試してゐるかのやうに、ゆつくりと手を拭いて、ゆつくりとお祈りをあげてから、落ちつき拂つて卓についた。すぐに甘藍スープが運ばれた。大工の斧の響と（シリヤーエフは今、新しい小舎を建築中であつた）七面鳥をからかつてゐる笑聲とが、中庭から聞えて來た。

大粒の雨がばらばらと窓框を叩いた。

肩の圓い、眼鏡をかけた、學生のビョートルは、むしやむしや食べながら、しよつ中母親と眼交ぜをやつてゐた。彼はいく度も匙を置いて、鶴舌り出さうとしては咳拂をした。が、ちらちら父親の容子を窺うかがひながら、再び食べにかゝるのであつた。お終ひにお粥が出ると、彼は思ひ切つたやうに咳拂を言つた。

「僕は今夜、夜汽車で行かなければなりません。もつと早く歸るつもりだつたが、二週間も延ばしちやつた。講義は九月一日から始まるんです。」

「うむ、行くがい、」とシリヤーエフは頷肯いた。「何故、愚圖々々してるんだ。さつきと荷拵へしてゆけ。御機嫌よう！」

ちよつとの間沈黙がつゞいた。

「旅費をやらなければなりませんわ、イエグラフ・イワヌウキツチ、」と母親は低聲で注意した。

「金か？ なる程、金無しぢや行けねえ、要るなら早く言へば、夙にやつたものを。」

學生は微かに溜息をついて、救ひを求めるやうな眼付で母親を見た。シリヤーエフはのろくさと外套の衣兜から紙入をとり出して、眼鏡をかけた。

「いくら要るんだ？」と彼は訊いた。

「モスクワまでの賃銀が十一ルーブリ四十二カベツク……」

「お、金、金、金か？」と父親は溜息をついた。彼は金を見ると、それを受取つた時でさへ、嘆息するのが常であつた。「十二ルーブリお前にやる。過剰は小使にしろ。」

「有難う。」

ちよつと躊躇した後で學生は言つた。

「僕は去年、學期初の間、全然講義を聞かなかつた。今年もまた、どんな具合になるかわからな

い。多分暫くの間は、仕事を探すのに時間をとられるでせう。で、その間の下宿代と食事に十五留貰つてゆかなければなりません。」

シリヤーエフは少しの間考へ込んで、溜息をもらした。

「十留でやれるやうにするんだな、」と彼は言つた。「ぢや、これだけ。」

學生は父親に禮を言つた。彼は服の代や、講坐料や、書物や、その他の雜費に、もつと貰つてゆかなければならなかつた。が、父親の様子をちらりちらり見ながら、彼はそれ以上強請るのを止めてしまつた。

母親は、さこの母親もさうであるやうに、謀略と慎重さを欠いてゐたので、自分を抑制することが出来なかつた。

「そのほかに、長靴代を六ルーブリやつて下さい、イエグラフ・イワヌウキツチ。見てやつて下さい、こんな破れ靴でモスクワまで行けますか？」

「俺の古を一足やれ、まだ立派に穿けるぞ。」

「それに下跨を買はなければいけませんわ、擦り切れちやつて、とても見つともない。」

と、見る見る中に、荒模様の信號が現はれた。その氣配を知ると、家族たちは顔へあがつた。

シリヤーエフの短い、太つた頸は、だんだんと蒸菜の根のやうに赤くなつた。その色は頸から耳へ、耳から鬚へと昇つて、やがて顔一めんにはひろがつた。イエグラフ・イワヌウキツチは椅子の向きを換へて、息苦しさを和げるために下着の襟の釦をはづした。彼が胸に湧き上る感情と闘つてゐることは明かであつた。食卓は森と静まりかへつてゐた。子供たちは息をひそめた。フヨードシヤ・セミヨノフナは、良人の氣持ちには氣づかないやうな風をしながら、續けた。

「ねえ、あれはもう子供ぢやありませんよ。上着なしで歩くのを、どんなに恥かしがつてゐるか……」

シリヤーエフは、突然立ち上つて、分厚の手帳を力一ぱい卓の真中へ投げつけた。その轉みで、大きな麵麩片が皿から飛びだしたほどであつた——憤怒と焦燥と貧愁との、一しよくたに混り合つた——いきり立つ表情が彼の顔一めん燃えあがつた。

「さあ、そつくり持つて行け！」と彼は調子つ端な聲で叫んだ。「掠奪しろ！ 俺を締め殺して、残らず取つちまへ！」

彼は卓から跳びのいて、頭髮を掻きまはしながら、部屋の中を蹴けるやうに歩きまはつた。

「俺の血管を一本残らず抜きとるがいゝ！」と彼は頸へ聲で怒鳴つた。「俺の血を最後の一滴まで

絞るがいゝ。さあ、俺を裸にしろ、俺の首をしめろ！」

學生は、さつと顔色を赧らめて、眼を落した。彼はもう食事を讀けることが出来なかつた。フヨードシヤ・セミヨノフナは、二十五歳まで生長した後で、良人の氣むづかしい性質を知つてから、まだ十分呑み込めてゐなかつたので、先づ自分の方から縮み上つてしまひ、自分に言譯するやうなことを二言三言呟いた。始終陰氣くさく、怯づ怯づしてゐるやうに見える、活氣のない、どこか鳥に似た彼女の顔は、驚駭と一緒に、漠然とした恐怖の色を現はした。小さい子供たちと、まだ十代の小娘である長女のパーバラは、青ざめた、不機嫌な顔色を見せて、匙をおくと、黙りこんでしまつた。

シリヤーエフはますます荒々しくなつて、一さう猛烈な言葉を吐きながら、卓の前に突き進むと、手帳から札を振り落した。

「さあ、持つてけ！」と彼は一枚残さず振り出してしまふと呟いた。「お前は此處でもう十分に食つたり飲んだりした筈だ。金もこの通り此處にある！ 俺はもう一文も要らねえ。お前の長靴や製服は自分で注文するがいゝや！」

學生は顔色を青くして立ち上つた。

「バ、ちよつと。」彼は息喘きながら始めた。「怒鳴るのはもう止めて下さい、何故つて……」
「口を出すな！」と父親は叫んだ。あまり大聲をあげたので、眼鏡が鼻からはづれた。「黙つてろ！」

「僕はいつも……いつも、こんな場面に、すいぶん我慢してゐました。けれども……けれども今日は、もう我慢してゐられません。聞いて下さい、僕はもう我慢してゐられないんです！」
「黙れ！」と父親は叫んで、地だんだ踏んだ。

「お前こそ、俺の言ふことを聞いてるがいゝ！ 言つて聞かせることがあるから、黙つて聞いてろ！ 俺はお前の年頃にや、自分の生活費を稼いだものだぞ。ところが、お前と來たら、俺に何をしたらといふんだ。録でなし！ 追ひ出してやるから、さつさと出てけ、放埒者！」

「イエグラフ・イワヌウツチ」とフョードンヤ・セミヨノウナは痙攣したやうに指を振りながら吃つた。「あんたは……あんたは、ペーチャがどんな気持ちでゐるか知つてらつしやるのに……」
「口を出すな！」とシリヤーエフは彼女に叫んだ。そして激怒のために涙ぐんでゐた。「奴らを甘やかしたのはお前だ——さうだ、お前だ。お前がわるいのだ！ 彼奴は俺たちを大切に思つてゐない。お祈りもしない。そして何一つ働かない！ お前たち十人と戦つてゐるのは、たつた俺一人だ。俺はお前たちを追ひ出してしまひたいんだ！」

口をあけて、ぢつと母親を見詰めてゐた娘のペーペラは、色青さめて、空けたやうな眼を窓の方へそらした。そして痾高な聲をあげたかと思ふと、椅子の上に仰けぞつた。父親は捨科白を残して、大きく手を振りながら、中庭へと驅け下りていつた。

シリヤーエフの家庭争議は、いつもならこれでお終ひになるのであつた。が、けふは不吉にも、學生のピョートルが耐へきれない忿怒を爆發させてしまつた。彼は父親とそつくり同じやうに、又、牧師の地位にあつて、教徒の頭を棒で打つ癖のあつた彼の祖父とも、そつくり同じやうに、短氣で片意地であつた。彼は眞青になつて、拳を握りながら、母親に近づいた。そしてあたりに響きわたる中音の聲で叫んだ。

「こんな喧嘩は實に忌々しいこつてす！ 気持ちが悪くなる！ 僕は何にも要らない、何にも！ 人の金で腹一ぱい食ふよりは、餓死した方がましだ！ この汚ららしい金は返します、さあ！」
母親は自分の前に立つてゐるのが息子ではなく、何かの幻影まぼろしでもあるかのやうに、壁の方へ追ひ詰められながら、両手をひろげた。

「私が何をしたいといふの？」と彼女は涙聲で言つた。「私が何を？」

子供たちは父親と同じやうに、両手を振りながら中庭へと駆け下りていった。シリヤエフの家は、曠野の傍を五露里ほど續いてゐる堀割のやうな谷間に、たつた一軒立つてゐた。一方の側には、櫛の若木や赤楊の茂つた森や、底の方を流れてゐる小河があつた。もう一方の側は、谷間に臨んで、向う側の平野を見渡してゐた。そこには柵も圍ひもなかつた。その代りに、それぞれ用途のちがつた農事用の小舎が、家の前の狭い場所に、幾棟か軒を並べて建つてゐた。その狭い空地は、中庭として使用され、鶏や家鴨や豚が歩きまはつてゐた。

學生は家を飛び出して、平野の方へと泥濘路を辿つていった。空気はしつとりと濕つた秋の薄ら寒さであつた。村道は泥濘つて、そこにも此處にも水溜りが光つてゐた。うら枯れて黄色つばくなつた野良には、うす暗い、物寂びしい秋の氣配が、それとなく滲み出してゐるやうに見えた。道路の右手には、採取を終つた野菜畑があつて、すでに黒くなつた頭を垂れさげた日向葵が、あちこちに、陰鬱な姿をして立つてゐた。

ピョートルは、斯うしてこのまゝモスクワまで歩いて行つたら、どんなに佳いだらうと思つた。縁無帽もかぶらず、穴だらけの長靴をはいて、一カベツクの金も持たずに、このまゝ歩いていつたら！ 父親は、自分が百ウエルストも行つた時分に、喫驚して、あたふたと後を追つて来て、戻

つてくれとか、金を持つてつてくれとか言ふにちがひない。が、自分は振りむきもしないで、ずんずん歩いてゆく……荒涼たる野原を通り過ぎると、裸の森、森を後にすれば、又寂びしい野原。やがての中に、初雪が来て大地は白くなり、河には氷が張るだらう……クルスクかセルプーホウオの何處かで、自分はまだ疲れきつてしまひ、飢餓に襲はれて、行き倒れて死ぬだらう。自分の屍體が見つけ出されると、すべての新聞は、シリヤエフといふ學生が飢餓のために死んだといふ記事をのせるだらう……

尻尾を泥だらけにした一匹の白犬が、野菜畑で何か嗅ぎまはつてゐたが、彼を見ると後からついて来た。

彼は村道を歩きつゞけていつた。そして死について考へ耽り、家族の悲みや父親の悔恨について考へ耽つた。すると、冒險的な旅路に起る、さまざまな場面の——前よりも一さう驚嘆すべき——畫のやうな場所や、恐ろしい夜の光景や、思ひがけない遭遇の有様が、まざまざと幻影に浮んで来た。彼は長い長い漂泊の旅を思ひ描いた。暗黒の中に、小さい窓から灯のさしてゐる森の小舎を思ひ描いた。その窓の前に立つて、一夜の宿を乞ひ、中へ通されて見ると、突然、それが追刺の住家であることがわかるのであつた。或はまた、もつと佳い場面は、彼が大きな莊園の家

に宿ることであつた。その人達は、彼の學生であることを聞くと、食事を出してくれたり、飲みものを出してくれたりしてから、ピアノを弾いて歡待してくれ、彼の哀話に聴き入つてくれるのであつた。そして彼は、その家の美しい娘と戀に落ちるのであつた。

彼の悲哀とかうした幻想とに心を奪はれて、彼は歩きつゞけた。遙か遠方に、灰色の雲を背後として、黒い一つの輪廓を浮彫にしてゐる旅舎が見えた。旅舎の彼方の地平線には、小さい丘陵が見えた。それは鐵道の驛であつた。その驛の丘陵は、今彼の立つてゐる場所と、馬車の往來のにぎやかな、燈火の輝かしいモスクワとの連絡を思ひ起させた。そのモスクワでは、すでに講義もはじまつてゐる。彼は銷沈と焦燥とで、泣き出したいやうな氣持ちになつてゐた。あの秩序と美とをもつた光景、眼の前の死のやうな靜寂、それらは彼を失望させ、彼を立腹させた。「危ない！」不意に背後から大きな聲が聞えた。

彼の隣家の地主で、知己の間柄である年とつた婦人が、輕快なランドー馬車で通りかゝつたのであつた。彼は點頭をして、顔一ぱい微笑みを見せた。そして直ぐに、今の陰鬱な氣分とは、まるで適はない自分の微笑みに氣がついた。胸の裡は苦痛と哀傷とで一ぱいになつてゐるのに、どうして微笑みが浮んだのだらう。人間は精神の張りつめた瞬間にさへ、狐や野鴨の所作と同じや

うに、その巢の秘密を守るに適はしい、偽るといふ本能を自然に授かつてゐるのだと彼は思つた。家族といふものは、それぞれその樂しさと苦しさとを持つてゐるが、その樂しさ苦しさが、どんなに大きい場合であらうと、他人の眼から、それを見透すことは難しいのだ。それは一つの秘密なのだ。例へば、今通り過ぎた老婦人の父親は、皇帝ニコラス第一世の臣下といふ地位に依つて、何事かの犯罪を、半生の長い間押隠してゐた。彼女の良人は賭博者であつた。四人の息子は、一人として善良なものがなかつたので、彼女の生涯には、どれほど悲みの場面があつたか、どれほど涙が流されたか知れなかつた。が、然も彼女は幸福さうに見え、樂しさうに見えた。そして笑顔には笑顔で答へるのであつた。ピョートルは、彼の學友たちが、自分の家族について語るのを嫌ふことを思ひ出した。彼の母親が、良人や子供たちの話をしなければならぬ時には、いつも嘘をついてることを思ひ出した……

ピョートルはうら悲しい想に身を任せて、家から遙かに遠くなつた道路を、夕暗のせまつて來るまでうろつきまはつた。する中に、小雨がはらはらと降つて來たので、彼は家路へ引返した。途上、彼は今日こそ父親に話さう、父親と一緒に暮らしてゐることが、自分にはどんなに慘めで、どんなに耐へ難いかを、如何なることがあつても、斷乎として言つてしまはうと決心した。

歸ると、家内は森と静まりかへつてゐた。妹のバーバラは頭痛を起して、衝立の蔭に横はつて、微かに呻吟つてゐた。母親は詫び入るやうな、おどおどした顔付をして、彼女の傍に置いた箱に腰かけて、アルヒブカの下跨ズボンをつくるつてゐた。イエグラフ・イワヌウッチは天氣の愚痴をこぼしながら、一方の窓際から他の窓際へと往つたり來たりしてゐた。その歩きつきから、咳拂ひの調子から、頭の後具合からさへ、彼が自責の念に苦んでゐることは明かであつた。

「お前は、出發をのばしたんだらうな？」と彼は訊いた。

學生は父親を可哀相に思つた。が、直ぐに、その感情を抑へつけて言つた。

「ちよつと聞いて下さい……僕は慎重に……さうです、慎重に……あなたに言はなければなりません。僕は、いつもお父さんを尊重してゐます……そして今迄、こんな調子で、お父さんに話さうと思つたことはありません。しかし、あなたの態度は……お父さんの今日の行動は……」

父親は窓の外に眼をそらして、一言も口をきかなかつた。學生は額をさすりながら、言ふべき言葉を考へてゐた。そして興奮に苛立ちながら續けた。

「食事の時でも、お茶の時でも、あなたが騒ぎを起さずに済んだことがありません。あなたの麵麩は咽喉にさゝります。麵麩が咽喉にひつ掛かる……それ以上の忌々しい屈辱があるでせうか……」

……あなたは私の父親であらうと、誰も、神様も自然も、弱い者にあなたの不機嫌をぶち撒けたり、我々を侮辱したり恥かしめたりする權利を與へてはゐません。あなたは私の母親をすっかり疲らせてしまひました。奴隷にしてしまひました。私の妹は膽を奪はれて、怯けてしまひました。と
ここで僕は……」

「俺に講義するのは、お前の役目ぢやないぞ、」と父親は言つた。

「いや、僕の役目です。あなたは、どんなにでも好きなやうに僕と争つて構ひません。けれども、お母さんは、静かにさして上げてください！ 僕はお母さんを苦めるあなたを放つておく譯にゆかないのです。」と學生は眼をきらきら光らせながら續けた。「あなたは誰も反抗するものがないために好い氣になつてゐるのです。みんなは顔へあがつて、あなたの言ふことを黙つてきいてゐます。しかし、もう澤山です。呪はれたる偏屈者よです！ あなたは呪はれたる者です……判りましたか？ 氣むづかし屋の、感情の冷たい、呪はれたる人間です。百姓たちだつて、あなたを嫌つてゐます！」

學生はもはや常規を失してゐた。そして饒舌つてゐるといふよりは、むしろ離ればなれの言葉を撒きちらしてゐた。イエグラフ・イワヌウッチは聲にでもなつたやうに、黙つて聽いてゐた。

が、見る／＼彼の頸は眞赤になつて、その色は顔へと昇つていつた。彼は跳び上るやうにしじ、
「黙れ！」と叫んだ。

「ほら、その通り！」と息子は頑張つた。「あなたは眞實を聞くことを欲しないのです。立派な態度です。結構です！怒鳴るがいゝです。立派な態度です！」

「黙れと言つたら！」とイエグラフ・イワヌウツチは吼えた。

フョードシヤ・セミヨノウナは、魂げた面持ちで、眞青になつて、扉口に姿を現はした。彼女は何か言ひ出さうとしたが、何も言へずに、たゞ指をひろげただけであつた。

「みんなお前が悪いんだ、」とシリヤーエフは彼女に向つて叫んだ。「お前がこんな風に育てあげたんだ！」

「僕はもう此處で暮らしてゐたくありません、」と學生は涙聲をあげて、腹立たしげに母親を見詰めた。めながら叫んだ。「僕は、あなた方と一緒にゐたくありません。」

パーバラは衛立の蔭で金切聲を出したかと思ふと、聲高に咽び泣きに泣き出した。シリヤーエフは片手を振つてから、いきなり戸外へ駆け出していつた。

ピョートルは自分の部屋へはいつて、靜かに横になつた。彼は、そのまゝ身じろぎもせず、ち

つと眼をつぶつて、夜中まで横はつてゐた。彼はもはや忿怒も侮辱も感じなかつた。が、胸の奥に一種漠然とした悲哀をしみじみと感じた。もはや父親を非難しようとも思はず、母親を憫みもしなかつた。又、良心の刺戟に苦しみもしなかつた。彼は家中の誰も彼もが、同じ悲哀を感じてゐることを覺つたのであつた。そしてこれ以上、何を非難することがあらうか、何を苦しむことがあらうか、それはたゞ神のみが知り給ふのだ……

夜中に、彼は労働者を呼び起して、曉方五時に出發出来るやうにと、馬の用意を頼んだ。彼は服をぬいで寢床へはいつた。が、眠りつけなかつた。彼は父親がまだ目を覺してゐて、溜息つきながら、曉方近くまで、窓から窓へこつそりと往つたり來たりしてゐる物音を聞いた。誰も眠つてゐるものはなかつた。時折、何か言つてゐるが、ほんの囁き聲であつた。母親が二度衛立の向うから彼の様子をのぞいた。二度とも、空けたやうな眼付をして、神経的に身を顫はせながら、彼の上に十字をきつた。

朝の五時に、ピョートルは愛情をこめた聲で、みんなに左様ならを告げた。そして涙を落しさへした。父親の部屋の前を通りすぎた時、彼は扉口をちらりと見た。イエグラフ・イワヌウツチは、服もぬがず、寢床へもはいらずに、窓際に佇んで、窓硝子をこつこつ叩いてゐた。

「左様なら、僕、出かけます」と息子は言つた。

「左様なら……金は丸卓テンプルの上に置いてある……」と父親は振りかへらずに答へた。

馭者が驛へと馬車を走らしてゐる時、忌々しい雨が降り出した。日向葵は一さう低く頭を垂れ下げ、草原は前よりも更に枯色になつたやうに見えた。

村の一日

朝八時と九時の間。鉛色した一塊りの暗い雲が、太陽の方へとひろがつていつた。その雲のそこ此處をジグザクの赤い閃光が横切つた。そこには遠く鳴りどよむ轟音があつた。生温い風が草の葉をざわざわと騒がせ、樹々の梢を撓め、塵埃を舞ひあげた。今にも五月の驟雨がやつて来て、ほんとうの嵐になりさうであつた。今年六つになる、小さい乞食娘のフョークラは、村の通りを走りながら、靴屋のテレンテイを探してゐた。この少女は白茶けた頭髮をして、素裸足で、顔色は青ざめてゐた。眼は大きく見開き、唇は顫へてゐた。

「テレンテイの小父おぢさんは、何處にゐるの？」と彼女は人に出會ふことに訊ねた。

誰も答へるものがなかつた。みんなは嵐の押し寄せてくるのを恐れて、自分たちの小舎へ逃げこんでしまつた。やつとのこと、彼女は、テレンテイと仲善しである聖堂守のシランテイ・シリイツチに出會つた。彼は風に煽られて、曠きさうになりながら、こつちへ歩いて來た。